1951～1960年

［昭和 26 ～ 35 年］

1951 年（昭和 26 年）2 月 14 日　大雪

所謂台湾坊主の通過による太平洋岸の大雪で，本県では 14 日 9 時頃低気圧が豊後水道沖に接近した時から始まり，伊豆沖に進んだ 22 時頃に終った。県内最大積雪は，鬼籠野 56cm，其他市場・池田・大枝等が 30cm以上。尚，日和佐も 2cmを見たが宍喰には積らなかった。徳島の 29cmは第 4 位の記録である。この雪で交通通信送電関係に被害が出た。

1951 年（昭和 26 年）7 月 1 日　台風ケイト（6 号）

7 月 1 日の夜中に，四国を南西から北東に縦走した小型台風で，降雨期間が短かく大きな被害にはならなかった。上陸前の中心示度は 975mb, 徳島の気圧 991.1mb, 最大風速は東南東の風 21.9m/s, 雨量は最多の那賀川流域で 250 ミリ以上, 大枝で 210 ミリ。少雨域は吉野川流域で, 50 ミリ内外（これらは一日雨量である），徳島 59 ミリ。

被害　家全 1，床上 30，床下 36，田流 377，浸水 5,475，畑流 598，浸水 1,093，道 291，橋 22，堤防 94，船流沈 10，護岸 7，果樹風害 8.8 町，煙草冠水 2,260，桑冠水 2,111

1951 年（昭和 26 年）6 ～ 7 月　梅雨

6 月 14 日以降, 降雨頻繁となり, 27 日より 7 月 17 日の間, 約 20 日間は殆んど毎日の様に雨が降った。県内の雨量は 600 ～ 400 ミリ。この間に 100 ミリ以上の日は, 6 月 28 日, 7 月 1 日（ケイト台風），8，10，12 日等である。このように連続雨に一時的な大雨が加わって，本州中部以西に水害を発生した（死者計 162 不明 144）。本県関係は次の通り。

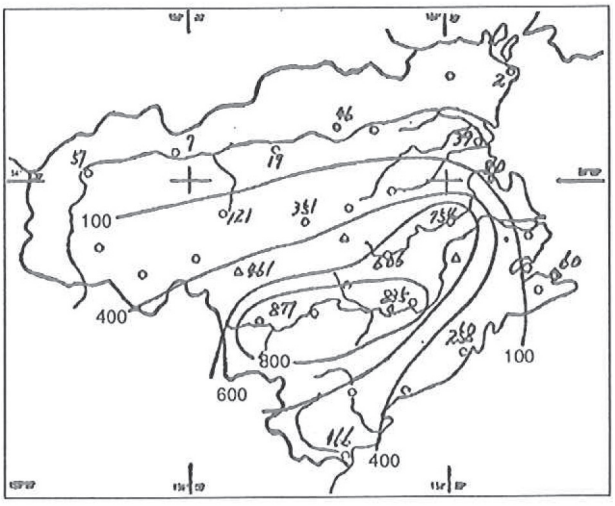
被害　人傷者 3，家全潰 2，床上 27，田流埋 392，畑冠水 65，道 3，山崩 5

1951 年（昭和 26 年）7 月下～ 8 月中　干ばつ

梅雨があけて俄に夏型気圧配置となり，8 月中頃まで連日晴天が続いた（8 月に入って盛んに雷雨が発生）。このため炎熱干ばつに苦しみ農作に被害を出した。

［注］この干害は北海道，北陸を除く全国的なものである。

1951 年（昭和 26 年）8 月 19 ～ 22 日　台風マージ（11 号）



8.16 ～ 22　7 日合計雨量

沖縄から東支那海に入った大型台風であったため，本県もその勢力範囲に入って 16 日から降雨連続し，特に 19 ～ 22 日那賀川流域の多雨帯で各日 100 ミリ以上の大雨があり水害を出した。19 日　桜谷 164，木頭 150，20 日　桜谷 178，福原 172，21 日　木頭 260，桜谷 228，22 日　木頭 209，桜谷 190 等。

このため最多雨地では図のように 800 ミリを越えたが，長期に亘ったので被害は少なかった。

被害　家半潰 7，田冠水 252，道 2，提 1

1951 年（昭和 26 年）9 月　低温

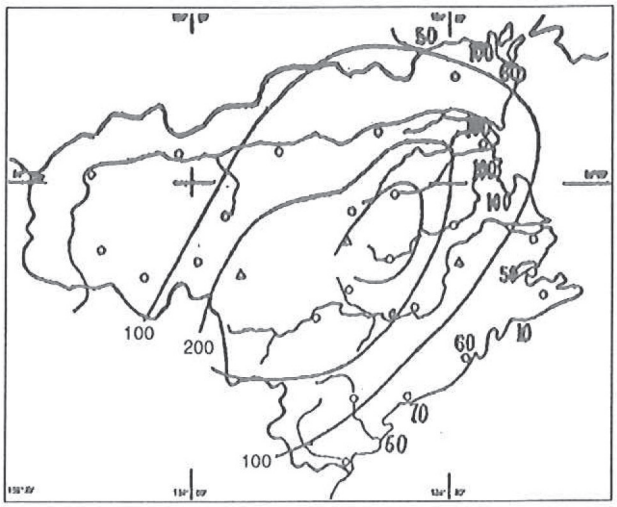
雨量は平年の 1/2 程度であったが，割に曇雨天多く日照も少な目で，平均気温は平年より 1.8 度低目の 21.4℃となった。この値は過去 70 年中で明 32 につぐ第 2 位の低記録である（最低気温の月平均値 18.0 度も同様に第 2 位記録となる）。

1951 年（昭和 26 年）10 月 14 ～ 15 日　台風ルース（15 号）

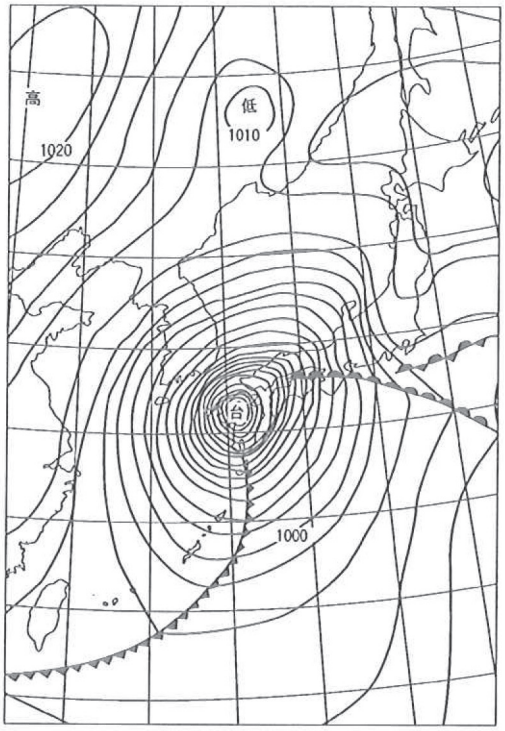
14 日から 15 日の夜に鹿児島から広島を抜けた大型台風で, 北海道関東を除いた地方で被害があった。

死者 572　不明 371

風雨状況　14 日早朝から雨が始まり，台風が九州に上陸してから弱まって驟雨性となったが，風はその反対にこの頃から強く，真夜中前後に最強風になった。徳島の最低気圧 978mb　最大風



ルース台風の雨量と浸水高（cm）



10 月 14 日 21 時

速は南東の風 27.9m/s。県内の降雨分布は上図の通りで，雲早山系で 300 ミリを超え，その外周では減少している。割に短時間の降雨のことで，各河川は大体警戒水位内に止った。

高潮　この台風の被害の主なものは高潮で起っている。小松島の高潮偏差最大は 61cmで，中心が丁度，日本海へ出た頃の 15 日 3 時過だった。県内の浸水高は，上図に記入の通り最大は 1m 位だった。

強風　尚この台風では三好郡の山峡地帯，特に山城谷，祖谷等で近年稀れな突風があって，住家の倒壊人の死傷等を出した。

被害　死者 10 人，傷者 85 人，家全潰 350，半潰 1,390，床上 468，床下 3,706，流 3，道 187 ヶ，橋 52，堤防 120，田流 100 町，浸水 4,398，畑 170 及 357，船 310，三好郡（山城谷　死者 2 人，傷者 10 人　三縄　死者 1 人　西祖谷山　傷者 3 人　全壊　山城谷 27，三縄 27，東祖谷山 7，西祖谷山 20，三名 6，佐馬路 9，三庄 5，箸蔵 4，三野 1）

1952 年（昭和 27 年）3 月 19 日　低気圧（風）

18 日，東支那海で発生した低気圧が急速に発達しながら日本海を北東に進み，太平洋側に副低気圧が発生したので，徳島地方の南東風は 20.2m/s となり，3 月としては第 1 位の記録を作った。

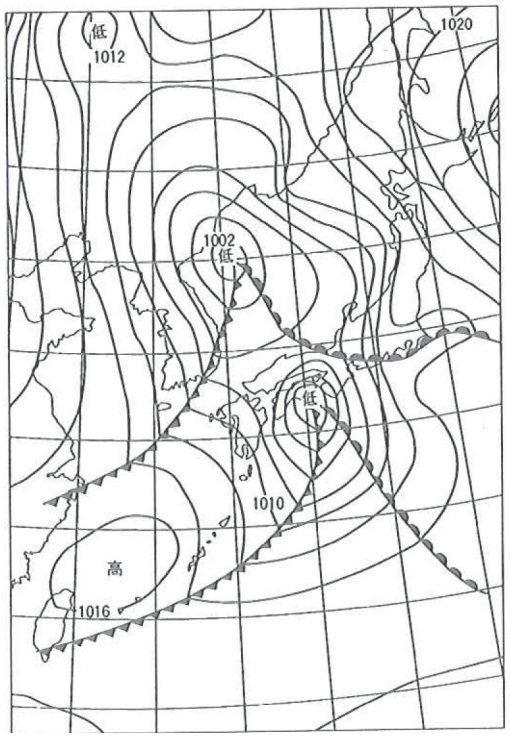
1952 年（昭和 27 年）3 月 22 日　低気圧［福井村豪雨］

この日，北方から東支那海に伸びる気圧の谷で低気圧が急速に発達し，21 時に本県南部に到着した。この時，県南海岸，特に那賀郡福井で雷雨に伴う記録的な強雨があり，水害が発生した。然しこの地方を除いて大雨はなく，県の北半は 50 ミリ以下だった。徳島 41 ミリ最大風速東南東の風 12m/s

福井の時間雨量

15時	16	17	18	19	20	21	22	23	24	計
5.7	3.7	12.6	3.5	6.2	4.5	72.9	160.2	6.7	0.5	276.5ミリ

（最大をとると 60 分に 167.2 ミリ）この一時間強雨は日本としては第一級のものである（昭和 32 年 7 月 25 日



3 月 22 日 21 時

夜の諫早の大雨の時の最大時間雨量は 144 ミリ）。

被害　死者 6 人，傷者 2 人，家全 3，半 18，床上 305，床下 130，橋流 16，提 320m，道 16，田畑流 75 町，農作被害 200 町，山崩 3（4,300 万円以上）

［注］気象台等の一時間雨量記録は　1 位足摺 150 ミリ　2 位銚子 140 ミリ　3 位宮崎 134 ミリ　徳島 87 ミリ

1952 年（昭和 27 年）3 ～ 7 月　多雨

徳島の雨量を平年と比べると

	3	4	5	6	7 月
本　年	144.6	312.1	179.1	340.5	275.5ミリ
平年比	150%	258	135	176	140

上記のように各月引続いて多雨で，特に 4 月の雨量は 70 年内の第 1 位記録となった。これは，又この期間中曇雨天日数の多いこと及び，日照の少いことと関係があり（例えば 4 月日照は少い方からの順位が 6 位，5 月は 7 位等）麦類の収穫も悪い方であった。

1952 年（昭和 27 年）6 月 23 日　台風ダイナ（2 号）

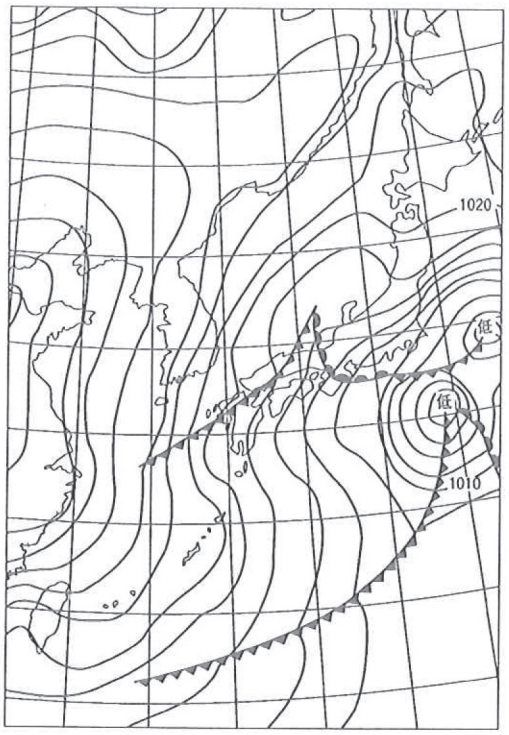
23 日中に沖縄から潮岬のすぐ南方を通過した台風で，本県はその北側にかなり離れていたため大きな被害にはならなかった。だが，県内では 100 ～ 200 ミリの短時間降雨があり，徳島では時間雨量 55.8 ミリの 6 月第 1 位記録を作った。（尚日雨量 205.1 は 6 月としては明治 32 年に次ぐ第 2 位となる）

被害　死者 1 人，傷者 5 人，全壊 2，半壊 6，床上 27，床下 3,263，田畑流埋 4 と 7 町，冠水 5,220 と 980，道 20，橋 6，堤防 7，山崩 22，船流 2

1953 年（昭和 28 年）2 月 21 日　大雪

2 月 20 日夕刻沖縄諸島南方で発生した低気圧が 21 日四国沖を通る時，山陰沖にも副低気圧が発生し，本県では未明から雪となり夕刻まで続いた。山地の多雪地で 30cm位，平地でも 10cm程度となった。最近では昭和 26 年以来である（徳島最深 9cm，切越川井 32，穴吹･池田･桜谷・鬼籠野・岩倉は 20cm以上）。通信交通に若干の被害を見た。

［注］尚本年は 3 月 28 日にも県内全般に降雪があり，徳島では 2cmだった。これ程おそくに積雪したことは珍らしい記録である。



2 月 21 日 21 時

1953 年（昭和 28 年）4 月下旬　火災

4 月 17 日から 28 日の 12 日間は，殆んど降雨なく，特に 21 ～ 25 日は著しく乾燥し，23 日の最少湿度 25%，24 日は 29%と下がり，県内で火災が頻発した。

1953 年（昭和 28 年）5 ～ 6 月　はしか流行

1953 年（昭和 28 年）6 月 7 日　台風（2 号）

この台風は九州西岸中央から瀬戸内を通ったもので，本県では 7 日昼過から短時間風雨が強くなった。徳島の最大風速は南東の風 23.9m/s 県内の雨量は 100 ミリ内外で，大きな被害にはならなかった（最大は谷路 132 ミリ）

被害　全壊 1，半壊 2，田冠水 4，堤 3

1953 年（昭和 28 年）7 月 17 ～ 21 日　前線（大雨）［和歌山大水害］

21 日頃まで梅雨前線停滞の悪天が続き，全国的な水害になった。特に 17 ～ 18 日，和歌山県下

で記録的な豪雨（1日に400ミリ以上）による大災害を発生し，死者639　不明376を出した。幸い本県では，被害軽微にすんだが，雨の多かったのは17，18日と20日で多雨域で夫々100ミリを超え（後者では吉野川上流域で多雨）かなり出水した。

被害　全壊1，半壊3，田冠水733，畑5，道3，山崩6

[注]尚6月24日から29日にかけて北九州中国は大水害となり，死者749人，不明者265人を出した。

1953年（昭和28年）8月下旬　異常気温

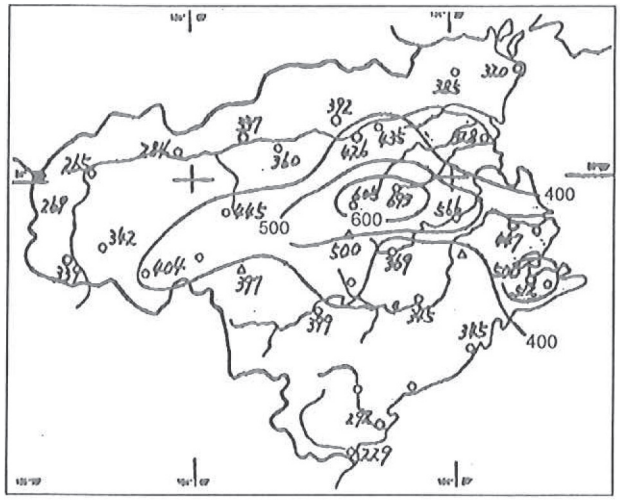
7月23日から割合雨の少い天気が続いたが，8月下旬前半に著しく昇温し，徳島で24日最高気温37.0℃を計った。これは8月として第1位の高温，（これ以上のものは7月の37.1で大3．7．18，大4．7．14）であるが，オホーツク海高気圧が強くなり25日頃から急に涼しく，29日の最高気温は22.7に降った（この温度は珍らしい低さで8月としては記録的である）。

[注] 8月から9月にかけ東日本（特に北海道･奥羽･北関東中部の山間）は凶冷となり，水稲は福島･山梨58%　群馬54　栃木53　埼玉・長野43%減。

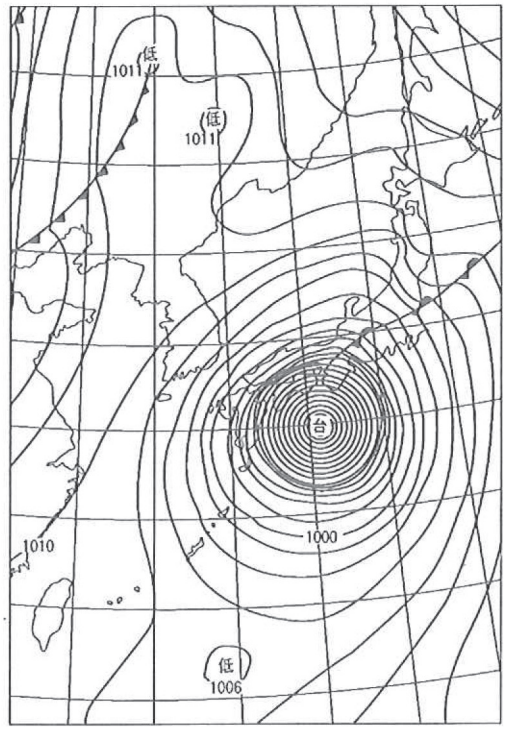
1953年（昭和28年）9月16日　ひょう

此日午後雷雨が発生し，阿波郡市場，八幡を中心として14時頃から15分間の降ひょうと落雷があった。ひょうは市場では1×0.5cm　八幡では直径3.5cm位のまであり多少の被害を出した。

1953年（昭和28年）9月24～25日　台風テス（13号）



9月22日9時～26日9時　4日合計雨量



2月21日21時

このAクラス台風は四国南方から真すぐ潮岬の南まで北上し，そこから北東進して志摩半島と渥美湾に大被害を与え日本を縦断した。全国の死者393名，その内108名は京都府で出している（舞鶴付近の大雨による）。

風雨状況　本県の南東方を稍離れて通った事と上陸前の中心気圧930mbと少し衰えかけていたため，徳島での風は左程強いものでなかった（最低気圧983.4mb最大風速は北西の風22.5m/s）。然し雨は阿久根台風以来と云われる程大降りし，鮎喰川上流で23日から25日の三日間に600ミリを超えた。23日は30ミリ位，24日は早朝に多いところで100ミリ，同夜から25日にかけてのものが台風直接の雨で，毎時10ミリ以上の雨が15時間内外，連続した最大は12～13時に鬼籠野68.7　横瀬59.8ミリであった。

吉野川水位	板野	岩津	第十	新町
	8.6m	6.3	7.15	4.49
（警戒水位	9.0	5.5	6.5	3.5）

被害　低地はんらんで板野郡が最も被害を受け，徳島市，鳴門市がこれに次いだ。尚小松島港での高潮最大偏差は42cmで，沿岸処々に被害を出した。

負傷者 6 人，不明者 1 人，全壊 22，半壊 60，流 9，床上浸水 1,924，床下 8,932，流埋田 20 町，畑 2，冠水田 1,293，畑 31，道 203，橋 70，提 98，山崩 101，船沈 1，流 6，羅災者 43,806

［注］この時の雨が加って徳島の 9 月雨量 531 ミリは第 6 位多雨。

［木頭村誌］森林被害 2 万石以上　室戸台風以来の被害

1954 年（昭和 29 年）1 ～ 4 月　暖冬

昭和 28 年は概して高温に経過した（年平均気温 15.9 は平年より +0.4）が，12 月から 29 年 4 月までの高温は顕著であった。徳島の値は次表の通り。

	12 月	1	2	3	4
月気温（平年より）℃	9.4（+1.9）	7.1（+2.1）	7.1（+2.0）	8.6（+0.6）	14.9（+0.9）
高　温　順　位	4	2	5	−	1
雨量（平年に対する％）	78	177	68	61	158
日照　（〃）	87	68	117	106	100

1954 年（昭和 29 年）3 月　火災

17 日から 26 日まで（移動性）高気圧の範囲内にあることが多く，連日好晴が続き高温乾燥となり，日本各地で火災が頻発した。本県でも家火事，山火事が多数発生した。

1954 年（昭和 29 年）4 月 5 日，11 日　低気圧（大雨）

東支那海から発達しながら北東進して日本海に抜けた二個の低気圧によって，県南海岸よりに局地的大雨があった。

この両者は非常に似た雨量分布をしており，急激な雨だったので多少の被害を出した。

	宍喰	川西	赤河内	日和佐	椿泊	木頭	桜谷
5 日（ミリ）	248	180	167	151	25	115	161
11 日（ミリ）	270	214	198	81	250	153	82

この雨は 15 時～ 09 時の 18 時間位で，徳島の最大風速は南東の風 14.5m/s を観測した。

1954 年（昭和 29 年）6 月 22 ～ 23 日　低気圧（大雨）

22 日 15 時東支那海に発生した低気圧が，23 日早朝に四国沖に東進し，この間に海部郡の海岸で 150 ミリを超える大雨を降らせた（由岐 190，日和佐 173 ミリ）。このため三岐田町で山崩れを起こし，3 名の死傷者を出した。

死者 2 人，傷者 1 人，家全壊 4，山崩 1

1954 年（昭和 29 年）6 月 29 ～ 30 日　前線（大雨）

28 日揚子江下流に出て来た低気圧は北東に進行し，30 日の早朝，朝鮮中部の日本海側に出たが，四国南方に梅雨前線が停滞し剣山山系に大量の雨を降らせた。特に 29 日の夜から 30 日の朝にかけての 15 時間位の間は，雷を伴い多雨域で 200 ミリを超えた（川口 292，祖谷 241，大歩危 238，池田 200 ミリ）。

被害　死者 3 人，傷者 4 人，全壊 15，半壊 43，流 6，床上 165，床下 1,233，道 57，木材流 65 石

［注］西日本各地で小被害がある

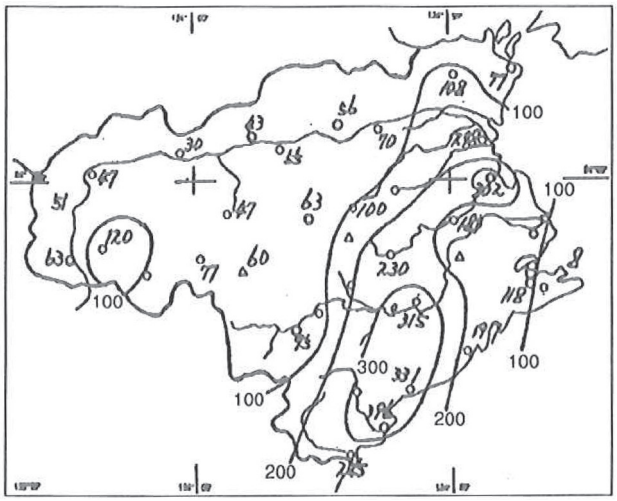
1954 年（昭和 29 年）7 月 30 日　前線（大雨，竜巻）

四国横断の低気圧に伴い終日雷雨があり（徳島で 14 時 02 分ひょう），特に 13 時頃，勝浦川上流から出た雷雨は北東に進行して，経路に大雨を降らせ小松島で竜巻を起した。

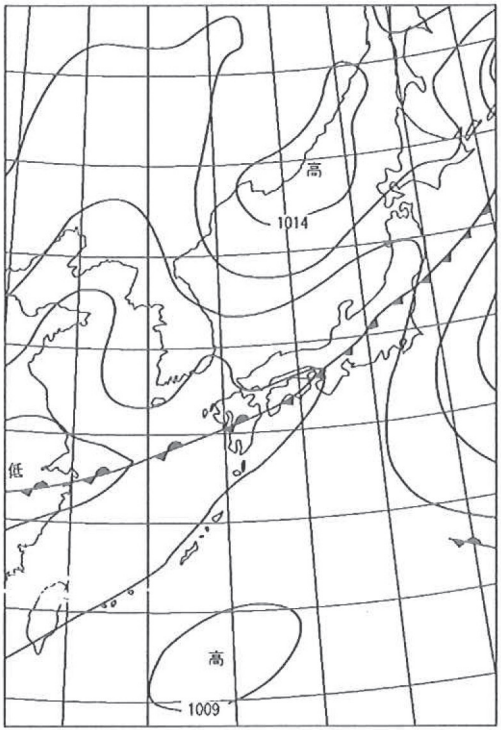
図のように徳島から宍喰にかけて最多区域が出ている。この雨は 30 日の午後から 31 日の昼頃までに降ったもので，川西の最大時間雨量は 106.6 ミリ（23 ～ 24 時）。又小松島では 68.7（1 ～ 2 時）だった。徳島の日雨量（30 日）273.5 ミリは，7 月での第 1 位記録である。

被害　全壊 2，半壊 2，床上 215，床下 1,793，橋 2，道 3，山崩 8，田冠水 2,003 町，畑 118

［注］小松島田浦の竜巻は 13 時 30 分に発生約 2㎞東進して海上で消える。被害の発生は，13 時 40 分頃。巾 50m　全壊家 1，半壊 6，屋根窓ガラスの破損 84 戸，負傷者 1 人



7月30日9時～8月1日9時　2日合計雨量



7月30日09時

1954年（昭和29年）6～7月　低温多雨

5月も曇雨天は20日に達したが6，7月も同様に20日を数えた。且つ各日の雨量も多く，県内で日雨量が100ミリ以上を計った日は，6月では1，6，19，22，28，29日，7月では18，19，30となる。従って6，7月とも平年より甚だ多く，特に海岸よりに顕著だった。県南の川西，宍喰の6月雨量は1,000ミリを超え（1,206及び1,006ミリ），7月川西は806ミリだった。これは同時に低温少照をもたらす，徳島については下表のとおりになる。

	6月	7月
雨　　量（ミリ）	404.2（平均の208%　第4位多量）	483.1（239%　第2位）
気　　温（℃）	20.6（平均より－1.1　第3位低温）	24.1（－1.7　第4位）
日　　照（時間）	131（平均の76%　第8位少量）	156（71%　第6位）

この原因は，オホーツク海高気圧が優勢で，梅雨前線は日本付近及びその南方に停滞することが多かったことと，しばしば大雨を見た為である。然し麦類の収かくはむしろ良好であった（大麦134，裸麦187，小麦178升）。

［注］尚この時に九州より関東に至る各地でも各月2～3度気温低下し冷害になった。

1954年（昭和29年）8月18日　台風（5号グレイス）

18日の3時に南九州阿久根から上陸し，四国を横断して神戸に上陸した。上陸前の中心気圧は940mb，徳島県上で970mbだった。徳島ではこの日朝から夕方まで20m/s位の暴風雨が続き，台風が本県に接近した夜に入って衰えた。最低気圧977.3，最大風は南東の風20.2m/s。

雨量分布　剣山雲早山系が250ミリを越え，その外側に少くなって県南海岸，吉野川平野は100ミリ以下だった。しかし，一宇付近に局地的大降りし，521ミリを計った。これは50時間位の量である。尚この台風の最大高潮量は，小松島で44cm，日和佐で36cmである。

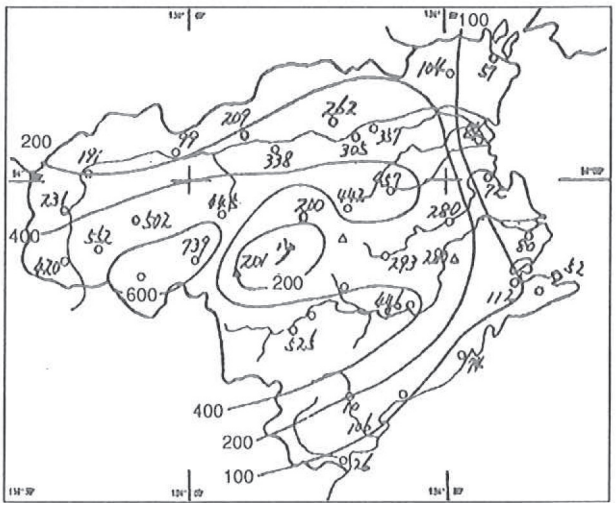
被害　死者2人，傷者1人，全壊6，半壊24，流7，床上23，床下215，田流埋2，冠水田120，畑276，道22，橋1，提1，山崩4

1954年（昭和29年）9月7日　台風（13号キヤシイ）

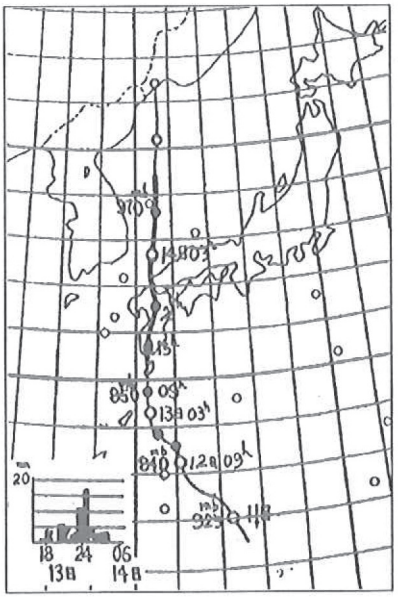
7日の夜九州西岸を北上した中級台風で徳島の最低気圧1,005.3bm，最大風速は南東の風16.5m/s。本県の雨は山地では，7日0時から8日の昼まで，平地では7日の夜から8日の昼までが強かった。最多は木頭の525ミリ（6～8日の3日量），次位は福原の466ミリ，東海岸と県北西部で100㎜以下だった。

被害　不明者 1 人，傷者 18 人，全壊 1，半壊 1，床上 2，床下 26，田流埋 1，冠水田 248，畑 142，道 6，山崩 3

1954 年（昭和 29 年）9 月 13 日　台風ジューン（12 号）



9.12 ～ 13　2 日雨量



徳島毎時雨量　太経路は徳島 15m/s 以上

稀な大きさで北上して来た A クラス台風で，台風眼が特に大きかった（最大直径 200 キロ）。これに反し，中心付近の暴風は予想程に大きくなかったこと，進行がおそく暴風雨の時間が長かったこと，極めて強いうねりで被害を大きくしたこと及び，転向せずにシベリアまで北上したこと等で話題を生んだ台風である（死者 107 人）。

風雨状況　この台風が本邦のはるか南方にあった 9 日頃から海上ではうねりが高く，10 日から被害が出る位になった。13 日の早朝，九州のすぐ南方に近づいた頃から，徳島では 15m/s の風が吹き，14 日の 12 時頃まで，凡そ 25 時間連続した。最大風速は南東の風 32.2m/s（2 時，台風中心が山口県の北へ出た時），最低気圧 985.4mb。雨は 12 日午後から始まり，台風が九州を通過中一段と強くなった。最盛期は日本海に出てからで，山間部で毎時 30 ミリを超え，中でも菅生は 10 時間に 331 ミリを計った。雨の弱まったのは，風と畧同時刻である。

被害　山間部の短時間大雨により各河川は増水し，特に吉野川は空前の大洪水となって所々決壊し，三好，美馬，麻植郡等では家の全壊流失浸水等を出した。洪水予報実施で人的被害は少なかった。尚この台風による最大高潮量（小松島で）は 65cmだった。

水位	池田	岩津	第十	新町
	10.20m	7.80	8.96	5.30
（計画洪水位は　第十 9.00　新町 5.88）				

死者 9 人，傷者 8 人，不明者 1 人，全壊 131，半壊 263，一部 1,902，流 55，床上 2,059，床下 6,886，田流埋 7，畑 66，田冠水 4,289，畑 2,012，船流失 27，破 14，道 152，橋 20，堤防 63，山崖くずれ 104，木材流 880 石，羅災者 20,230

1954 年（昭和 29 年）9 月 18 日　台風（14 号ローナ）

前台風の一週間後に発生した B クラス台風で四国を目ざして北上し，18 日 09 時室戸沖合 150 キロ位から急に北東方向に転向した。徳島の最低気圧 990.3mb 最大風速は北西の風 16.5m/s 小松島港の高潮最大偏差 58cm。雨は 17 日午後から 18 日の夕刻の大体 24 時間に，最多雨域の剣山－雲早山系に 150 ミリを超える程度で大きな被害はなかった。

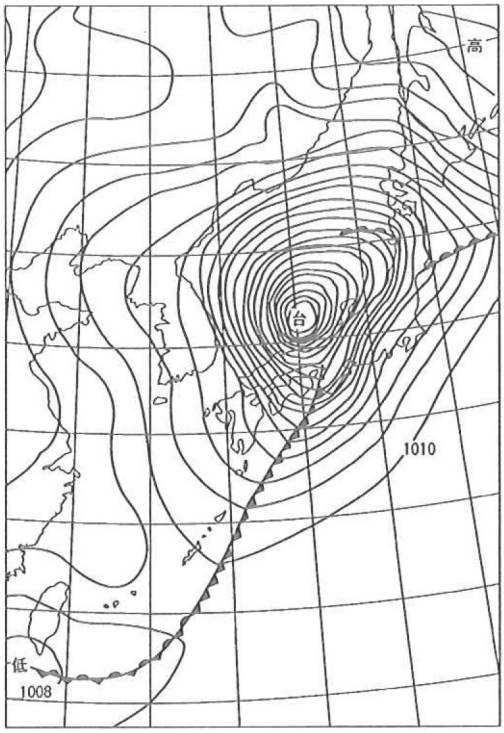
被害　住全 1，半 1，床下 5，田冠水 10 町，道 1，堤 5，崖くずれ 6，羅災者 16

1954 年（昭和 29 年）9 月 26 日　洞爺丸台風（15 号マリー）

台湾東方から北東進し殆んど方向を変えずに多少発達さえもしながら急進して，函館港で連絡船洞爺丸其他を沈没，大惨事を起したことで有名な台風。全国死者は 1,361 名（函館 1,228），不明 400 名。

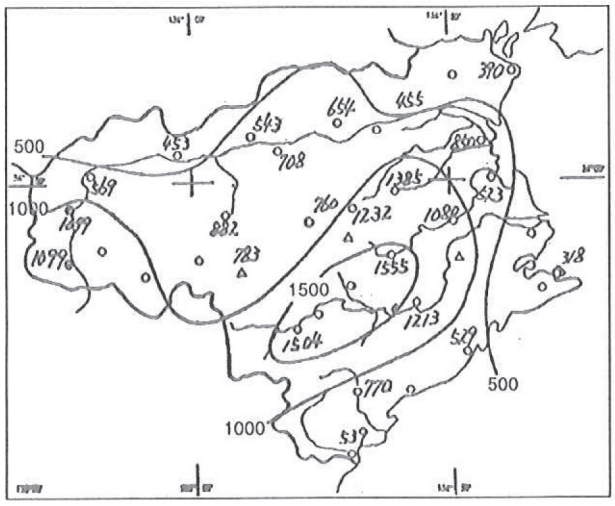
風雨状況　風の強かったのは割に短時間で 15m/s 以上は徳島で 26 日 4 時から 8 時まで。徳島の最大風は南東の風 30.2m/s 最低気圧 982.4mb，小松島港の高潮最大偏差 60cm。雨は 25 日朝から前線による前ぶれが始まり，16 時頃から弱くなった。26 日 5 時から 8 時は台風の雨があって 9 時過天気恢復に向った。福原を中心に 400 ミリと祖谷川上流の 300 ミリの外は一般に少ない。吉野川の水位は 20.5m（11.20）板野 10.8（11.30）岩津 5.52（14.00）川島 4.9（14.30）。

被害　死者 3 人，傷者 116 人，全壊 249，半壊 370，一部 2,232，流 2，床上 121，床下 1,838，田流埋 10，畑 15，田冠水 854，畑 992，道 58，橋 10，山崩 22，船沈 25，流 6，破 29，其他総額 10 億円と云はれる。（り災 636 戸，3,727 人）



9 月 26 日 09 時

1954 年（昭和 29 年）　凶作



昭和 29 年 9 月雨量

稲作にとって大切な 9 月に 4 回も台風の襲うところとなり，雨量も極めて多く，殆んどの地点で平年の倍量以上を計った。最多雨域の福原木頭では 3.5 倍の 1,500 ミリを超え，月雨量としてのレコードを作った。引続く 10 月も北高南低型気圧配置で低温少照に経過した。

徳島（平年比較）			
月	気温（℃）	雨量（ミリ）	日照（時間）
8	27.4度（+1.0）	187.4ミリ（104%）	282.9時（114%）
9	23.7　（+0.7）	527.8　（181）	161.5　（95）
10	16.9　（－0.5）	63.1　（33）	127.2　（76）

これらのため本年の水稲収かくは極めて悪く，昭和 20 年以後の最低記録 139 升に過ぎなかった。（標準量の 71％程度）

［注］6，7 月の梅雨とその後の雨及び 9 月の大雨によって徳島本年の総雨量は 2,459 ミリとなり，明 32，明 29 年に次ぐ第 3 位を取った。又日照時年計は，少い方から第 5 位の記録である。

1955 年（昭和 30 年）2 月 20 日　寒冷前線（風雨雪）

19 日朝鮮中部から北東進した低気圧の寒前線が夜中に本県を通って西よりの暴風となり，徳島で最大風速西南西の風 17.4m/s を計った。寒気の氾らんで気温は 8 ～ 10℃も下り，30 ～ 50 ミリの降雨を見た。又 20 日の夜に入り雪が降り，21 日朝止むまでに，麻植郡を中心に昭和 26 年以来の大雪となった。（海部郡は降らず）

川田 50cm　穴吹 30　鴨島 25　池田 17　徳島　板東　小松島　横瀬　和敷は 10cm又はそれ以上

被害　山（がけ）崩 2，通信被害 2 ヶ所

1955 年（昭和 30 年）3 月　少照

今月の日照時数は 103 時間で，70 年内で第 1 位少照を記録した。これは曇雨天が甚だ多く，不照日は 10 日を数えたためである。一方曇雨天のために気温の降下が妨げられたためか，最低気温の月平均値 6.4 度は 3 月として最も高い値であった。

徳　　島　3 月	平均気温	最高平均	最低平均	雨量	日照時
	9.7℃	13.6℃	6.4℃	85.4 ミリ	103.2 時間
平年気温	+1.7	+0.8	+2.7	87%	57%
順　　位	7	10	1	−	(1)

1955 年（昭和 30 年）4 月 15 ～ 16 日　前線（大雨）

不連続線による大雨で，佐世保のボタ山崩壊事故を起した。14 日黄海に入った低気圧が 16 日まで停滞し，17 日漸く東進したがこの間本邦に前線が停滞した。16 日午前中の本県の大雨は 50 ～ 130 ミリ。15 ～ 17 日の三日間雨量分布は，県南が 150 ～ 200 ミリ，吉野川流域で 100 ミリ以下だった。

被害　全壊 1，半壊 3，田冠水 70，道 2，山崩 1

1955 年（昭和 30 年）6 月 17 ～ 19 日　梅雨前線（大雨）

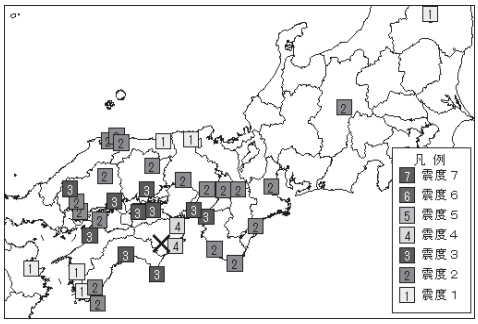
低気圧は黄海にあって強いものでなく，梅雨前線によって四国九州に大雨が降った。本県では南部で 17 ～ 18 日，北部で 17 ～ 19 日の間に 100 ～ 150 ミリ降り，多少の被害を出した。被害　田冠水 3，道 1，山崩 1

1955 年（昭和 30 年）7 月 16 日　台風（8 号）

16 日四国沖を北西進して九州南部を横断した中心気圧 995mb の弱い台風，剣山周辺に 200 ミリ位の雨の外一般に少く被害も道路 2 ヶ所の程度で終った。徳島の最大風速は南東の風 17m/s

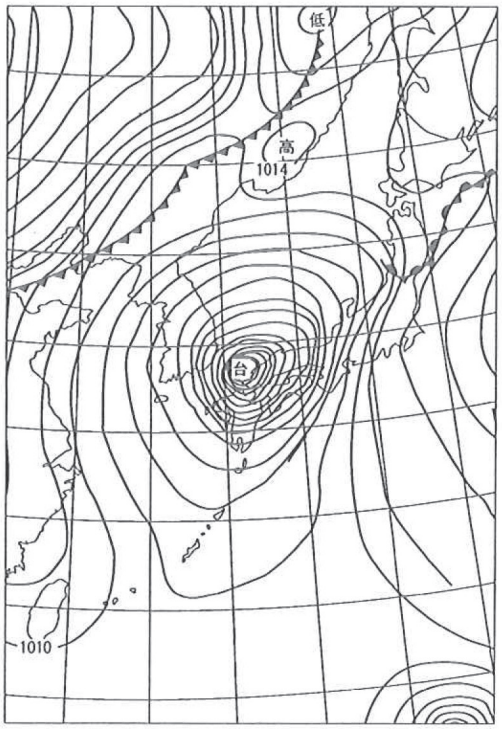
1955 年（昭和 30 年）7 月 27 日　地震

10 時 20 分に徳島県南部（33° 45.6′ N　134° 15.6′ E）の深さ 3km を震源とするマグニチュード 6.4 の地震が発生。この地震により徳島、日和佐（旧気象通報所）で震度 4 を観測したほか、中国・四国地方を中心に東北地方から九州地方にかけて震度 3 ～ 1 を観測した。また、徳島測候所の現地調査によれば那賀川及び海部川上流域で震度 5 の地域があったと推定される（『験震時報第 21 巻第 1 号』、昭和 31 年 6 月、中央気象台）。



震度分布×震央

この地震により、死者 1 名、負傷者 8 名、山崩れ、道路破損・亀裂、トンネル崩壊等の被害が生じた。



9 月 30 日 09 時

1955 年（昭和 30 年）7 月下～ 8 月中　干天

7 月中旬は台風の近海停滞によって雨天が多く，漸く 24 日から晴れて，8 月の 21 日まで全般的な雨を見ず。干天は 28 日間連続し，8 月 21 日の前線性降雨は農家や発電関係に大変喜ばれた。

1955 年（昭和 30 年）9 月 30 日　台風（22 号ルイズ）

29 日九州内陸を西寄りに真すぐ北上した B クラス台風で，北海道に再上陸したため，関東近畿を除いた各地で被害があった。本県では 27 日夜から前ぶれが始まり，29 日夜から 30 日朝にかけての台風の雨が最も強く，以後次第に

小降りになった。27 日 15 時～ 1 日 16 時の総雨量は雲早山系が 470 ミリ，次は祖谷川上流が 380 ミリ，平地は全体に少く 50 ミリ程度だった。

徳島の最低気圧 998.4mb　最大風速は南東の風 24.8m/s

15m/s 以上の暴風は 30 日 0 時～ 14 時，尚小松島港の高潮量は 30cm。

被害　全壊 4，半壊 14，床上 1，床下 15，田冠水 87，畑 250，道 10，橋 1，山崩 7

1955 年（昭和 30 年）10 月 4 日　台風（23 号マージ）

4 日豊後水道を北西進して日本海岸に出てから北東に転進した小型台風で，沿道の諸県に被害が出た。本県は大部分が 3 日 9 時過頃から風雨となり，4 日の早朝が最も強く 18 時頃には大体終った。総雨量は前台風同様，雲早山系を中心に 250 ミリを超え，その外側に減少し平地は 50 ミリ程度だった。徳島の最低気圧 1009.1mb　最大風速は東南東の風 17.1m/s

被害　傷者 1 人，床下 9，田冠水 68，畑 18，道 3，提 1，山崩 4

1955 年（昭和 30 年）10 月 20 日　台風（26 号オパール）

四国の南方を通って紀伊半島南部に上陸したＣクラス台風で，20 日早朝から風雨が強まり夕刻には晴れた。

県内の総雨量は 60 ～ 100 ミリ程度である。最低気圧 998.2mb　最大風速は西の風 15.3m/s

被害　床下 2，田冠水 1，道 2，山崩 2

1955 年（昭和 30 年）　豊作

この年は全国的に史上空前の大豊作となった。この原因は良い気候に恵まれたという以上に，最近の農業技術，特に農薬の進歩に負うところが大であると云われている。それはこの年以後の各年が従来の農作以上の収穫をもたらしている事からも考えられる。

昭和（年）	30	31	32	33	34	35	36	37	昭 8
全　　国	1238 万トン	1090	1146	1169	1250	1285	1214	1301	1061
徳　　島	11.5	9.7	9.8	9.9	10.8	9.9	9.3	11.0	9.4

参考のため本年の気候を示すと

	6 月	7	8	9	10
気温（℃）	22.8（平年より+1.1）	26.4（+0.7）	26.9（－0.3）	23.5（+0.3）	17.7（+0.2）
雨量（ミリ）	207（平年の106%）	138（69）	203（107）	99（33）	236（123）
日照（時間）	143（平年の82%）	222（100）	245（100）	190（112）	127（77）

以上のように特徴は少ないが 7，8 月旱天があったこと，9 月の少雨多照が有効であったと思われる。

1956 年（昭和 31 年）5 月　多雨

本邦南方海上は前線帯となって，しばしば低気圧が通過し，下旬（22 日）に梅雨に入ったので曇雨天極めて多く（20 日位の雨），雨量は平年の 2 倍以上になった。徳島で月雨量 296.6 ミリは第 3 位の多量，又日照時数 119.5 時間は第 1 位の少照記録である。

［注］この結果麦類の収かくは可成り不成績だった。

1956 年（昭和 31 年）7 ～ 8 月　干天

7 月上旬梅雨明け後，16 日にかなりまとまった雨が降った外は，小範囲の雨が数日あっただけで，8 月 15 に及び 30 日程度の無降雨となった。県下全般的に阿波麻植・美馬郡等，水利の不便な地域で干天被害が起り始めた。丁度この折下記台風の襲来があって，干ばつの危機を免れることが出来た。

1956 年（昭和 31 年）8 月 16 ～ 17 日　台風（9 号バブス）

この台風は九州の西岸を夜の間に通り，17 日の朝山口県沖を北東進したＢクラスのもので近畿以西に被害があった。徳島の最低気圧 989.7mb　最大風速は南東の風 24.2m/s，15m/s 以上は 17 日 04 ～ 12 時。

本県の風雨は16日の夜から17日昼過ぎまで15～20時間，祖谷川が多雨で400ミリを超えたところ(祖谷一宇)もあるが一般に少く，雲早連山でも200ミリに達せず海岸地方は50ミリ以下だった。

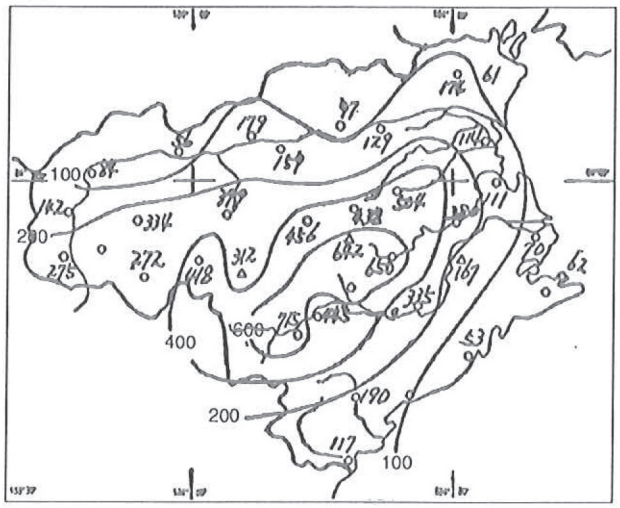
被害　床上浸水5，冠水田2，畑2，道3，橋流1

1956年（昭和31年）9月10日　台風（12号エマ）

上記の9号台風と殆んど似た経路をとって，10日に東支那海から日本海へ抜けた。発生直後，硫黄島から一時南西進の異常経路をとり，沖縄付近へ北上した時，中心気圧930mbに発達した等の異常台風で，雨量が多いことと，うねりが高かったこと等の特徴がある。

風雨状況　7日未明からうねりが高くなり，その午後から俄雨が強くなった。8日は強い俄雨で，県南東部の多雨地帯では100～200ミリ，9日は200～300ミリになった。10日9時以後大降りはなく，午過に終った。

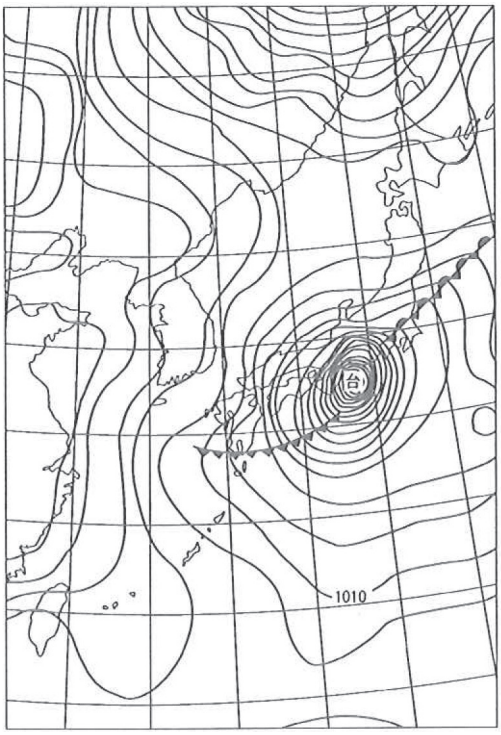
徳島で15m/s以上の風は9月18～10日09時。最大風速は南東の風23.8m/s　最低気圧999.1mb，小松島に於ける高潮量は25㎝である。



9.7　9時～11時　9時　4日合計雨量

被害　死者1人，全壊5，床上1，床下21，田冠水255，畑367，道8，橋1，山崩15，木材流60石

1956年（昭和31年）9月26～27日　台風（15号ハリエット）



9月27日09時

夜の間に四国沖合を通過したBクラス台風。北海道以外に被害があり死者20。

本県では24日の夜から雨のところあり，25日夜からの連続強雨は27日の朝に及んで200～360ミリに達した。総雨量は祖谷川上流と雲早山系が400ミリを超え，特に富岡では局地的に517ミリを計った。この東西一連の多雨帯の南北で少く200ミリになっている。那賀川流域で増水害を出した。徳島の最大風速は西の風12.0m/s。

被害　全壊3，半壊3，床上132，床下924，田流埋1，冠水1,264，畑215，道9，橋2，堤防8，山崩23

1956年（昭和31年）10月8～9日　低気圧（大雨）

8日東支那海に発生した低気圧が北東進し，日本海を通過中顕著な寒冷前線が9日早朝四国を通過した。この前後に本県でも局地的集中雨があって，那賀川中流で200ミリを超した被害が出た。漁船流失27，崖崩れ2，橋1

1956年（昭和31年）10月30～31日　低気圧（大雨）

30日東支那海で発生した低気圧は既に四国の南方に出来ていた前線を北上させ，雷雨に伴う強い雨を降らせた（17～21時）。この日の雨量は椿泊264ミリ。富岡249ミリ。徳島の155.4ミリは10月第4位の記録となる。

被害　山崩　橘町（下福井）1，田冠水　橘3，羽ノ浦2

1956 年（昭和 31 年）12 月　低温少雨

低温干ばつの傾向は 11 月から続いており，特に 12 月に著しくなった。これは冬型気圧配置が卓越したためで，乾燥した晴天が続いて各地に火災を出した。尚少雨の傾向は翌 32 年 1 月に及んでいる。

月	気温(℃)	雨量(ミリ)	湿度(%)
11	12.0（平年より－0.3）	42.9（47%）	77（+4%）
12	6.1（－1.4）低温 5 位	4.1（7）少雨 3 位	58（－11）

［注］この異常乾燥は，北陸・東北を除く全国的なもので関東の無降水は 40 日以上続いた。

1957 年（昭和 32 年）3 月 21 日　山火事

中旬から雨らしい降りがなく低温で乾燥した天気が続き，21 日には顕著な寒冷前線が通り北西の突風があって最小湿度は 23% まで降った。21，22 日県下で 11 件の山火事が発生し 450 町歩を焼いた。この日は近畿，中国，四国と広範囲に亘って山火事を出している。

［注］乾燥した天候はこのあと 4 月半ばまで続く。

1957 年（昭和 32 年）6 月 27 日　台風（5 号ヴアジニア）

台湾を通って 27 日早朝九州の西で消え，丁度この時五島に進んで来た低気圧に肩変りした C クラスの台風で，大した暴風雨はなかった。県下の雨量は，前年 8 月の 9 号台風とよく似ており，祖谷川上流で 400 ミリ，那賀川・勝浦川の中流で 200 ミリ。徳島の最大風速は南東の風 12.5m/s。

被害　田冠水 250 町，道 5，山崩れ 2

1957 年（昭和 32 年）8 月 20 日　台風（7 号アグネス）

九州西方を通って朝鮮を北上した A クラスの台風であったが，本県とは距離も遠いので，被害は大きくなかった。徳島最低気圧 1,002.2mb，最大風速は東南東の風 19.0m/s。県内の雨は，台風が沖縄を越えて東支那海に入った頃から強くなり，20 日の夜が最も強く 21 日夕方で大体収まった。最多雨域は雲早山の東麓で 500 ミリを超え，大部分の海岸と吉野川流域は 100 ミリ以下であった。

被害　全潰 1，半潰 2，冠水田 2，畑 1，道 2，山崩 13（2 世帯）

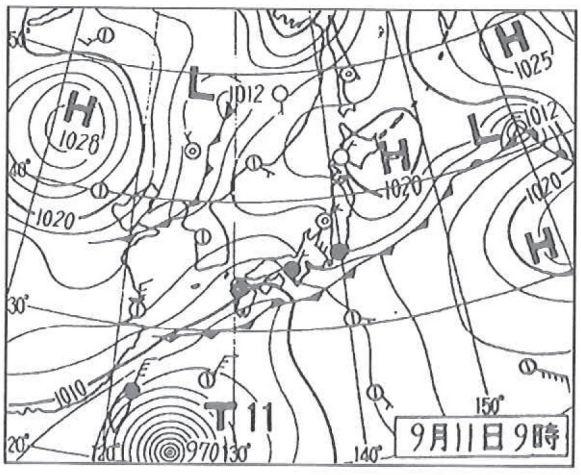
1957 年（昭和 32 年）8 月 23 ～ 24 日　台風（9 号）

23 日四国の南方から真すぐに北上した弱い台風で，徳島の最大風速は東北東の風 10.8m/s に過ぎなかった。この時は最多雨量は川上の 268 ミリで，雲早山系が 150 ミリ，其他は少なかった。

被害　床下 1 戸，水田冠水 70 町，道 3，山崩 1（海部郡）

1957 年（昭和 32 年）9 月 7 日　台風（10 号ベス）

西日本の沖合を西進し，名瀬の西から急に向を変えて北東に進み，九州南部・四国北西部を通った B クラスの台風で，通路の奥羽北海道外でも被害があった。徳島の最低気圧 992.8mb，最大風速は南東の風 23.9m/s。15m/s 以上の風は 7 日 4 ～ 15 時。雨は 6 日の夜台風が宮崎県に入った頃から強くなり，高松沖へ出る 7 日 15 時頃まで続いた。剣山，雲早の南東斜面で 300 ミリ以上（出原 352），その東と北に減少して 100 ミリ以下だった。



被害　床上 3，床下 81，田冠水 328，畑 254，道 1，橋 1，山崩れ 7（3 世帯）

1957 年（昭和 32 年）9 月 9 ～ 11 日　前線（大雨）

10 号台風通過後四国沖に前線が停滞したが，11 日には北上し且つ低気圧も発生する等で特に雨量が多くなった（11 日川西 169，川上 146 ミリ）。3 日間の合計雨量は，県南東端が 300 ミリ，北西県境に低下して 100 ミリである。

被害　死者 1 人，傷者 4 人，半壊 1，床上 1，床下 133，水田冠水 492，道 8，橋 2，山崩れ 18，木

材流 82 石

1957 ～ 58 年（昭和 32 年 11 月～昭和 33 年 4 月）　暖冬

下記の通りにかなり温暖多雨だった。

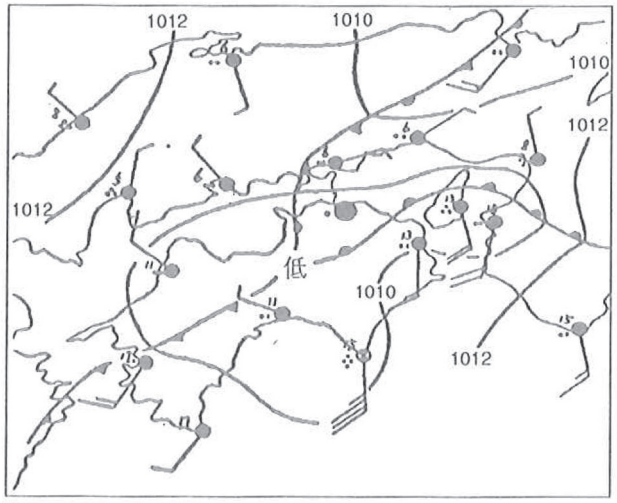
	11	12	1	2	3	4
平均気温(℃)	13.4(平均の+1.1)	8.6(+1.2)	5.5(+0.6)	6.5(+1.5)	8.8(+0.9)	14.4(+1.0)
雨　　量(ミリ)	37(40%)	58(112)	34(81)	116(184)	158(162)	195(156)
日　　照(時間)	177(109%)	131(82)	171(105)	182(117)	194(107)	160(82)

気温の高い方からの順位は 11 月 8 位，12 月 7 位，2 月 9 位，4 月 5 位

1958 年（昭和 33 年）1 月 26 日　南海丸沈没

17 時 30 分小松島港を出発した南海汽船株式会社の紀阿航路定期船南海丸（498 トン）は，18 時 30 分頃沼島の南東方で「キケンキケン」の無線連絡をしたまま沈没し乗客 139 船員 28 名全員遭難した（本船は約 1 年後に引上げ鳴門丸と改名して就航する）。

当時の気候は次図に示したとおり気圧の谷に伴う温暖・寒冷両前線の中間の南風域内で起った事件である。翌 27 日にはこの谷が日本の東の海上に出て発達し，中華東部の高気圧との気圧傾度が大きく，15m/s 位の強風が吹いた。遭難当時の付近各地の風は



26 日 18 時［黒丸の左の小粒は雨の程度を表す］

26 日	徳島	沼島	洲本	和歌山
18 時	南 4.6	南南西 8.0	南 10.3	南南西 10.8
19 時	南 8.4	南南西 9.6	南 11.7	南南西 10.5

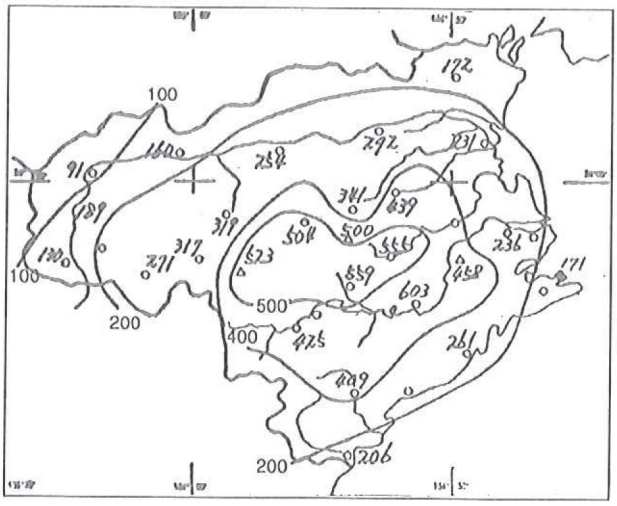
（沼島は現地の山上に設置してある兵庫県の風速計による）これらは決して強いものではない。海上は前表から推察すると，13 ～ 20m/s 位と考えられる（沼島での最大風速は 20 時 15.2m/s)。この程度の風では遭難の直接原因とは考えられない。従って，この南の強風中に高くなった波浪の影響が大きかったのではないかと見られている。現場の近くを通った大阪商船あふりか丸の観測によれば 16 時 20 分には南の波浪 6 ～ 9m を，又巡視艇あおりも 20 時 40 分に航行困難なうねりと波浪を経験している（潮流については異変なし）

1958 年（昭和 33 年）3 月 31 日　霜害

中旬からずっと温暖傾向を続けていたが，26 日優勢な大陸高気圧が現れて冬型気圧配置に逆もどりした。31 日には移動性高気圧となって本邦を通過した。このため関東以西の各地で記録的な低温となり，凍霜害が発生した。徳島でも 31 日の最低気温－ 1.9 度は下旬として第 1 位の低極であった。麦類にとっては上記の暖冬に加えて急激な寒害のため，15,960 町歩，7,794 トンの被害となり，反収は大麦 109，裸麦 141，小麦 152 升であった。

1958年(昭和33年)8月25日　台風(17号フロシー)

四国沖を真すぐ北上して，25 日紀伊水道を和歌山から上陸した C クラスの台風。三重愛知で

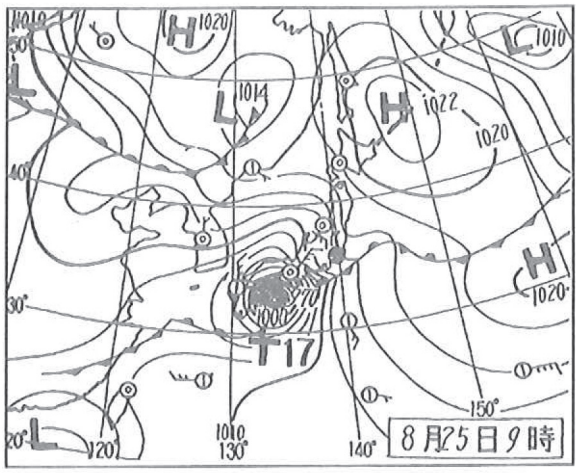


8.23　9 時～ 26　9 時　3 日合計雨量

水害が大きかった。

風雨状況　本県では23日の夜から前線北上による大雨が始まり，25日18時台風が上陸するまで続いた。従って雨量は極めて多く，23日横瀬286ミリ，日野谷278，福原旭210，24日坂州278，木頭267，川井263，鬼籠野225，福原旭208，25日日野谷156等を計った。合計雨量は前図の通りである。

徳島で15m/s以上の風が吹いたのは，25日14～19時の6時間。最大風速は北北東の風21.6m/s　最低気圧988.8mb。



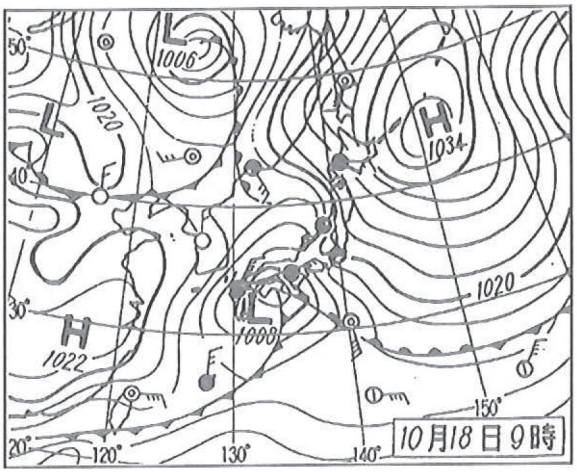
被害　全壊2，半壊3，床上2，床下108，田流4.5，冠水465，畑7，道7，橋3，堤6，山崩28，通信3

1958年（昭和33年）9月17日　台風（21号ヘレン）

南方海上を北東進して東京に上陸したBクラス台風。主に関東東北に被害があり，全国死者25名を出した。本県は南部海岸特に牟岐で大雨があった外，大きな雨は無かった。牟岐の15日雨量368ミリ。徳島の最大風速は北の風16.6m最低気圧991.9mb。

被害　田冠水25，提1，道3，山くずれ5

1958年（昭和33年）10月18日　低気圧（大雨）



低気圧が四国の南岸ぞいに東進し，高知から和歌山間で短時間の大雨となり被害が出た。本県では18日の朝日野谷で328ミリ，川西270ミリ，宍喰232ミリ等を計った。県南河川はん乱し，丁度刈取期の稲穂を流し，死傷者を出す等の被害になった。

被害　死者1人，傷者1人，半壊1，床上57，床下221，田畑流埋129，冠水312，道15，橋4，堤4，山崩れ10，鉄軌道2，通信2回線

1958～1959年（昭和33～34年）　温暖

この暖侯は下表の通りに甚しい異常を示した。

	12	1	2	3	4	5
平均気温(℃)	9.6(平年より+2.2)	4.8(－0.1)	8.5(+3.5)	10.2(+2.3)	14.8(+1.4)	18.7(+1.0)
高温順位	2	－	1	3	2	5
雨　　量(ミリ)	88(平年の170%)	39(93)	63(100)	101(104)	215(172)	130(95)
日　　照(時間)	182(114%)	171(105)	93(60)	200(110)	179(91)	191(90)

この長期に亘たる温暖多雨は，麦作に多少の被害を出した。また，海水温の上昇で養殖海苔腐敗の被害は7～8割に及び，鰤の水揚げは皆無だった。

1959年（昭和34年）1月16～17日　低気圧（風雨　低温）

16日日本海に入った低気圧は急に発達し，徳島でも13m/sの強風を観測した。夜からは雪になって近年稀な積雪を見た。徳島では5cmだったが愛媛県では殊に県南が激しく大洲で57cmを計った

程で，交通に大きな障害を出した（尚南国鹿児島でも 10cm と云われた）。この時は大陸高気圧は 1,060mb を示し強い寒気が南下して来たので，朝の最低気温は徳島で－ 3.7℃，日和佐で－ 6.7℃を記録した。本県では積雪による山崩れがあった。

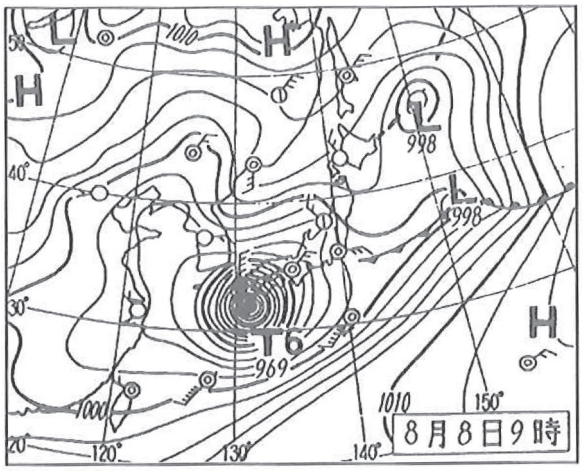
1959 年（昭和 34 年）7 月 13 ～ 15 日　前線（大雨）

梅雨前線は早く北上し，空つゆ気味で 7 月に入ったところ 11，12 日北陸で，13 日以降西日本でところどころ集中大雨があり，死者 44 名を出した。徳島県では 13 日夜から 15 日にかけて雨が降り続いたがそれ程の大量にならず，最多地剣山の 331 ミリの外は割に少なく県の北半は 100 ミリ以下だった。

被害　負傷者 1 人，全潰 1 戸，道 1

1959 年（昭和 34 年）8 月 8 日　台風（6 号）

鳥島を中心に円に近い動きをし，8 日朝九州南端から夜中に四国南東部を掠めた B クラス台風。九州南部から東北南部に水害を出した。徳島県では 6 日朝から雨が始まり，8 日朝強くなり 9 日朝まで続いた。台風の通路に近かったため雨量は割に多く，8 日の日雨量最大は福原旭 338 ミリ　松尾川 331 ミリである。6 日朝 09 時～ 9 日 09 時の三日合計雨量は剣山で 500 ミリを超え，これから雲早山系に多く別に松尾川流域で 400 ミリを超えた。これらの北方と海岸にかけて減少している。徳島の最大風速は東南東の風 14.9m/s　最低気圧 976.3mb。



被害　浸水床上 21，床下 62，田冠水 129，畑 24，道 7，橋 2，山崩 20，鉄道 1，通信 11，漁船流 2

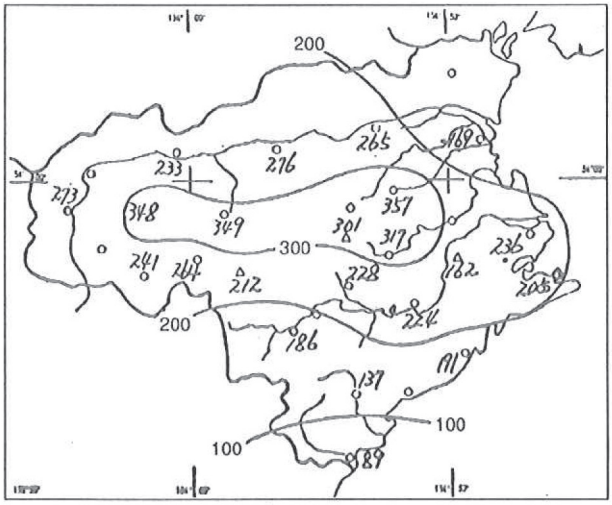
1959 年（昭和 34 年）9 月 16 ～ 17 日　台風（14 号）

本邦の西を迂回して日本海を北東進した A クラスの台風。距離があったため本県の被害は少なかったが，宮古島では最低気圧 908.4mb を記録し最大風速は南西の風 53m/s を計った。全国死者 40 名の内，長崎県と北海道で 25 人になる。県内の二日間の雨量は，剣山雲早山川上の広い範囲で 200 ミリを超え，阿讃山脈の少雨地は 20 ～ 30 ミリだった。徳島で 15m/s 以上の風は 9 ～ 16 時，最大風は南南東の風 21.6m/s 最低気圧 998.4mb。鳴門では 14 時 50 分頃竜巻による被害を出した。

被害　傷者 1 人，全壊 1，床上 1，床下 30，一部破損 30，道 4，山崩 4，通信 7

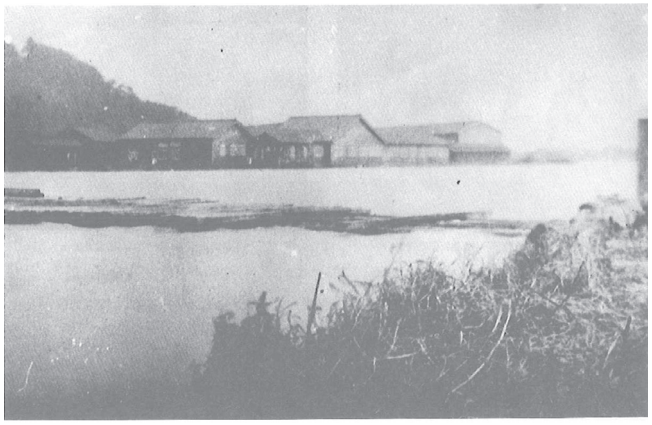
1959 年（昭和 34 年）9 月 26 日　伊勢湾台風（15 号）

潮岬の西から紀伊半島に上陸した A クラスの大台風。九州以外の各地に被害があり，特に名古屋は水害，高潮害が重なって全国死者 4,759 名の内 3,000 名を出した。上陸した時の潮岬の最低気圧は 929.5mb（18 時 13 分），本邦海岸の観測地でこれより深いものは室戸，第二室戸，枕崎台風のみである。且つ暴風圏が非常に大きく，しかも上陸後も勢力があまり衰えなかったため，風による被害が大きかった。伊勢湾では 3.55m の高潮を起こし，潮水と雨水との両方に攻められて未曾有の災害となった。

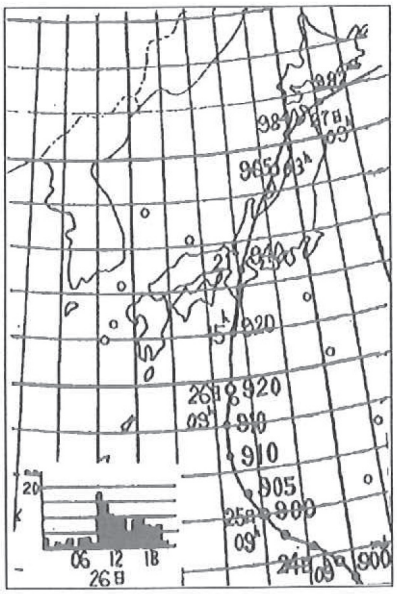


25 日 9 時～ 27 日 9 時　2 日合計雨量

風雨状況　25 日の午後からボツボツ降雨 26 日



流失寸前の徳住橋　伊勢湾台風（徳島新聞社提供）



徳島雨量　太経路は徳島 15m 以上

午後暴風雨圏内に入り，15m/s 以上の風は 15 ～ 20 時の 6 時間。最大風速は徳島で北の風 26.4m/s 日和佐で北西の風 16.7m/s だった。

雨が上ったのは風の衰え始めた 21 時間前後で，県内の雨量分布は図の通り。阿讃山系に比較的多雨であり，同方面の河川被害が目出った。特に銅山川で 15 ～ 20 時に 230 ミリの豪雨であって，ダムコントロールの方法と下流の山城町に発生した被害について建設省と地元との間に問題が起った。徳島最低気圧 967.0mb

被害　死者 4 人，傷者 24 人，不明者 1 人，全壊 25，半壊 37，流 1，床上 438，床下 1,882，一部破損 105，田流埋 6，冠水 2,907，畑流埋 5，冠水 264，道 77，提 39，山崩 53，鉄道 2，通信 14，橋 17，木材流 25 立方米，船沈 1，流 3，破損 30，漁船 10

高潮　この台風による小松島港の高潮量は 74cm，県南海岸では処々で堤防決壊があった。

1959 年（昭和 34 年）10 月 18 日　台風（18 号）

本邦の稍南方を通った台風で，県内では大した風雨にならなかったが，県西部で山崩 2 ヶ所発生した。徳島の最大風速は北の風 9.1m/s。



阿南市見能林町中林海岸（徳島新聞社提供）



土成町の災害現場（徳島新聞社提供）

1959 年（昭和 34 年）9 ～ 11 月　暖秋

年初の暖かさに引続き，各月気温は平年を上廻って，秋にはかなり高温を示した。

	9 月	10	11
平均気温(℃)	24.6（平年より +1.4）	18.5（+10）	14.0（+1.8）
雨　　量(ミリ)	363（平年の 126%）	203（106）	93（101）
日　　照(時間)	195（平年の 114%）	144（86）	149（86）

70 年間の高温順位では 9，10 月は第 4 位，11 月は第 3 位となる。引続く 12 月にも高温であったため，年平均気温 16.6 度は平年より 1.1 度の高目で第 1 位記録を樹てた。この間 9 月には伊勢湾台風による大被害を受けたにもかかわらず，本県の米反収は昭和 30 年に次ぐものとなった。これは農業技術の進歩によるものだろう。[昭 30 豊作の項参照]

1959 年（昭和 34 年）12 月 2 日　低気圧（大雨）

二つ玉低気圧が西日本を挟んで通ったため，本県では 21 時頃より降雨が始まり，23 時頃雷雨を伴う局地豪雨になった。徳島，横瀬，日野谷，川上の一線が 100 ミリを超え，徳島 106.5 ミリ，川上 185.0 ミリとなった。これは 12 月の日雨量としては，従来の最高記録を破る大雨である。一方県西部に極めて少く 20 ミリ以下だった。この雨のため阿南市橘町で死者 1 を出し，機帆船 1 隻沈没した。

1959 ～ 1960 年（昭和 34 ～ 35 年）　暖冬

昭和 34 年初以来の高温は昭和 35 年に入っても止まず，4 月漸く平年に立もどった。

	12 月	1	2	3
平年気温(℃)	8.8（平年より +1.4）	5.5（+0.6）	7.3（+2.1）	10.2（+2.1）
雨　　量(ミリ)	180（平年の 346%）	35（83）	12（20）	74（76）
日　　照(時間)	143（平年の 89%）	192（118）	201（127）	186（102）

各月の状態を見ると 12 月は前半が高温，後半に低く甚だ多雨であり，1 月も似た傾向で前後の温度差が大きかった。2 月は上，下旬が特に暖かく雨量の少ないことが目立ち，この月雨量 12 ミリは明治 35 年に次ぐ第 2 位の少量レコード，又近県でも記録となったところが多く出た。3 月は寒暖の差が大きく雨も少なかった。

月平均気温の高温順位は，12 月 6 位，2 月 4 位，3 月 3 位である。

1960 年（昭和 35 年）2 月　干ばつ

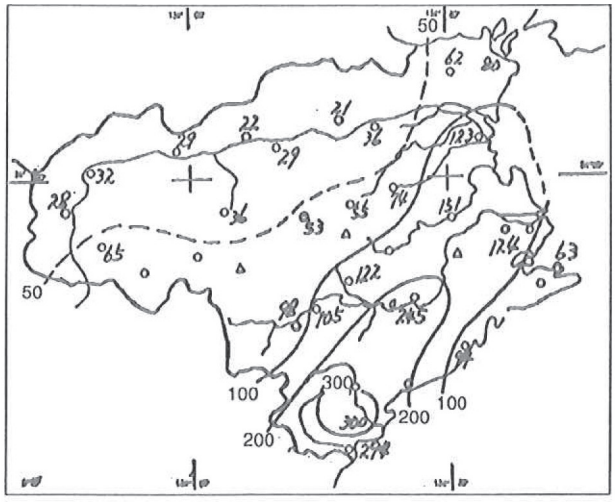
上表のように 2 月の高温少雨は，県下の野菜果樹に多くの被害をあたえた。この少雨は 1，2 月を通じて雨天らしい日が 1 月 16 日 30 ミリ，同 29 日 7 ミリの 2 日に過ぎなかったためである。2 月の好天連続は異常乾燥を起こし，17 日鴨島　21 日板野の山林で火災を出した。2 月の総火災件数 45 件は，前年同月の 12 件に比べて大差がある。

1960 年（昭和 35 年）4 月 20 日　低気圧（大雨）

20 日に西日本を通った二つ玉低気圧による大雨で，徳島では同日早朝南の風 17.9m/s の強い風を観測した。県内の雨量分布も右図のように，昭和 33 年 10 月 18 日と似たものであった。この雨で徳島の記録は次のように更新された。

	4 月日雨量（ミリ）	1 時間最大（ミリ）
1 位	137.4（昭 27,8 日）	57.3（本年）
2 位	123.1（本年）	26.9（昭 34,5 日）

被害　徳島・阿南市（橘町）で床上 38，床下 418，田冠水 135，畑 650，道 8，山崩 6



4,19 ～ 20　1 日雨量

1960 年（昭和 35 年）5 月 24 日　チリ地震津波

地震発生日時　1960(昭和35)年　5月23日04時11分(日本時間)

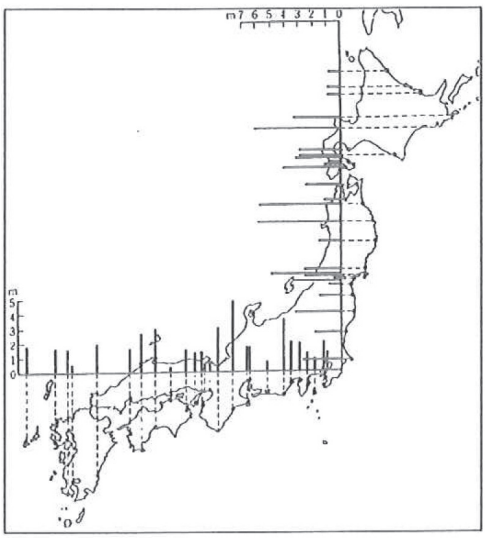
震 央 地 名　チリ沖（チリ南部沖）

震 源 要 素　南緯 38.17 度　西経 72.57 度　深さ 0km

マグニチュード　8.5

津 波 の 高 さ　現地調査等による津波の高さでは最大 5 ～ 6m となっている。

気象庁所属の検潮所による津波の波高（最大全振幅）は右図の通り（一部実測値を含む）。



津波の最大全振幅（気象庁，1961）

被 害 状 況　全国で死者 122 人，行方不明 20 人，負傷者 873 人，家屋全壊 1,590，半壊 2,258 等

特に被害の大きかったのは宮城県の志津川で，津波は約 1km 内陸に達し，死者 34，行方不明 3，負傷者 560，家屋全壊 986，半壊 364 等に達した。なお，この津波を契機として，遠地津波に対する国際的な太平洋津波警報組織が確立された。

この日早朝太平洋岸一体に突然大津波が押し寄せた。これは南米チリ中部沖に起った大地震（38 南，73.5 西で 23 日 4 時 11 分発）によるものであった。この津波は北海道，三陸沿岸に 2 時 40 分頃到着したが，小松島へは 3 時 28 分になつている。震央から徳島までの距離は 157 度(17,455 キロ)になるから，津波の時速は 746㎞である。この津波のための全国被害は，死者 119 不明 20　全壊家 1,571 戸　半壊 2,183　流失 1,259 等である。

本県の状況　最初のはっきりした海面上昇の時間は，小松島で 4 時 10 分（県南ではこれより早いと思われるが観測では4時30分になっている域はこれは第二波であろうか)。周期は40～50分で，5 波位の後は干潮時間に入るので，橘町を除いて問題にならなかった（橘町では第 10 波位が陸上に侵入した由)。最大振巾は図のように橘町 5m（これは平水面よりの上昇潮高 2.5m を 2 倍した値）浅川 4m（全振巾，以下同)。

県北に減少して小松島 1.6m 徳島 1.4m 鳴門 1.2m となる。全く平常に復したのは 4 日後の 27 日夜であった。

被害状況　最大被害を受けた橘町では正常潮位からの増分は 2.5 ～ 2.9m で，海岸沿いの路上 1.6m に達し全町の 75％が被災し，50％は床上浸水して災害救助法が発動された。同夕までに 26 回の干満をくり返した由　其他県南の各所の被害は次のとおり。

	橘	大潟	津峰	福井	椿	由岐	日和佐	牟岐	海南	海部	宍喰
床上浸水	1000			32				17	5		1
床下	300	250	50	60	20	62	5	200	80		5
非住家	6			1			3				
畑流埋					1						
畑冠水	35			80			15	5	8		6
道損壊	2										
堤防壊	2	1		5	2						
通信施設	7										
木材流(石)									130	230	100
船破損				14			2			1	17

この外養殖真珠（浅川湾）の被害は，水産被害の 86％を占める大きなものであった。

1960 年（昭和 35 年）6 月 21 日　低気圧（大雨）

日本海岸沿いに東進した低気圧が発達し，各地に南よりの強風雨をもたらした。本県では 21 日朝から雨が始まり，大体 1 日間で終って剣山南東斜面で 150 ミリを越えた。被害　道 1，山崩れ 5，軌道 1

1960 年（昭和 35 年）8 月 11 ～ 12 日　台風（11，12 号）

この 8 月には 10 ヶの台風が発生し，内 3 ヶが四国に上陸した珍らしい年であった。[高緯度多発の昭和 25 年から 10 年目で両者の傾向は似ている]。第 11 号は北緯 21 度付近から出発し，11 日 05 時室戸の西　安芸市付近から上陸，本県の西部を北上した小型台風で徳島で 15m 以上の暴風は 7 時間　最大風速は東の風 20.4m/s だった。雨は剣山～雲早山系に多く 250 ミリ以上，吉野川流域が 100 ミリ以下だった。

被害　死者 1 人，傷者 1 人，半壊 2，一部 9，道 3，山崩れ 8，田冠水 98，通信 19

第 12 号は北緯 24 度付近に発生し，12 日夕方前者と同様に安芸市付近から上陸した小型台風で，剣山の東を北東進し 21 時には徳島の西を通った。徳島では 15m/s 以上の風は 3 時間最大風速は南南東の風 18.2m/s。県内の雨量は県南東部の川上，福原に最多雨域が出て 250 ミリ程度，県北西に減少している。

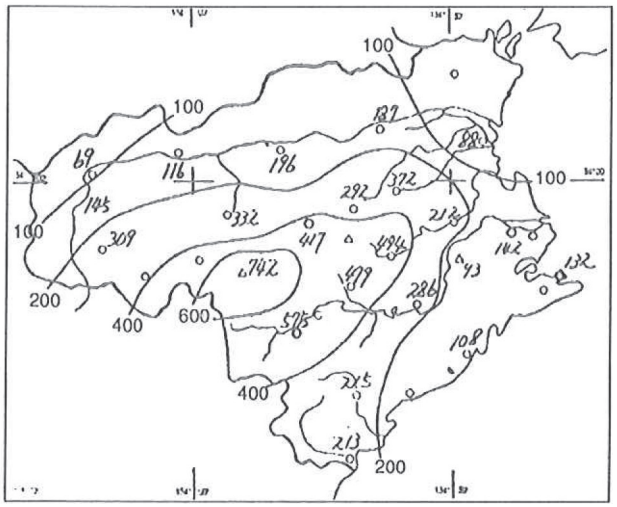
被害　不明者 1 人，床下 119，田冠水 90，畑 10，道 7，通信 2

1960 年（昭和 35 年）8 月 24 日　台風（16 号）

この日 13 時 40 分頃高知市の西へ上陸した B クラスの台風で，雨量が非常に多く四国近畿各地で破提山崩れ等を起した。中でも京都府は桂川はん乱で大きな災害になった。

徳島では 15m/s 以上の強風は 12 時間，最大風速は南南東の風 25.6m/s 最低気圧は 983.1mb，小松島港の高潮最大偏差 66cm。

風雨状況　台風の先がけ雨は 27 日の午後から始まり，風雨ともに強かったのは 29 日の朝から晩方までで，日雨量は　木頭 474　坂州 381　鬼籠野 359 等であった。



27 日 9 時～ 30 日 9 時　3 日雨量

河川水位（m）

吉野川	板野	川島	那賀川	古庄
最　高	8.2	4.3		6.87
（警戒）	9.0	5.0		6.50

被害　傷者 3 人，全壊 7，半壊 17，一部 201，床上 33，床下 879，田畑冠水 606 及び 104，道 51，橋 2，堤 8，通信 62，船沈 11，流 1，破 1

1960 年（昭和 35 年）　温暖

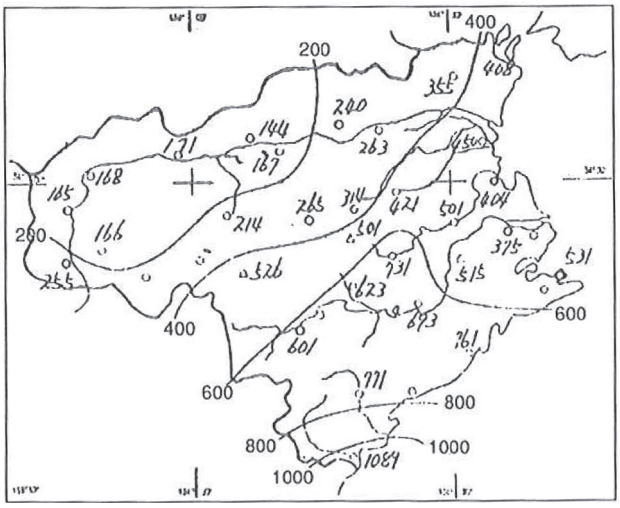
月平均気温が平年並になったのは 4，6，12 月のみで，年平均は 16.2 度　高い方から第 3 位（大正 3 年と同じ）だった。

	1 月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平　均(℃)	5.5	7.3	10.2	13.1	18.2	21.6	26.8	27.3	24.2	18.3	13.9	7.7	16.2
平年差	+0.5	+2.2	+2.3	−0.1	+0.7	+0.1	+1.3	+0.8	+1.2	+0.9	+1.6	+0.2	+1.0

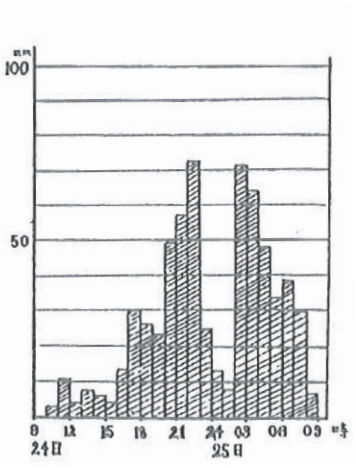
1961年

［昭和 36 年］

1961 年（昭和 36 年）6 月末　豪雨（梅雨前線豪雨）



6.24 ～ 29　6 日合計雨量



宍喰の毎時雨量

24 日夜宍喰から始まった豪雨は 26 日近畿から紀伊半島に，28 日には中部，東海道関東に移り 30 日北陸，東北にまで広がった。2 日に漸く晴天を見ることが出来たもので各地に洪水渦を起し特に天竜川，伊那谷（大鹿村）の大地辷り，狩野川の再氾らん等の大災害が発生した。（尚 3 日には北海道南部に雨が及んだ）

昭和 36 年梅雨前線豪雨と呼ばれ，死者総計 270　不明 82 を出した。

降雨状況　24 日 15 時頃から県南部でかなり強い雨が始まり，夜に入り増々強く 25 日朝まで続いて，宍喰で 644 ミリの記録的大雨となった。夜間の強雨が 27 日の朝まで 3 夜連続し，各日 200 ミリ以上のところが出たので県南河川は氾らんを起した。雨の上ったのは大体 30 日だった。宍喰の総雨量 1,089 ミリは，平地として日本最大のものだった。

	徳島	宍喰	川上	日和佐	椿泊	福原	日野谷	坂州	木頭	雲早山	大竜寺山	剣山
24 日	135	644	347	307	300	195	252	177	232	94	213	98
25	62	59	38	146	21	113	78	100	106	84	43	101
26	185	253	283	184	145	340	317	276	211	254	190	202
27	24	15	19	32	45	27	26	22	18	24	34	24
28	29	111	61	88	16	41	15	33	21	27	30	55
29	15	7	23	4	4	15	5	15	13	18	5	46
計	450	1,089	771	761	531	731	693	623	601	501	515	526

被害　今回の雨は県南海岸に始まり，最強域は一日置いて那賀川流域に及び，吉野川ではそれ程で無かった。最も大きい被害は農業関係で，土木被害はその 5 割程度，総額で 2 億 5 千万円と見られている。

重傷 3，軽傷 1，家全潰 1，半潰 6，床上 290，床下 3,124，一部破 8，冠水田 6,378，畑 148 ヘクタール，道 21，橋流 4，提 1，山崩 19，木材流 296㎡［28 日県警］

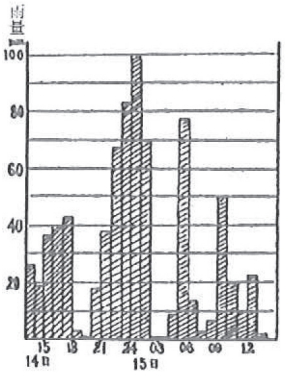
1961 年（昭和 36 年）9 月 16 日　第二室戸台風（18 号）（高潮）

室戸に上陸し，本県東部を通って阪神間を抜けた最大級の台風で，本県には記録的な高潮被害を残した。幸いなことに人命損傷は全国的に少く（死者不明 191，流失全壊 13,828 戸），防災対策の充実して来たことを示した。

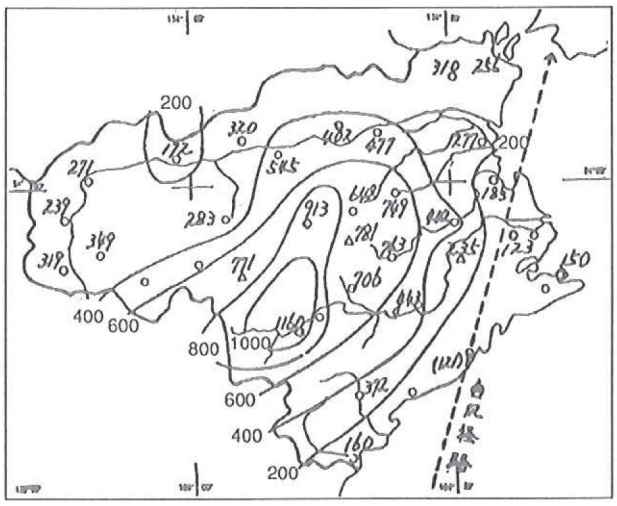
台風経路 9 月 6 日に南方洋上で発見され，北西進の後期（13 日 15 時）に最低気圧 885mb を観測した。四国から阪神にかけては，図のように室戸台風の経路と殆んど一致している。県内の通路

は右の雨量図に示す通りで，日和佐から和田鼻に抜けている。

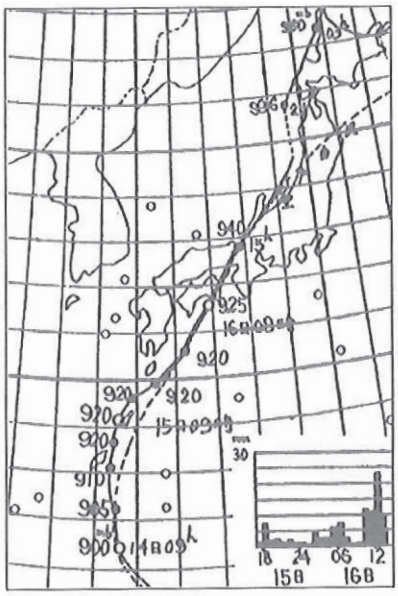
風雨状況　この台風が沖縄を目ざして北上中の 14 日午後から剣山山系の南で一時間 30 ～ 50 ミリの俄雨があり，夜に入って強く，特に木頭では 1 時に 100 ミリを計った。この日沿岸では 3m 位のうねりが入って来た。15 日午前中は俄雨が降ったり止んだりで終り，夜に入って再び強くなり，翌 16 日昼台風通過で収まった。三日間の合計雨量は下図のように，1,000 ミリを超えるところもあり非常な大雨だったが，短時間に集中しなかったので被害を軽減した。徳島で風速 15m/s を超えたのは 15 日 21 時～ 16 日 14 時の 18 時間，最大風速は南東の風 27.5m/s（16 日 10 時 20 分）。最低気圧 935.2mb（11 時 33 分）は室戸台風時のものよりも低い第一記録である。



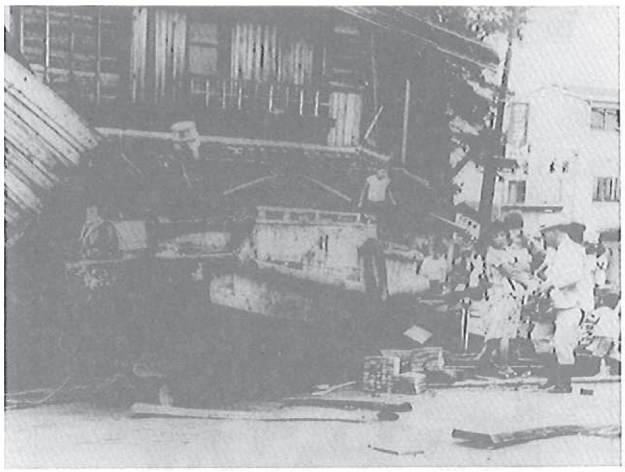
木頭毎時雨量



9.14 ～ 16　3 日合計雨量



太経路区間は徳島 15m 以上徳島雨量


国道 55 号に上陸した中型漁船（徳島新聞社提供）

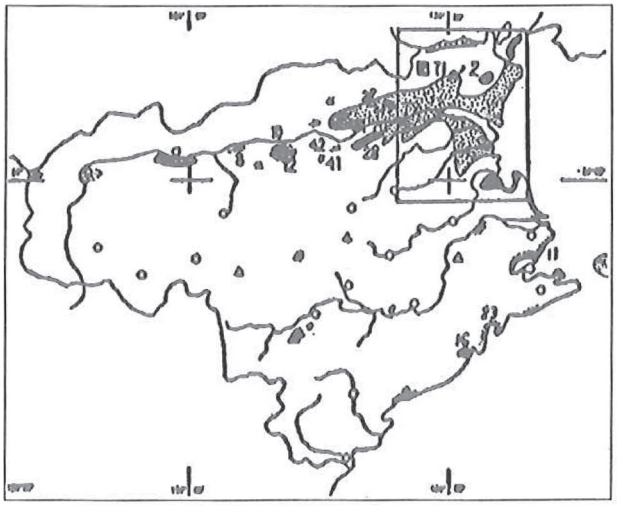

台風禍の津田漁港（徳島新聞社提供）

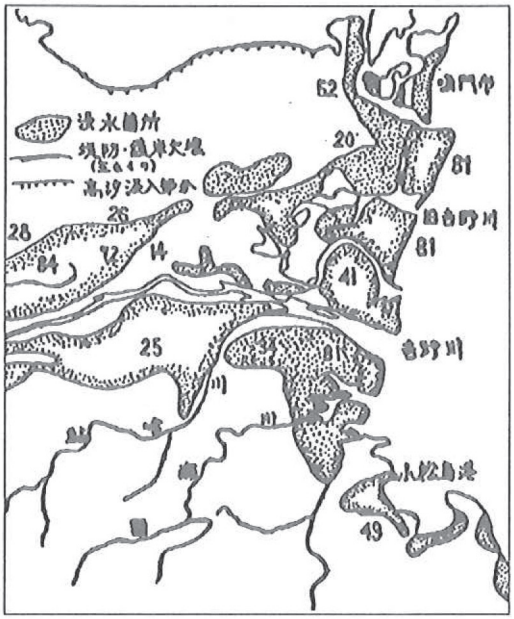
降雨量

	徳島	木頭	川井	鬼籠野	福原	坂州	下上分山	穴吹	鴨島	横瀬	川上	日野谷	市場	剣山	雲早山	太竜寺
14日	61	661	334	211	249	303	157	153	130	145	188	30	122	142	218	81
15	86	394	431	348	307	299	379	257	216	188	133	322	160	450	430	86
16	90	105	148	190	207	104	112	135	131	129	51	88	120	179	133	68
計	237	1,160	913	749	763	706	648	545	477	462	372	440	402	771	781	235

	吉野川					那賀川			
河川水位	板野	岩津	川島	中央橋	第十	宮浜	和食	古庄	富岡
最高	12.60m	7.0	6.0	5.71	7.69	17.6	10.4	7.38	2.15
16日	15時	20	18	19	20	12	13	15	18

吉野川中央橋では，既往最高水位（昭29.9.14）と同値，那賀川和食では昭35.8.29の9.5mを超える高水位となったが，其他は皆稍低く破提洪水には至らなかった。





浸水区域　数字は総戸数に体する被害戸数の%

高潮　この台風では日和佐及び以北の海岸で高潮被害が発生し，特に県北三市は全市が殆んど床下浸水以上となり，低地で床上1m位のところも出た。徳島沖洲町では大手堤防の決潰と，沖洲川堤防の乗り越しで大きな被害になった。尚県庁玄関で地上75cmに達した（先の室戸台風では25cm）。小松島検潮記録は図の通りに最高潮位は423cm（11時30分）。天文潮位との偏差は190cmだった。（先の室戸台風では140cm）

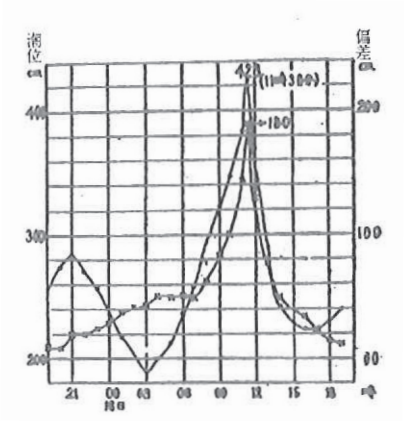
県内各地の最高潮位は台風眼通過時と一致し，そのあとすぐに減水した

被害　吉野川中流以下と日和佐町以北の，4市21町村に災害救助法が出された。被害が特に大きかったのは，吉野町（総戸数に対する被害戸数は84%上図参照）徳島市，松茂，市場（81），上板（72），鳴門（52），小松島（49）等であった。尚阿南市伊島では80%の家が損傷し，又大波でかってない恐ろしい思いをしたと云う。

人死者11，不明0，重傷20，軽傷233，家全潰569，半潰1,777，流53，床上25,313，床下39,365，非7,327，農28億，林6，水産8，土木25，学校1，商工19，家35，其他計122.49億（9月30日現在）



9月18日　伊島の倉庫はメチャメチャに破壊された（徳島新聞社提供）



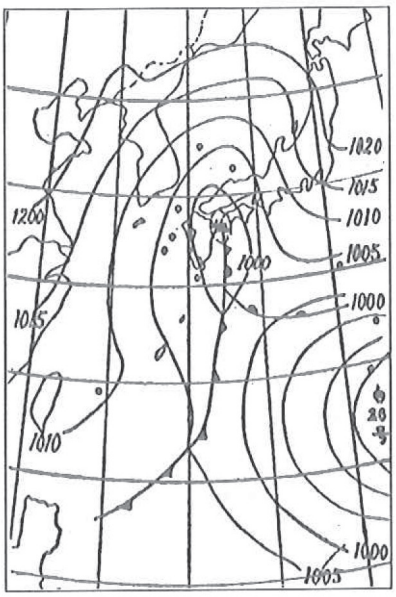
小松島検潮記録

	徳島	鳴門	小松島	阿南	勝名	那賀	海部	板野	阿麻波植	美馬	三好	計
死(人)	1人							3	3	1	2	11
傷	17	15	14	9	12		5	155	20	6	−	253
全(家)	118戸	93	5	13	43	3	17	175	50	41	11	569
流埋	34	5				2		7		2	3	53
半	353	269	28	85	124	20	96	499	109	146	48	1777
床上	13867	3284	2573	654	376	172	287	2158	1548	344	50	25313
床下	20864	13993	11274	2702	1734	158	621	4987	5662	614	334	62943

［注］1. この台風で観測した名瀬の最低気圧は918.3mb（15日10時7分），室戸岬へ上陸した時は930.9mbで，伊勢湾台風時潮岬で観測したものと殆んど同値。日和佐では928.7mbであった。最大風速は室戸で80m/sを越したと云はれる。尚大阪での高潮は421cmで偏差は241cmだった。

2. この台風は意外に被害が少なかったが，その原因として台風が昼間に来たこと，本県では雨は多かったが一般に風台風だったこと，大阪での高潮対策が充分だったこと等が挙げられる。とくに報道機関の活動が大きな役目をはたしており，一般には伊勢湾台風の教訓がしみ込んでいたこと等が考えられる。大阪での船舶被害，流材被害が皆無だったことは対策の重要性を教える。

3. 今年の台風発生数は29ヶ，内日本に上陸したものは第二室戸を含めて5ヶ（11号志布志湾，15号宮崎，17号高知県，18号第2室戸，24号房総を掠める）あり，18号以外で稍被害のあったものは東京に混乱をもたらした24号のみであった。尚4号は上海付近から日本海に入り，5月29日東北地方に大火を起した。



10,26　21時

1961年（昭和36年）10月26～27日　低気圧（大雨）

26日九州南方に発生した低気圧と東経140～150を北上した台風26号の影響によって，25日夜九州から始まった大雨は26，27日中四国，近畿に移り関東では28日に高波被害を出した。この低気圧は27日朝には一たん瀬戸内に入ったが，後南東に転進し東海沖に出ている。被害としては大分の電車埋没，宮崎及び小豆島の山津波，四国近畿の水害等がある　死者計50名位

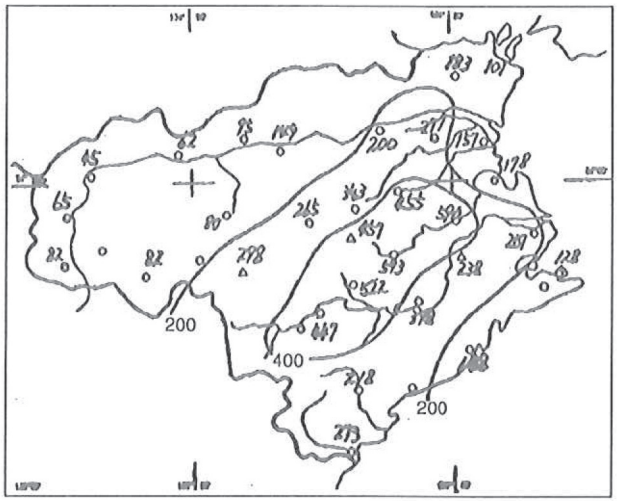
風雨状況　26日昼頃から強い雨が始まり，27日早朝まで続い

た。そのため下図のように勝浦川上流で 600 ミリ近くになり，其他広範囲の大雨であった。第二室戸台風の災害復旧のないあと，より一層被害を増し，中には前回を上廻るところも出た。(吉野川下流域で刈取った稲束の流失，宮川内谷川及び勝浦浜橋付近の国道決壊)。この間南よりの風が強く最大風速は南東の風 20.5m/s（27 日 0 時 30 分），15m/s 以上は 23 ～ 5 時の 7 時間に及んだ。

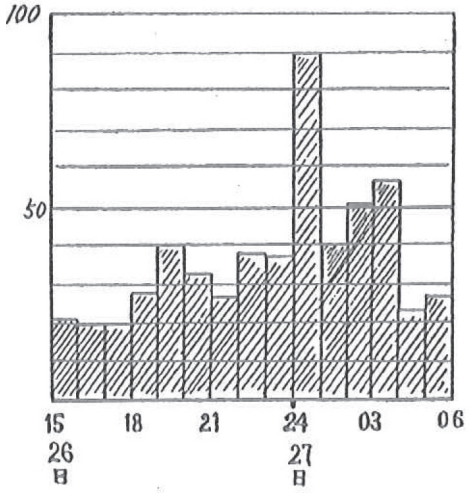
被害　徳島，小松島と上板町に災害救助法が出された。

死者 2 人，傷者 2，不明者 2 人，家全潰 3，半潰 5，床上 1,422，床下 7,080，水田流 7，冠水 3,432，畑 3 及び 440，道 79，橋 7，提 26，山崩 19，船沈 5，木材 4,173㎥

［注］豊作を予想されていた水稲は第二室戸台風によって多少の被害を受けたあと，又この雨によって害を受け量資共に低下した。反収は 2.13 斗。



10.26 ～ 27　1 日雨量



福原旭の雨

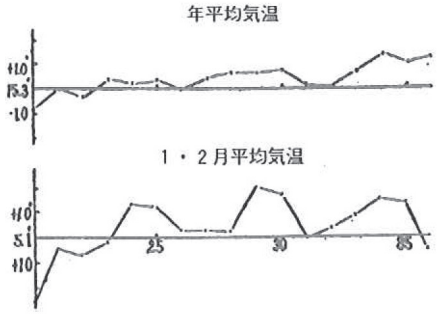
1961 年（昭和 36 年）　温暖

1, 2 月のみは平年気温に稍及ばなったが其他の月は非常に高く, 中でも 9, 10 月は 2 度以上, 其他 5, 11 月もかなり高温で，夫々 70 年間第 1 位最高になった。従って年平均気温も大正 5 年と同温の第 1 位という珍らしい暖年だった。

	1 月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均気温(℃)	4.4	4.8	9.2	14.5	19.7	22.2	27.1	27.8	25.6	20.1	14.2	8.6	16.4
平年より	−0.5	−0.4	+1.1	+1.3	+1.0	+0.6	+1.4	+1.3	+2.4	+2.6	+1.6	+0.9	+1.1

［注］1. 本年は異常の多い年で，徳島の累年記録の中で 10 位内に入る値を拾うと 50 を超し，第 1 位のみを拾うと上位記録の外気圧最低 935.2mb（9 月 16 日）湿度 6 月の最少 27%（6 日）6 月雨量 507.4 ミリ　10 月最高気温 31.8℃（6 日）等

2. 近年の温暖（暖冬）傾向は図の通りで，暖侯の原因が特に暖冬によるもの（たとえば 24，25，29，30 年）と冬期外の高温によるもの（27，28，36 年）とに分かれる。尚この項の平年値とは 1931 ～ 1960 までの 30 年平均値をいう（凡例 3 の (2) 参照）。



徳島最近の気温平均差

1962年

［昭和 37 年］

1962 年（昭和 37 年） 顕著事項

1.4　紀伊水道の地震　13 時 35 分　徳島震度 4, 西日本の殆んど全域有感, 一時は津波の虞れもあった程の大ゆれで海岸では混乱した。　1 上　山の遭難多し

1 下　日本海沿岸大雪本県西部に及ぶ。23，24 日牟岐無線所属のマグロ漁船二隻，北緯 30 度付近で強風に遭難。第二徳久丸は助かり第二協漁丸は消息を失う。

2 中下　各地に火災発生、13 眉山燃える。

土讃線豊永で大崩壊（3.26 開通 41 日ぶり）（この後 3，4 月時々崩れる）。

3　時々強風と火災。

4.3　海陸大荒れ，鳴門阿南両市では土俵を積んで大雨増水の堤防を守る。

4 日桜に雪。21 日阿波板野地方に降ひよう。

5.21　霧のため鳴門海峡で貨物船と油送船衝突（後者沈）。26，27　関東以西大雨。

6 中　10 日から梅雨活ぱつ。西日本大雨、県下被害多し。14 年阿南市長生町生町明谷トンネル崩壊 7 名死。

7 上　表日本豪雨［特に九州，（佐賀県太良町の山津波，長崎県江迎のボタ山崩）死 56 不明 19］。

11，2　瀬戸内海濃霧，鳴門で 4 隻座しょう　21，22 又霧，鳴門で衝突，1 隻沈。

27　C クラスの台風 7 号，田辺に上陸（9，10 号は 8 月上旬北海道に被害）。

9　干害　徳島の月雨量 49.5 ミリは平年の 1/5（10.5 漸く雨）。且つ高温（+1.1 度），多照（+9%）。26 日徳島安宅町 7 戸焼く。

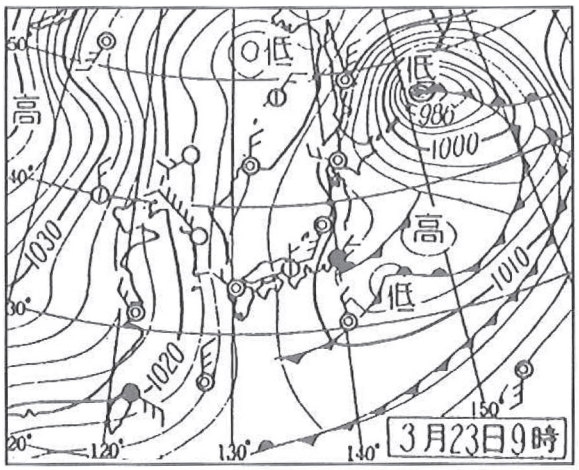
11 下　A クラス台風 28 号圏内で漁船 20 隻（本県漁船は無事脱出）。

12　高温　（9，10 月順調で空前の豊作）。

1962（昭和 37 年）1 月 4 日地震

13 時 35 分頃，県下をはじめ西日本各地にかなり大きい地震があった。震源地は紀伊水道，震度Ⅳ徳島，最大振幅 6㎜を記録，徳島地方気象台では 13 時 46 分県南・紀伊水道に対し，津波のおそれがあるとの津波警報を発表した（解除は 14 時 2 分）。

1962（昭和 37 年）2 月～ 3 月　寡雨，異常乾燥



2 月から 3 月にかけて寡雨の状況が続き，2 月の降水量は僅か 12.6㎜（平年 62.9㎜）。3 月も 32.1㎜（平年 97.0㎜）に過ぎず, 両月とも少雨の順位は 1893 年（明治 24 年）気象台開設以来第 2 位の記録となった。（以下「開設以来」という。）

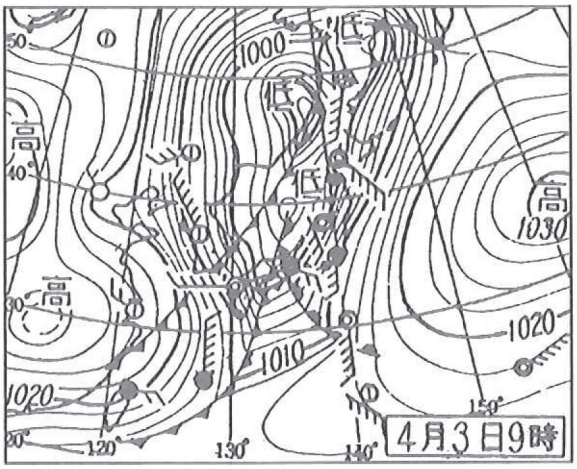
2 月の第 1 位は昭和 35 年　　12.4㎜

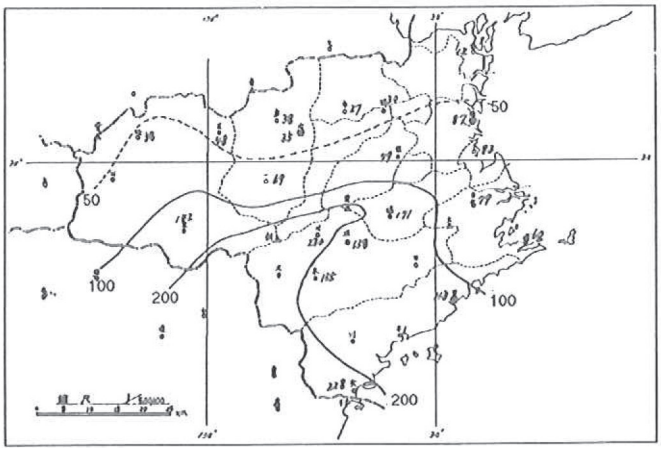
3 月の第 1 位は昭和 32 年　　31.5㎜

このため那賀川上流の長安口ダムは底をつき，この地方の杉苗 1 万本が全滅, 20 万本が枯死寸前となった。そのほか異常乾燥で火災が続発し，県下で 1 日 4 件の火災が発生した。

1962 年（昭和 37 年）4 月 3 日　大雨（低気圧）

2 日から 3 日にかけて発達した低気圧が日本海を通り風雨が強まった。海の足は大混乱，国鉄土讃線は岩原－豊永間で土砂崩れが起き列車の運行がストップした。鳴門市大津，阿南市長生では河川の増水で堤防が決壊寸前となり，地元民百数十人が水防作業のため出動して応急作業を行った。



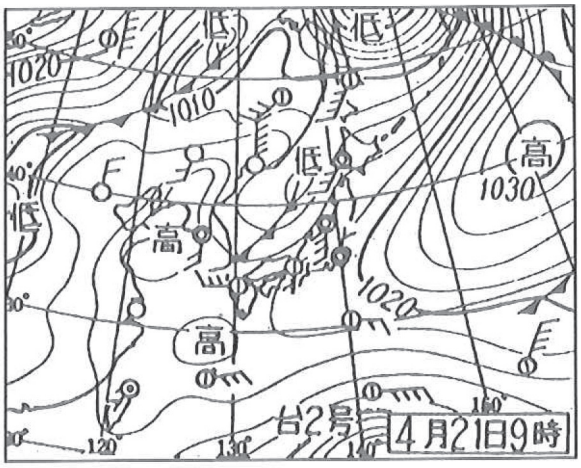


雨量分布図

1962 年（昭和 37 年）4 月 21 日　降ひょう

寒冷前線が日本海から西日本に南下して激しい上昇気流を起こし，これに伴って西日本各地に落雷があり雹を降らせた。

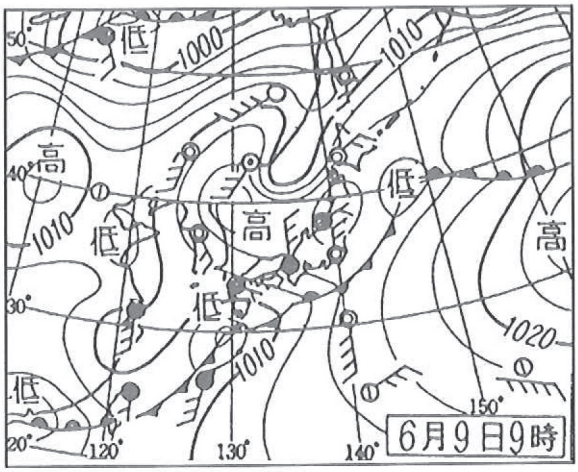
中でも広島で降った雹の直径は 15㎜の大粒のものであった。県内でも 16 時過ぎ阿波・板野両郡一帯に直径 10㎜の雹が 20 分間にわたり降り，葉煙草，桑，果樹に相当の被害があった。

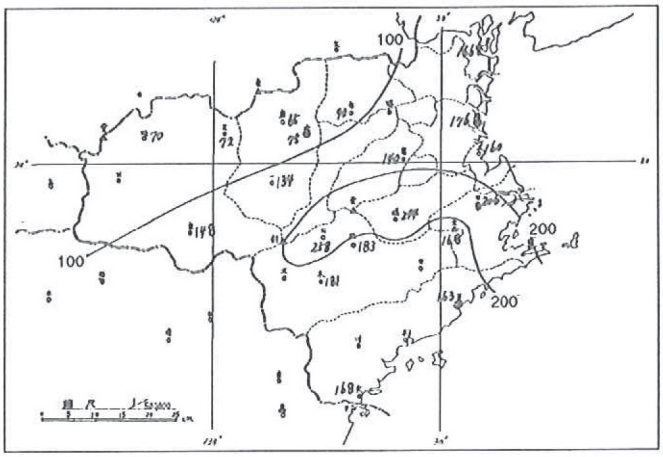


1962 年（昭和 37 年）6 月 9 日～ 10 日　大雨（梅雨前線）

7 日から本邦南沖に北上してきた梅雨前線は，9 日から 10 日未明にかけてさらに活動が活発となった。西日本一帯集中豪雨により被害が続出し，県内でも南部で 200㎜，その他の各地で 100㎜前後の大雨を降らせ，海部郡内や那賀川上流域の各地で山崩れが起きた。

この雨は 14 日まで続き 14 日 11 時過ぎ阿南市長生町のトンネル工事現場で降雨のため地盤がゆ



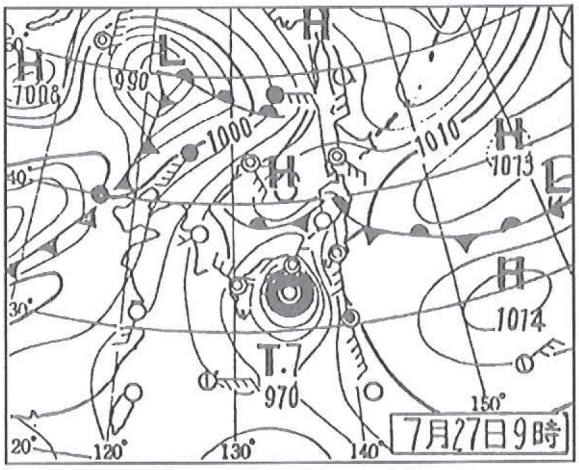


雨量分布図

るみ落盤事故が発生，16 人が生き埋めとなり，9 人が脱出し助かったが 7 人は犠牲となった。

1962 年（昭和 37 年）7 月 27 日　台風 7 号

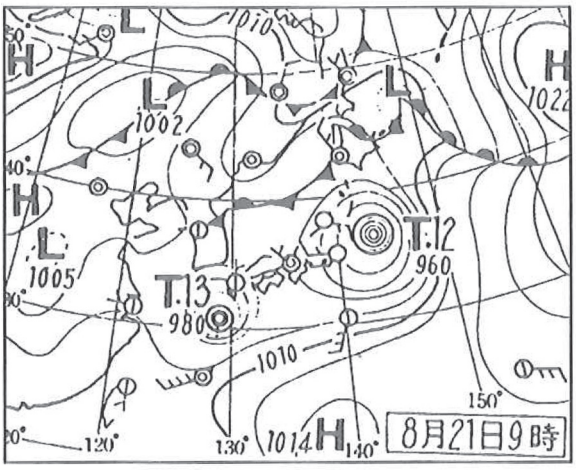
26 日未明，台風 7 号は北緯 30 度線を越えて北西に進み，四国上陸の恐れ強しとみて厳重な警戒にあたった。27 日 3 時頃紀伊水道南方で進路を北から北東に転じ，同日 13 時過ぎ紀伊半島に上陸，やや衰えながら北北東に進んだ。27 日午後徳島県東部も暴風圏に入ったが，台風の中心が本県東部を通ったため被害はなかった。

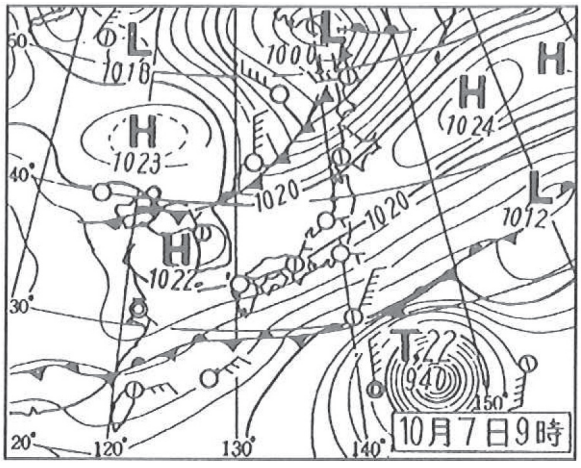


1962 年（昭和 37 年）8 月 21 日　台風 13 号

21 日九州西部に上陸後衰弱して瀬戸内海西部を通り，日本海沿岸に沿って北東に進んだ。

徳島県への影響は無く，俄雨が降った程度であった。



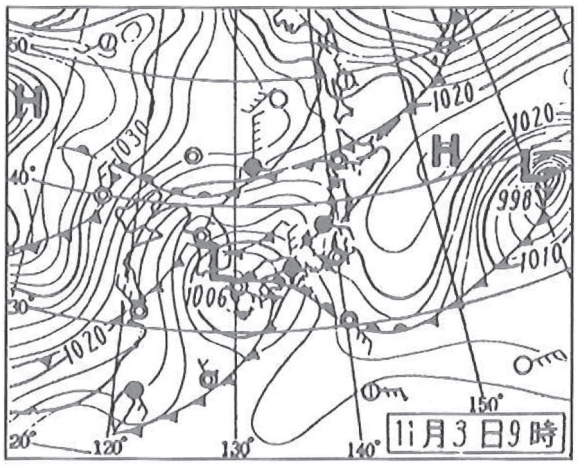


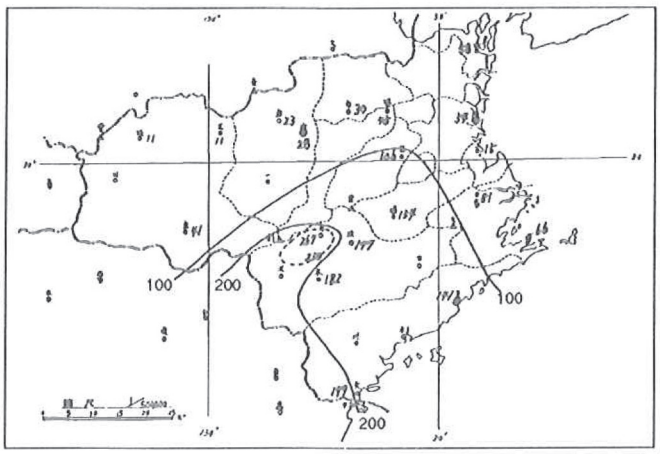
1962 年（昭和 37 年）9 月～ 10 月　干害

9 月～ 10 月は台風の影響は全くなく，深刻な水不足となった。例年は 9 月に入ると太平洋高気圧が弱まり始めるが，本年は本邦上空に固い壁を作って台風を近よらせず，また 10 月は台風が本邦はるか東方洋上を北東進して影響がなかった。このため降水量は 9 月 49.5㎜で平年の 5 分の 1，10 月は 52.0㎜で平年の 4 分の 1 程度しかなく，深刻な水不足となった。阿波郡を中心とする吉野川北岸地区では農作物の干害が続出し，陸水稲，野菜，果樹に及ぶ被害額は 2 億 5 千万円にのぼった。

1962 年（昭和 37 年）11 月 2 日～ 3 日　大雨（低気圧）

2 日おそくから 3 日にかけて，低気圧が黄海から朝鮮海峡を通って日本海に入り発達したので，風雨が強く吹き荒れた。降水量は県南ほど多く，海部川では 250㎜，那賀川では 150㎜，その他では 50㎜に達する大雨となった。





雨量分布図

1963年

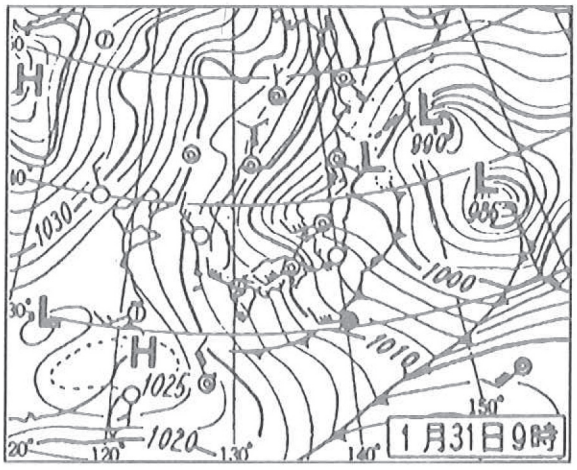
［昭和 38 年］

1963 年（昭和 38 年）1 月　豪雪

1 月中旬から月末にかけて，日本海側の大雪は昭和 38 年 1 月豪雪と命名され四国山間部まで及んだ。

冬型気圧配置の持続で山間部は大雪となり，交通は麻痺した。

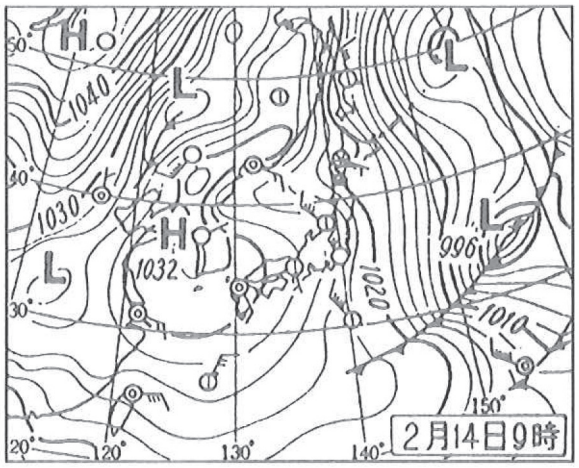
各地の積雪	23日	一宇 47cm，鬼籠野 41cm
	24日	徳島 8cm
	27日	一宇 60cm
	31日	一宇 88cm，池田 70cm，川井 76cm



1963 年（昭和 38 年）1 月下旬～2 月　異常乾燥

1 月 18 日の最小湿度は徳島 24％で，1 月としては開設以来第 1 位，2 月の月平均湿度は徳島 62％で平年より 6％低かった。

1963 年（昭和 38 年）2 月　少雨

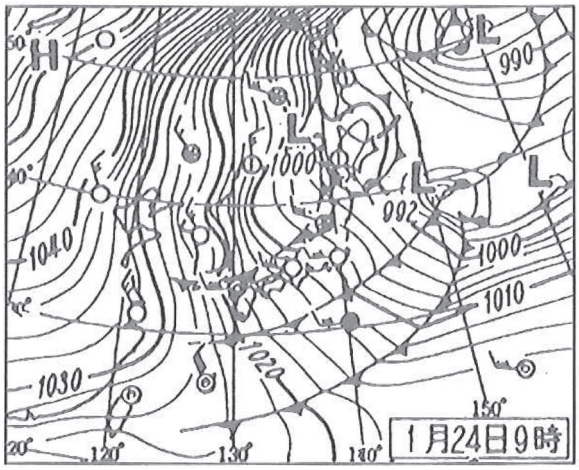


徳島の月降水量は 14.1㎜平年の 23％で，少雨の順位は開設以来第 4 位であった。

1963 年（昭和 38 年）1 月～3 月前半　異常低温

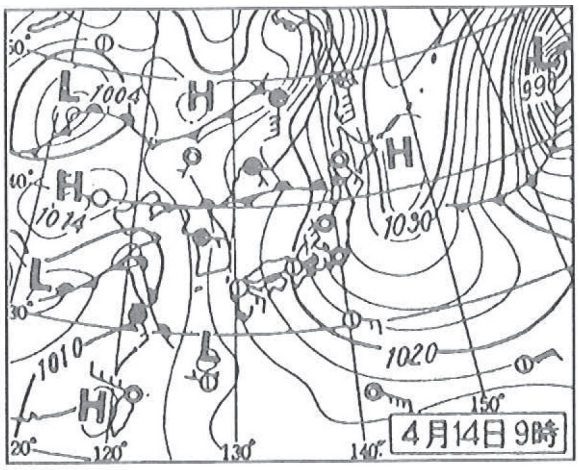
1 月の徳島の月平均気温は 2.7℃で平均より 2.2℃低く，開設以来第 3 位の低温の記録となる。

1 月 24 日の最低気温は徳島で－4.9℃。剣山では－19.2℃で開設以来昭和 33 年の－19.8℃に次ぐ低温第 2 位の記録。水道管の破裂が相ついだ。

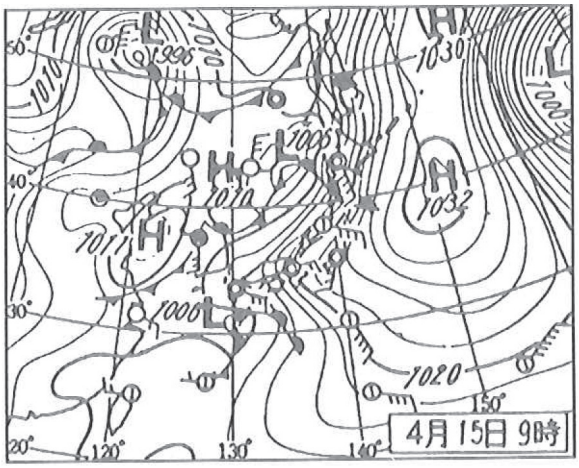


1963 年（昭和 38 年）4 月 14 日　眉山の火災

19 時 30 分頃，徳島市南佐古 7 丁目の眉山裏山から出火し，約 3ha を焼いた。



1963 年（昭和 38 年）4 月 15 日　大雨（低気圧）

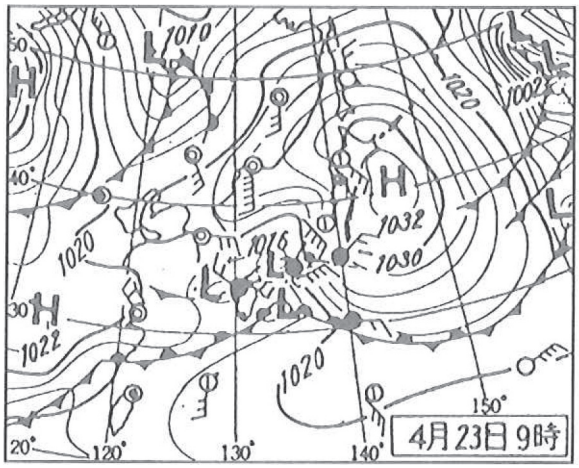


熱帯低気圧が四国沖を通過したため県南で大雨となり，日野谷で 257㎜（日降水量 235㎜）の降雨があった。

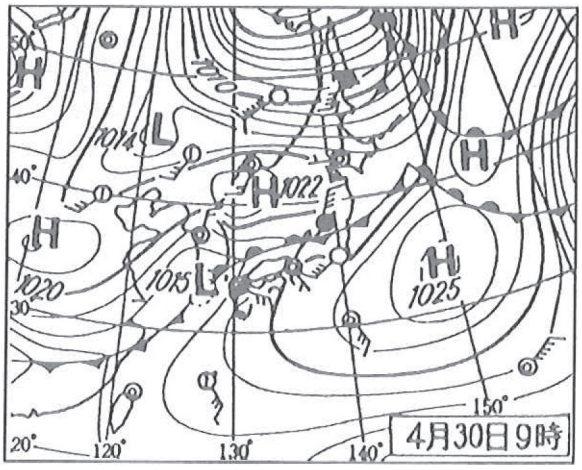
道路決壊山崩れ　5

低気圧が四国沖を通過し県南は大雨となり，宍喰で 131㎜の降雨があった。23 日 8 時頃木沢村で山崩れがあり，登校中の学童 2 名が生き埋めとなり死亡した。

1963 年（昭和 38 年）4 月 23 日　大雨（低気圧）



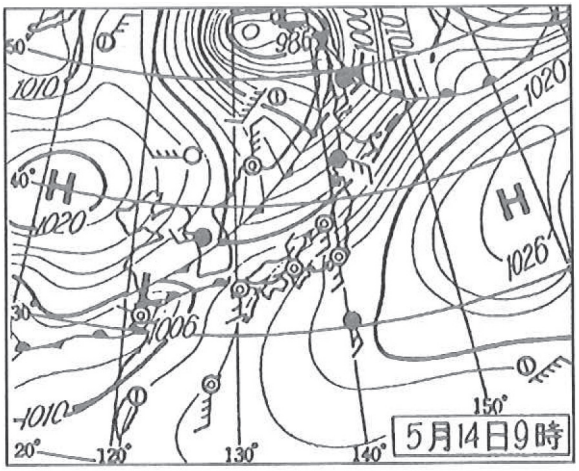
1963 年（昭和 38 年）4 月下旬～ 6 月中旬　長雨



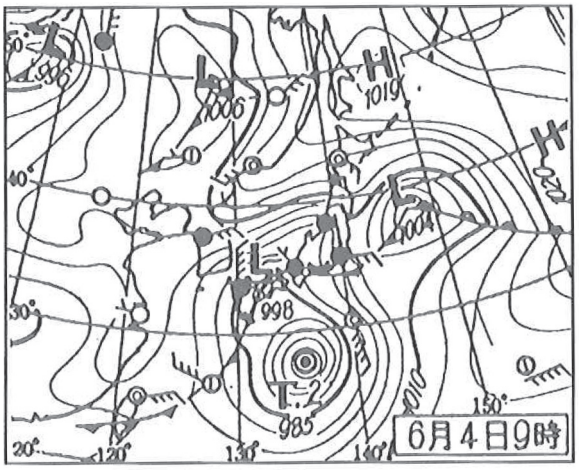
大陸からの移動性高気圧はやゝ北偏して通り，低気圧や前線が本邦や南岸に停滞しやすく，曇雨天が続き，5 月に入ってからは梅雨期の様相を呈した。このため農作物特に麦類に被害が大きかった。

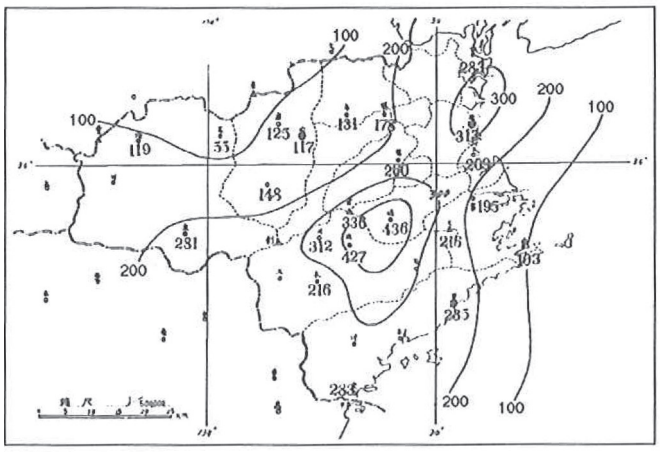
1963 年（昭和 38 年）5 月　高温

徳島の 5 月。月平均気温は 19.1℃で，平年より 1.4℃高く，高温順位は開設以来第 2 位を記録した。



1963年（昭和38年）6月2日～5日　台風2号による前線豪雨





雨量分布図

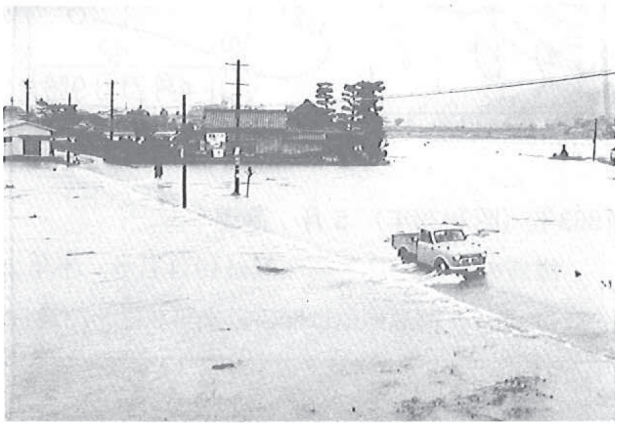
台風２号が本州南岸沖を北東進し，梅雨前線を刺激して大雨を降らせた。徳島では４日に 244.7 ㎜と６月の日降水量の記録を更新した。福原旭２～４日の総降水量 436㎜

床上浸水 749

床下浸水 5,316

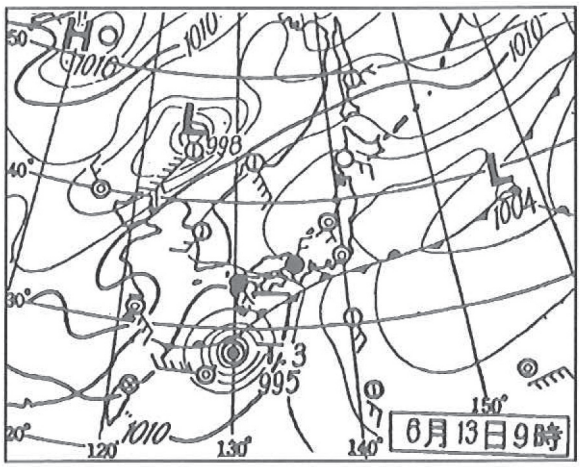


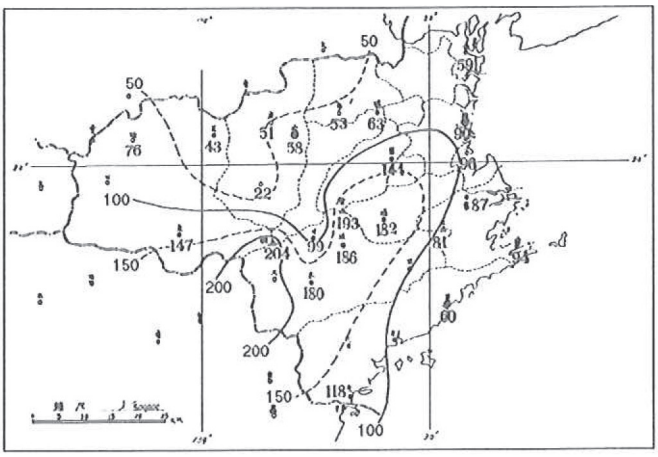
濁流狂う決壊した樋殿谷川　板野郡大麻町（徳島新聞社提供）



大代谷川はんらんで小没となった鳴門市大津町大代付近
（徳島新聞社提供）

1963 年（昭和 38 年）6 月 13 日台風 3 号による水害





雨量分布図

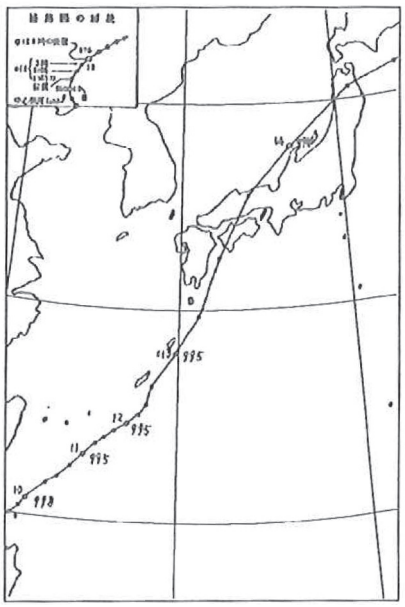
13 日朝奄美大島付近に達した台風３号は次第に速度を早め，22 時頃宿毛市付近に上陸。14 日３時頃鳥取付近を通り日本海に入った。徳島では最大風速南南東の風 21.7 m /s の強風，剣山で 12

日～13日に204㎜の降水量を記録した。

死者1，床上浸水10，床下浸水65，山崩れ13



6.14　石井で3人を救出した，県警機動隊の救命ボート
（徳島新聞社提供）

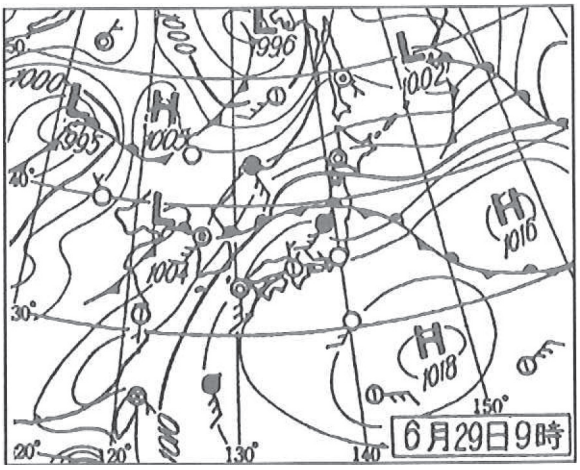


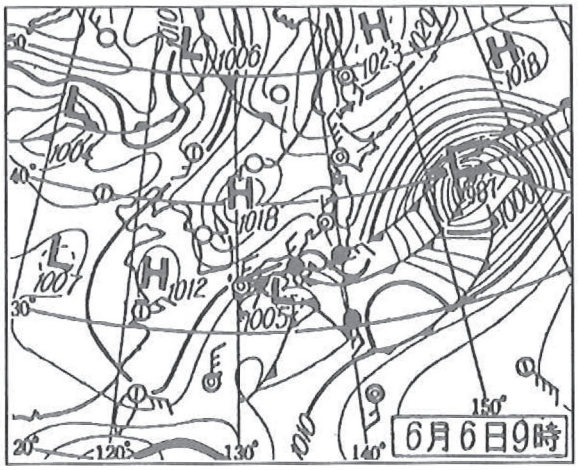
経路図

1963年（昭和38年）6月下旬　高温

台風4号が北上し日本海を通過したのち，西日本は南方海上にある高気圧の勢力下に入った。このため，南から暖気が流入し，26日は徳島で34.6℃と6月として高極を記録した。

また,6月の月平均気温は23.0℃で平年より1.4℃高く,高温の順位は開設以来第3位の記録となった。





1963年（昭和38年）6月　多雨

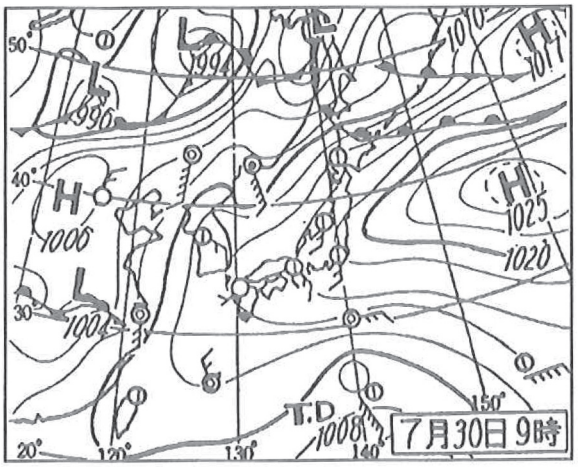
台風2号，3号などの影響も加わって雨量は多く，月降水量は徳島517.5㎜，剣山920.0㎜と何れも開設以来の記録を更新し第1位となった。

1963年（昭和38年）7月30日　地震

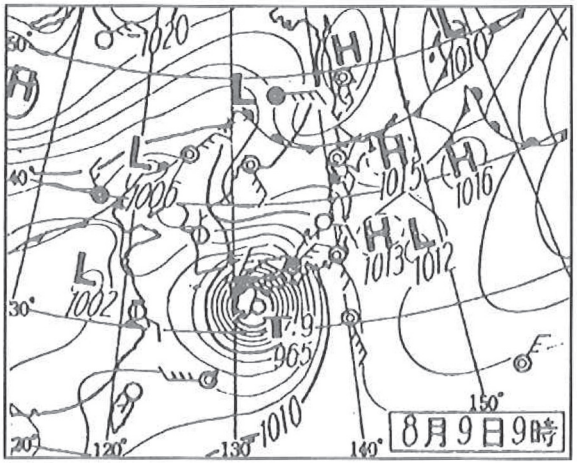
17時28分頃紀伊水道を震源地とする地震で，徳島は震度Ⅲを観測した。

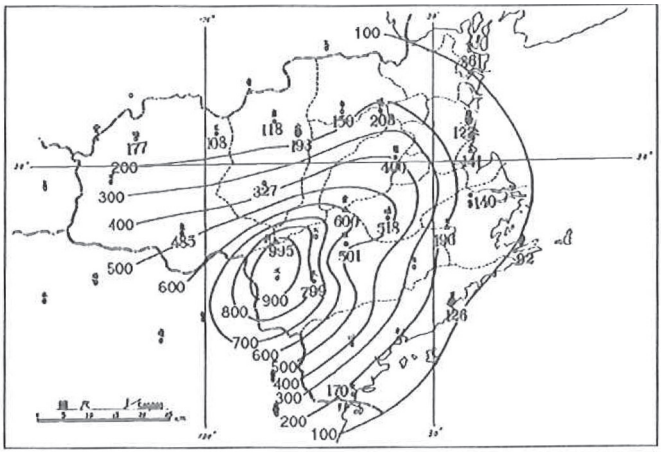
1963 年（昭和 38）７月　少雨

後半の雨量は少なく，月降水量は 47.7㎜で平年の 24% となり，少雨の順位は開設以来第 4 位であった。

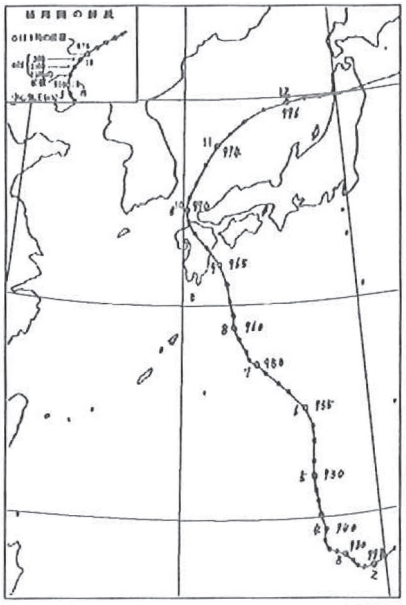


1963 年（昭和 38）8 月 9 日～ 10 日　台風 9 号

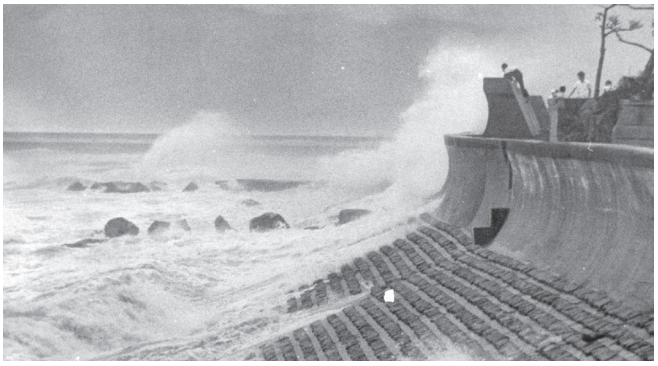




雨量分布図



経路図



台風 9 号　沖洲町高須海岸に打ち上げる高波（徳島新聞社提供）



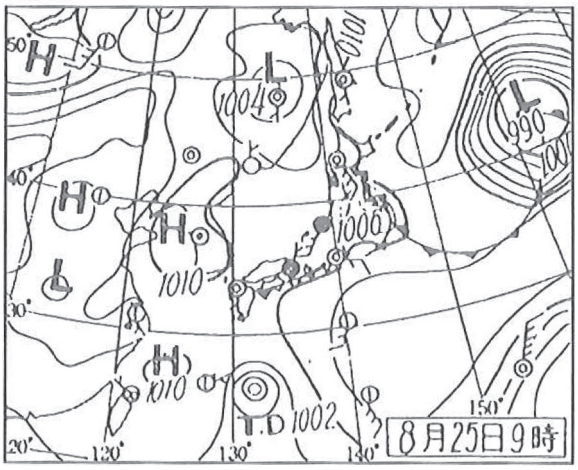
軒まで浸水した三野町勢力の民家（徳島新聞社提供）

マリアナ東方海上に発生した熱低は次第に発達し，台風 9 号となった。8 月 9 日 13 時すぎ宮崎・大分県境に上陸し，中心気圧 970mb で北西～北北西進を続けた。10 日 9 時には山口県萩沖に達し勢力は衰えた。

県下は暴風雨圏内に入り，7 ～ 11 日の総降水量は剣山で 1,015㎜，徳島では 123㎜を記録した。

家屋全壊 2，半壊 2，床上浸水 64，床下浸水 239

1963 年（昭和 38）8 月 25 日　雷雨



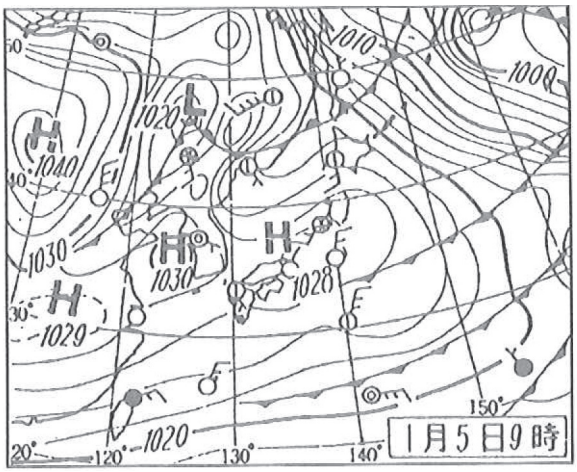
低気圧が日本海を北東進し，前線が通過したため，県東部一帯に激しい雷を伴った強雨があった。徳島の降水量は 66㎜。

床下浸水（小松島市）350

1964年

［昭和 39 年］

1964 年（昭和 39 年）1 月　高温

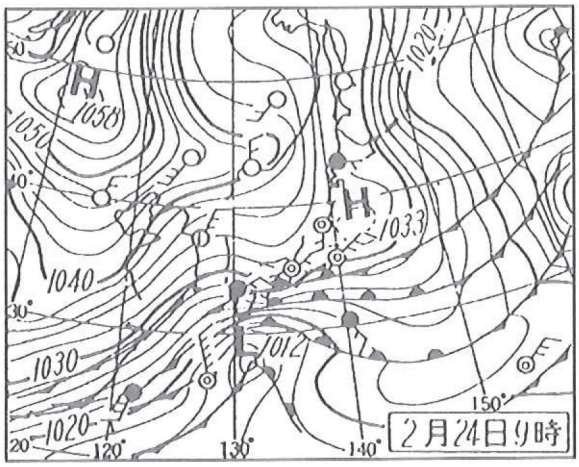


季節風は弱く，月平均気温は 6.9℃。平年より 2.0℃高く，高温の順位は開設以来第 4 位であった。

1964 年（昭和 39 年）2 月 24 日　大雪

低気圧が四国沖を通過したため大雪となった。このため県下のバスは麻痺の状態となり，また促成野菜に大きな被害があった。

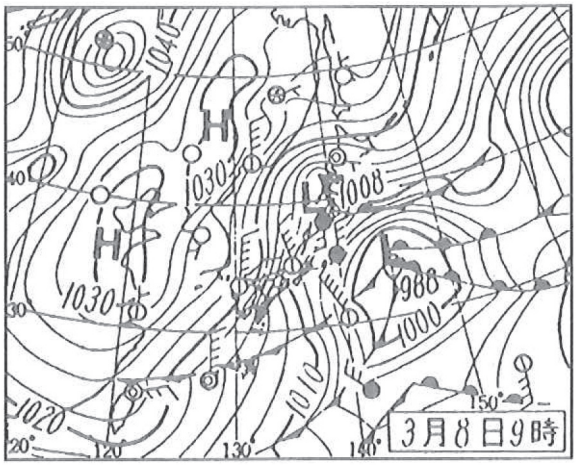
徳島の積雪 9cm，25 日 9 時までの積雪　川井 30cm，福原旭 20cm。



1964 年（昭和 39 年）3 月 8 日　強風

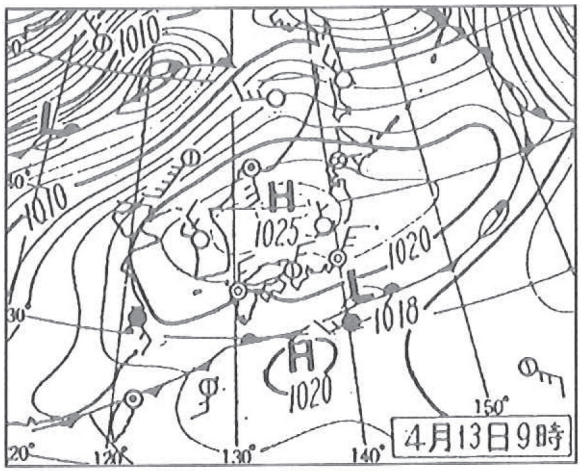
発達した低気圧が関東沖に抜け，強風が吹き荒れた。この強風で鳴門海峡で阿南の機帆船が転覆し，4 名が死亡した。

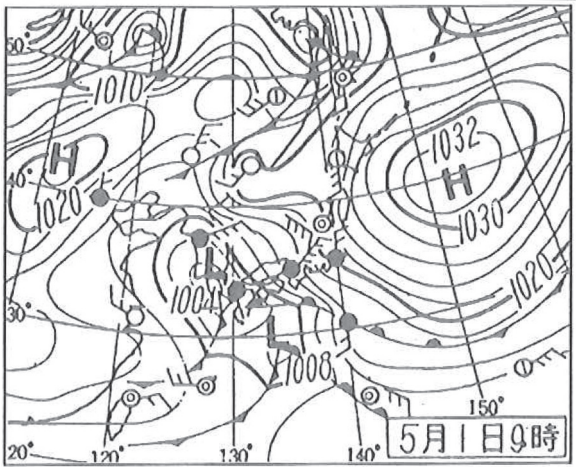
徳島の最大風速　西北西　14.0m/s，最大瞬間風速　西北西 24.6m/s



1964年（昭和39年）3月下旬後半～4月下旬　異常高温

4 月の月平均気温は 17.4℃で平年より 4.2℃も高く，高温の順位は開設以来第 1 位であった。





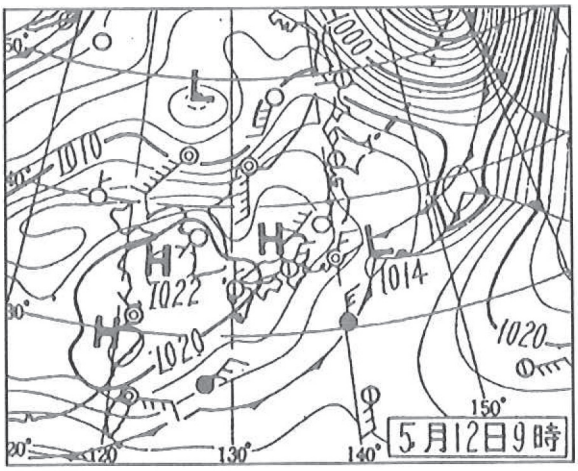
1964年（昭和39年）4月30日～5月1日　大雨（低気圧）

東支那海に発生し，朝鮮海峡から日本海に抜けた低気圧の影響で県南は大雨となった。

川上 268㎜，山崩れ 2。

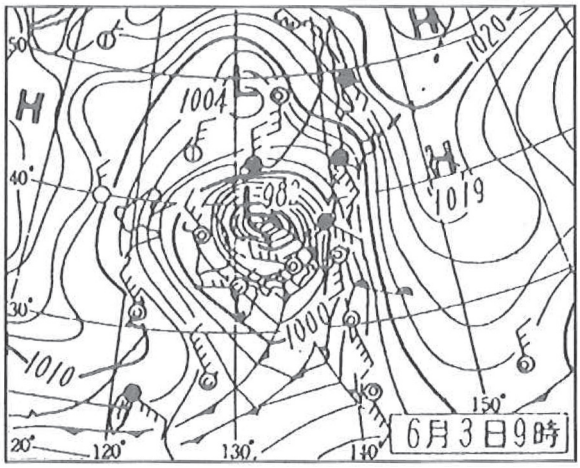
1964 年（昭和 39 年）5 月　高温

月平均気温は 19.2℃で平年より 1.5℃高く，高温順位は開設以来第 2 位の記録となった。

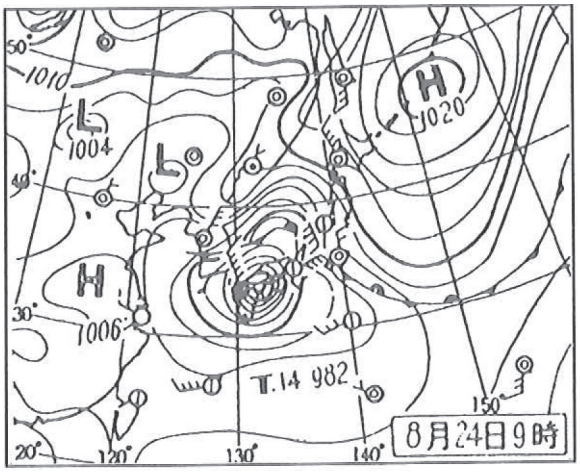


1964 年（昭和 39 年）6 月 2 日～ 3 日　強風

東支那海にあった低気圧が，発達しながら北東に進み日本海に入った。2 日午後から 3 日午前にかけて南寄りの風が強まり，徳島では 3 日 4 時 40 分に南東の風 19.5m/s の最大風速を記録，また最大瞬間風速は同 3 時 49 分に南東の風 26.8m/s を観測した。



1964 年（昭和 39 年）8 月 23 日～ 24 日　台風 14 号



この台風は迷走台風といわれたように反時計廻りに 2 回もループを画き複雑なコースをとりながらゆっくり北上し，23 日正午頃枕崎市付近に上陸，九州を斜断して 24 日午前伊予灘に入った。その後，愛媛県西部から瀬戸内海に入り，岡山県･兵庫県北部を経て，24 日 22 時頃日本海に抜けた。

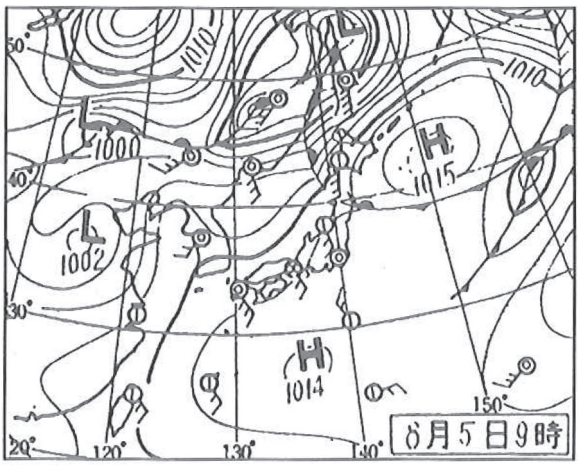
徳島県は暴風雨圏内に入り，徳島市での最大風速は南南東の風 20.3m/s，総降水量 51.8㎜，木頭では総降水量 552.0㎜を観測した。

非住家被害 3，水田冠水 35ha，道路損壊 7，山崩れ 7

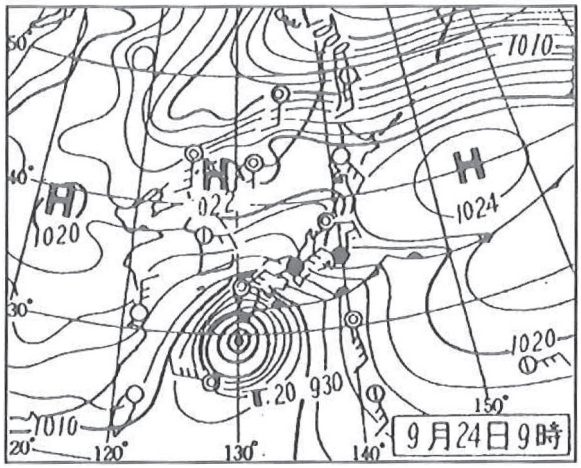
1964 年（昭和 39 年）8 月　高温

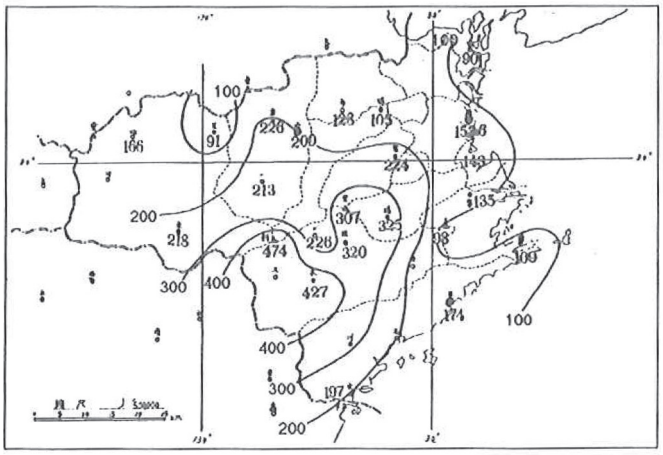
太平洋高気圧が北偏して本邦をおおい，15 時頃には強い高気圧の峰が本州中央部を東西に延びていた。

このため 13 日から 15 日は空気は乾燥して高温となった。徳島 8 月 14 日 35.4℃。月平均気温は 28.0℃で，平年より 1.5℃高く開設以来第 5 位，剣山では月平均気温 16.1℃で開設以来第 2 位であった。

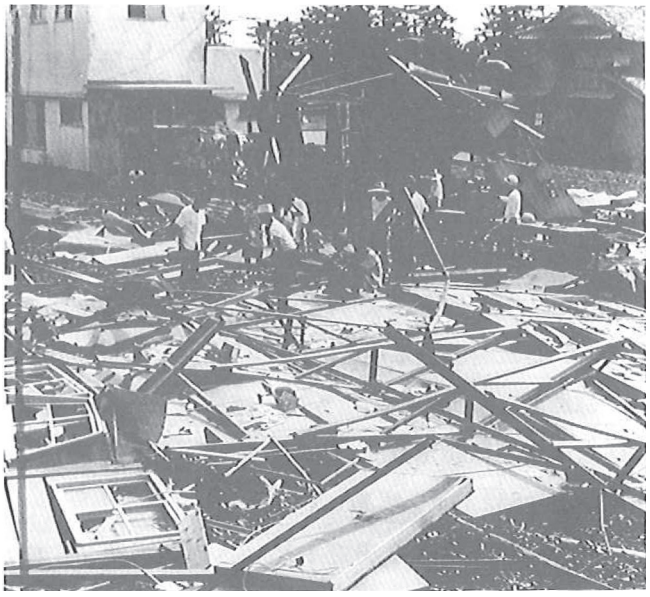


1964 年（昭和 39 年）9 月 24 日～ 25 日　暴風雨（台風 20 号）





雨量分布図



9 月 25 日　バラバラになった小松島市和田島奥村組の飯場
（徳島新聞社提供）



9 月 25 日　倒れた民家　庄町 5 丁目　西署の西約 300m
（徳島新聞社提供）



9 月 25 日　藍場町のこわれた民家（徳島新聞社提供）

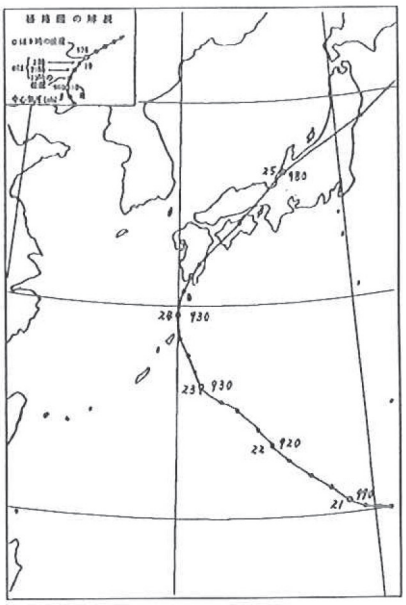


台風 20 号（徳島新聞社提供）

24 日 17 時頃大隅半島に上陸した台風 20 号は，四国北西部を通り本州を斜断して，三陸沖へ出た。徳島県下は暴風雨となり，徳島の最大風速は南南東の風 29.8m/s（最大瞬間風速は南南東の風 49.5m/s を記録）

総降水量 153.6㎜，剣山 474㎜

死者 5，負傷者 14，家屋全壊 30，半壊 76，流失 1，床上浸水 15，床下浸水 1,251，住家一部破損 989，非住家 369，田流出及び埋没 1ha，田冠水 1,410ha，畑冠水 1,218ha，道路決壊 41，橋梁 2，山崩れ 43，通信施設 369，船沈没 4，破損 4，罹災世帯 124，罹災者 505



経路図

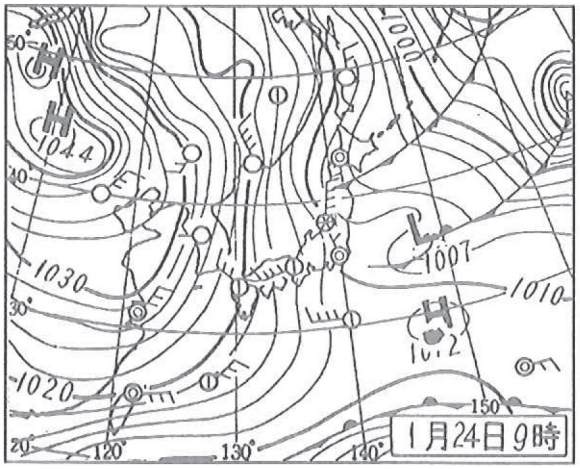
1964 年（昭和 39 年）10 月 9 日～ 21 日　放射能

10 月 16 日に行われた中国の核実験のため，西日本各地は 19 日から大気放射能が急増した。大阪では 19 日 9 時以後 5 時間で集めた空気中の塵から 1㎥ 当り 18 マイクロマイクロキュリー（平常値は 0 ～ 2.9），20 日から 21 日の降雨で 3.1，広島 2.3，松山 7.9，高松 2.0 マイクロマイクロキュリーであった。

1965年

［昭和 40 年］

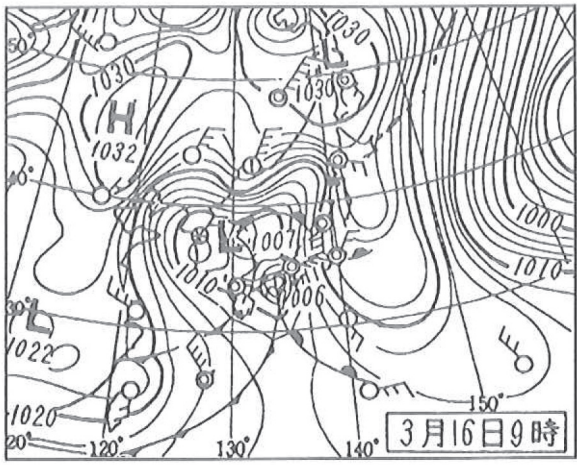
1965 年（昭和 40 年）1 月 24 日大麻町の山火事



14 時 20 分頃，板野町大麻町姫田の宮尾神社の裏山から出火。火は 15 時間にわたって燃え続け，山林約 70ha を焼いた。

被害総額約 3 千 5 百万円（大麻町役場調べ）

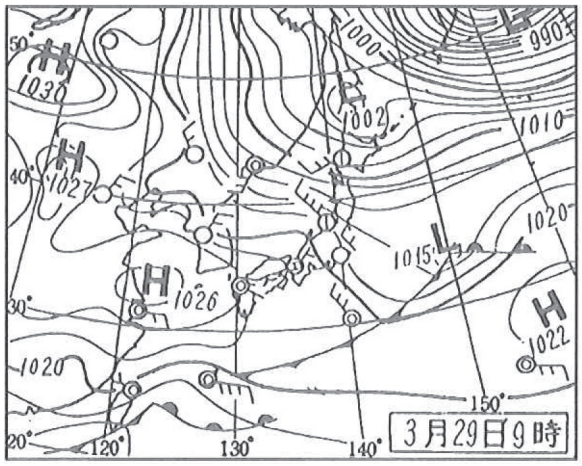
1965年（昭和40年）3月16日　大雨, 強風（寒冷前線）



16 日午後，強い寒冷前線が四国地方を通過し，強風と大雨を伴った。兵庫県，大阪府南部から奈良県にかけては記録的な大雪となった。また，強い雷を伴い大竜寺山の杉と無線柱に落雷し，3 時間にわたり延焼した。阿南市では小豆大，木頭ではラムネ玉大の降ひょうがあり葉タバコに被害が発生した。剣山では雪崩が発生し，測候所の大谷技官が遭難した。

徳島では日降水量 104.6㎜，最大瞬間風速は南東の風 32.0m/s は何れも 3 月の記録を更新して，開設以来第 1 位となった。

1965 年（昭和 40 年）3 月中旬～下旬　異常乾燥

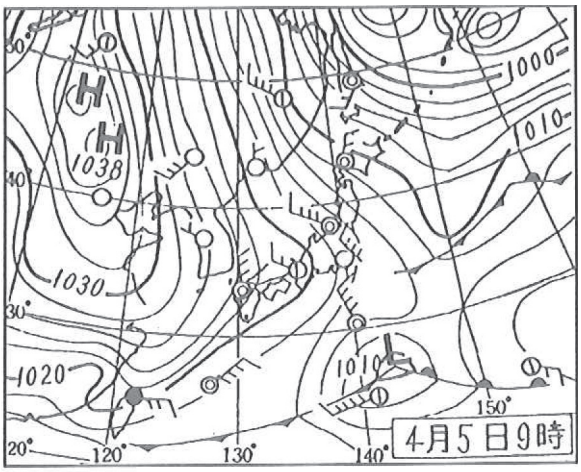


移動性高気圧が西日本をおおうことが多く，特に 12 日，15 日，19 日，23 日および 30 日は空気が乾燥した。

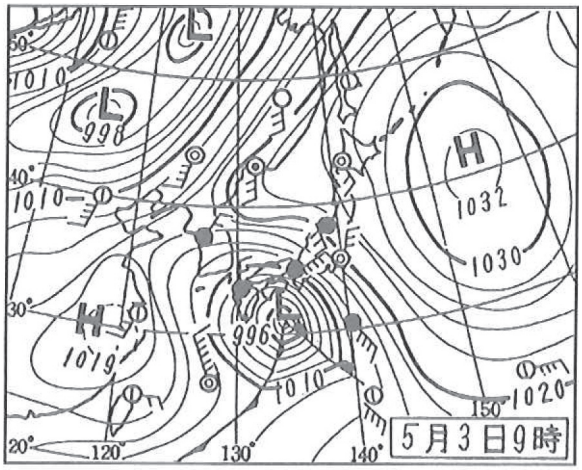
19 日の徳島の最小湿度は 12% で記録を更新し，開設以来第 1 位となった。

1965 年（昭和 40 年）4 月　低温

3 月に続き 4 月も全般に低温で，4 月の月平均気温は 12.0℃。平年より 1.2℃ 低く，低温の順位は開設以来第 3 位であった。



1965 年（昭和 40 年）5 月 3 日　大雨（低気圧）



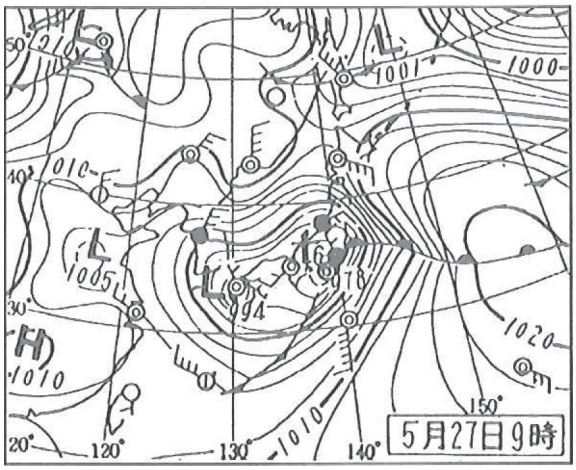
上海の南に発生した低気圧が，発達しながら四国沖を通り大雨を降らせた。

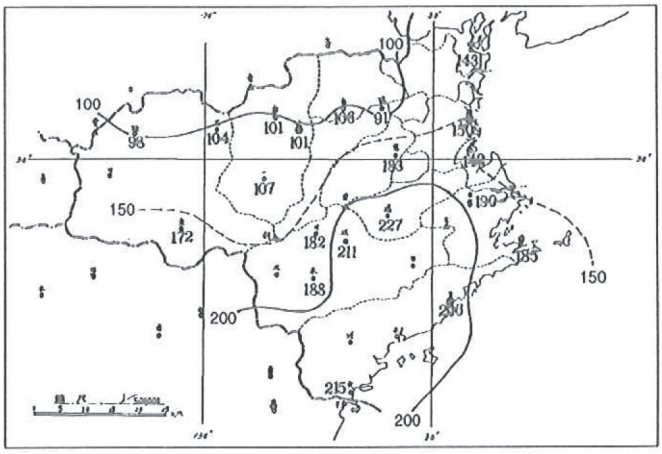
3 日徳島の日降水量は 89.5㎜で開設以来第 4 位，剣山の日日降水量は 82.5㎜で第 5 位であった。

1965 年（昭和 40 年）5 月 20 日～ 22 日　放射能

5 月 14 日に中国で核実験が行われ，全国的に大気中の放射能が増えた。2 日には大阪で塵から 28.0 マイクロマイクロキュリー，雨水から 2.1 マイクロマイクロキュリーを検出した。

1965年（昭和40年）5月26日～27日　大雨（台風6号）





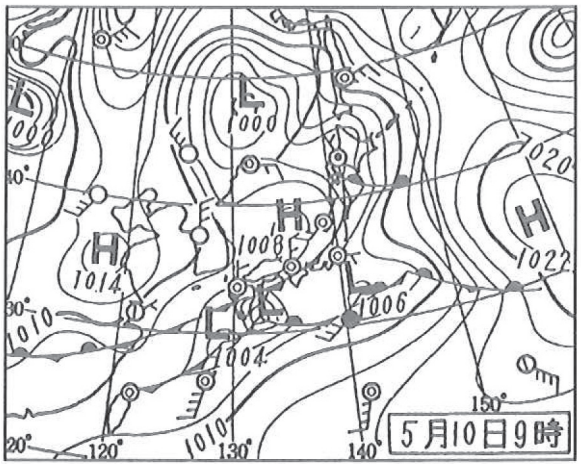
雨量分布図

台風 6 号が四国のはるか南海上を北東進し，四国沖の前線が活発になって大雨となる。県南で 200 ～ 250㎜の降水量であった。

徳島の総降水量は 150.0㎜，日降水量は 99.3㎜で開設以来第 2 位であった。

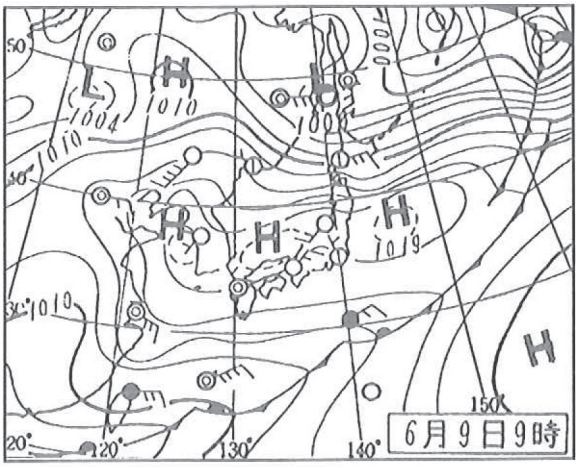
床下浸水 12　田冠水 20ha　道路 11　　山崩れ 3

1965 年（昭和 40 年）5 月　多雨



5 月は西日本全般に雨量が多く，徳島の月降水量は 383.7㎜で平年の 3 倍となり，開設以来第 1 位であった。

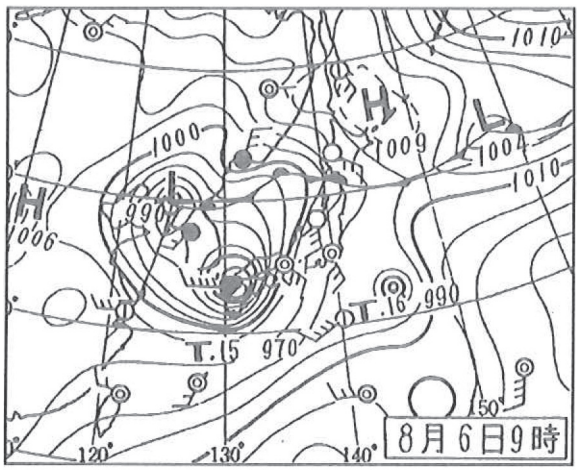
1965 年（昭和 40 年）6 月 5 日～ 10 日　異常乾燥



移動性高気圧が帯状となり，本州を 5 日から 10 日までおおって好天が続き空気が乾燥した。

9 日の徳島の最小湿度は 27% で月順位は開設以来第 1 位，10 日に剣山では 14% で第 2 位を記録した。

1965 年（昭和 40 年）8 月 6 日　強風（台風 15 号）



沖縄の西方海上から北東進した台風 15 号は，6 日 4 時過ぎ熊本県に上陸し，周防灘から山口県を通り 12 時に日本海に抜けた。

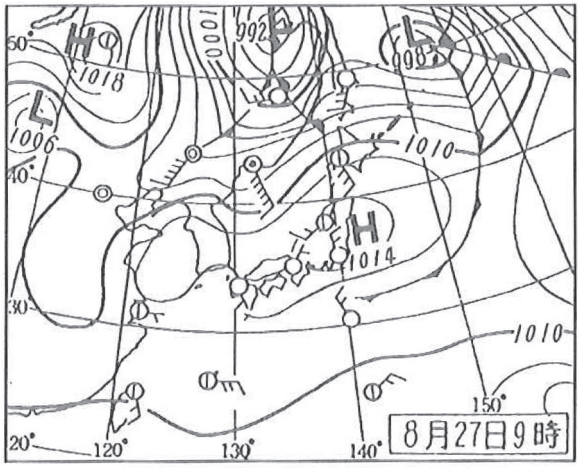
徳島県の最大風速は南南東の風 16.7m/s，降水量 9.3 ㎜，雲早山で総降水量 151㎜で当県への影響は弱かった。

山崩れ 1

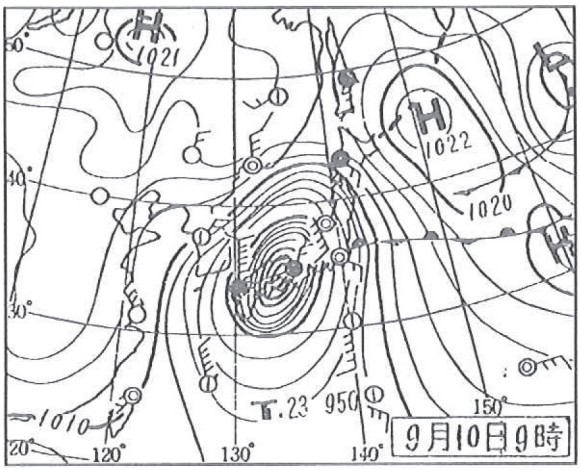
1965 年（昭和 40 年）8 月　少雨

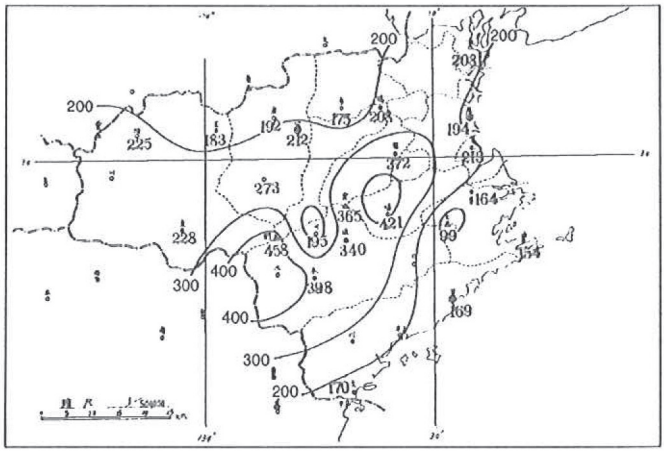
台風 15 号の影響は小さく，太平洋高気圧におおわれた。中旬にはオホーツク海から南下した高気圧が温暖高気圧に変り，この高気圧圏内で好天が続き，高温，小雨で乾燥した。

徳島の月降水量は 18.1㎜で平年の 11% に当り，開設以来第 4 位の少雨となった。



1965 年（昭和 40 年）9 月 10 日　暴風雨（台風 23 号）





雨量分布図



9 月 11 日　台風 23 号　吹っ飛んだ家　川内（徳島新聞社提供）

10 日 8 時過ぎ安芸市付近に上陸した台風 23 号（950mb）は，早い速度で北上し 12 時過ぎ若狭湾に抜けた。県下では暴風雨時間が短いにもかかわらず，大きな被害が発生した。

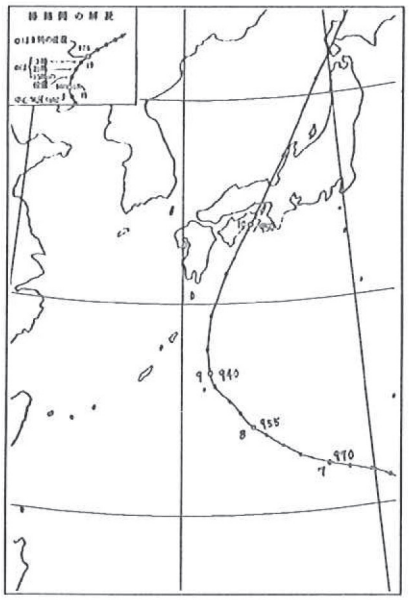
徳島では最大風速は南東の風 35.8m/s，最大瞬間風速 67m/s，総降水量 194㎜，県内最大降水量は剣山で 458㎜。

死者 5，負傷者 61，行方不明 1，家屋全壊 263，半壊 572，床上浸水 173，床下浸水 7,024，一部破損住家 18,388，非住家 2,429，田流失，埋没 18ha，田冠水 1,495ha，畑流失，埋没 60ha，畑冠水 942，道路破壊 36, 山崩れ 59, 橋流失 5, 堤防決壊 4, 鉄道 2, 通信 4,686

回線，船沈没 17，破損 15，罹災世帯 1,030，罹災者 4,313



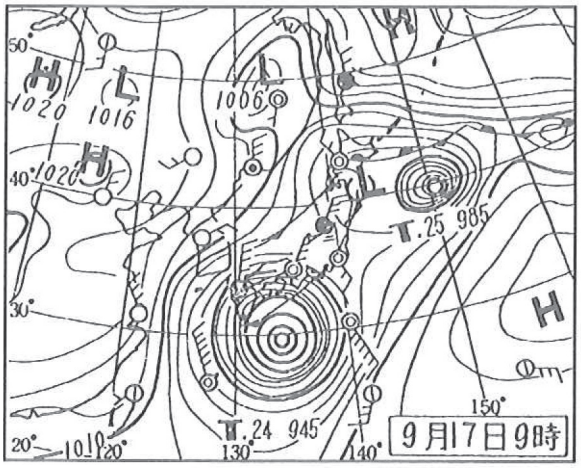
9 月 11 日　中之町ガード（徳島新聞社提供）

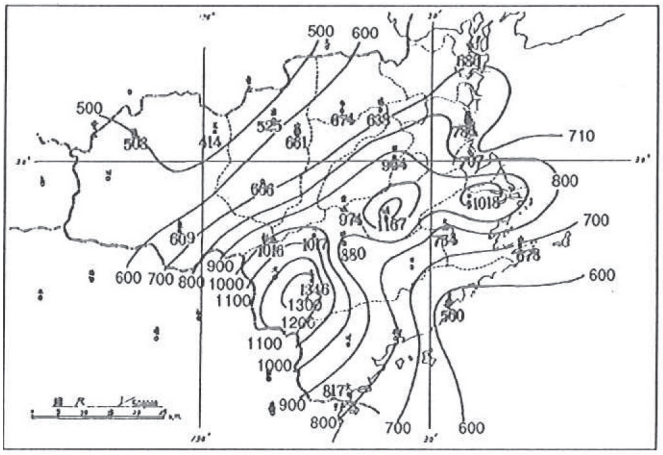


経路図

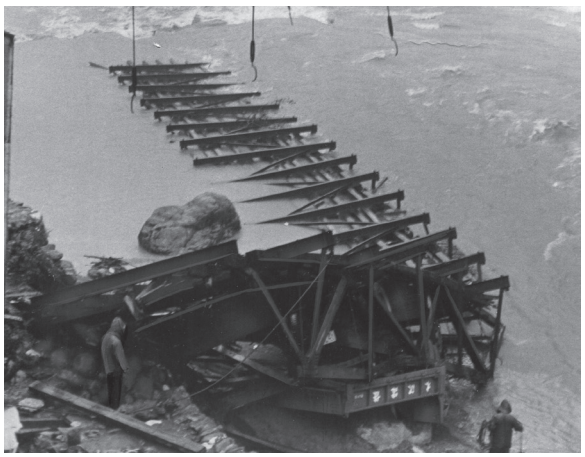
1965 年（昭和 40 年）9 月 13 日～ 18 日　大雨（台風 24 号と前線）

沖縄の南方海上で北東に向を変えた台風 24 号は紀伊半島の南海上を通過し，17 日 21 時 30 分頃志摩半島に上陸，本州中部から北日本を通過した。この台風が本州のはるか南方海上にある 13 日午後から本州付近に停滞していた前線を刺激し，17 日夜まで長期的にわたり強い雨を降らせた。徳島，岐阜，福井各県に豪雨をもたらし，開設以来 786 ㎜の記録的大雨を観測した。台風 23 号の記録的暴風雨の直後に来襲したため被害は倍加された。剣山南東斜面では 1,200㎜を超える総雨量となり，木頭では 1,346㎜を記録した。





雨量分布図



9 月 14 日　木沢村坂州橋とダンプ（徳島新聞社提供）

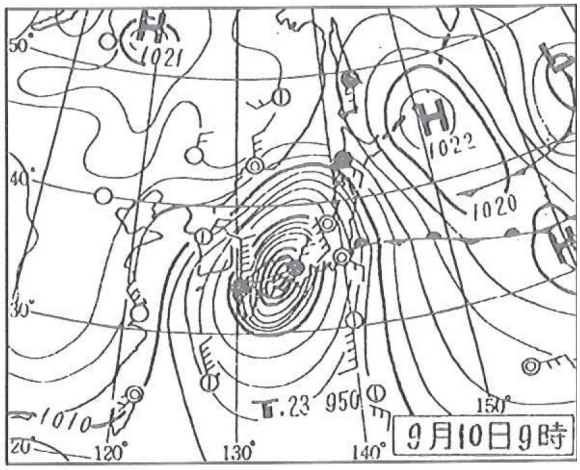
徳島では最大風速は西北西の風 16.7m/s，最大日降水量 364.7㎜

死者 6，負傷者 12，行方不明 3，家屋全壊 9，半壊 14，流失 4，床上浸水 3,365，床下浸水 22,948，一部破損住家 6，非住家 99，田流失，埋没 11ha，畑 3ha，田冠水 5,014ha，畑 1,355ha，道路損壊 72，山崩れ 141，橋流失 5，堤防決壊 14，鉄道 8，通信 1,023 回線，木材流出 20,600㎥，罹災世帯 3,394，罹災者 14,321

1965 年（昭和 40 年）9 月　多雨

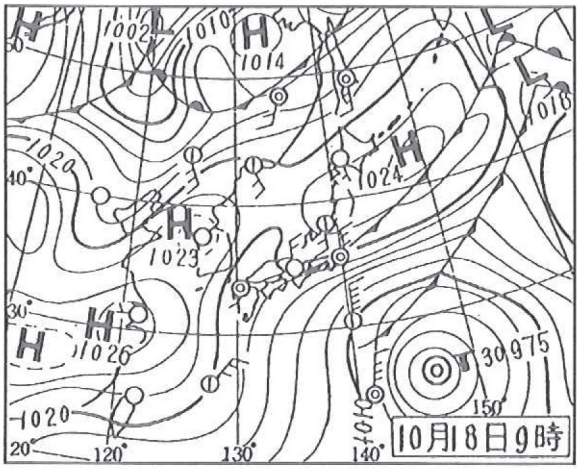


大雨のたび水浸しになる佐古小学校付近（徳島新聞社提供）



9 月は前線活動が活発で雨の日が多く，台風 23 号・24 号の来襲で月降水量は 995.1㎜。

平年の 3.9 倍となり，開設以来第 1 位を記録した。また剣山の降水量は 1,826㎜で開設以来の記録を更新した。

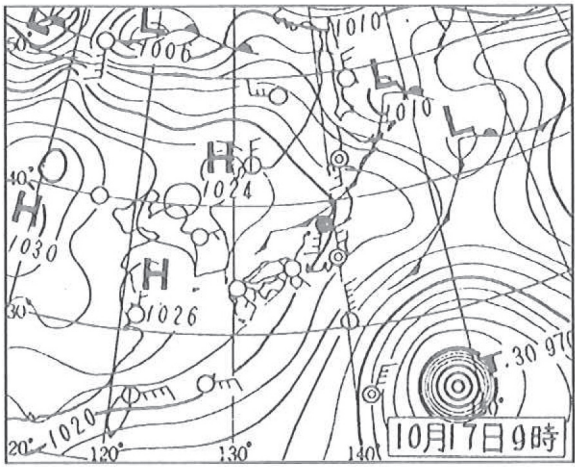


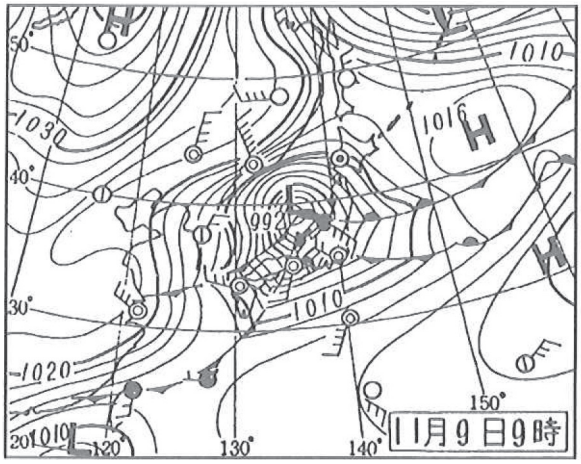
1965 年（昭和 40 年）10 月 18 日　高波（台風 30 号）

台風 30 号は父島のはるか東方海上を北上していたが，高波のため 18 日 13 時頃，牟岐沖で小型漁船 1 ～ 1.5 t の 4 隻が沈没または座礁した。

1965 年（昭和 40 年）10 月　少雨

10 月は空気が乾燥し，月降水量も少なく徳島は 42.3㎜で平年の 22% となり，少雨の順位は開設以来第 2 位であった。



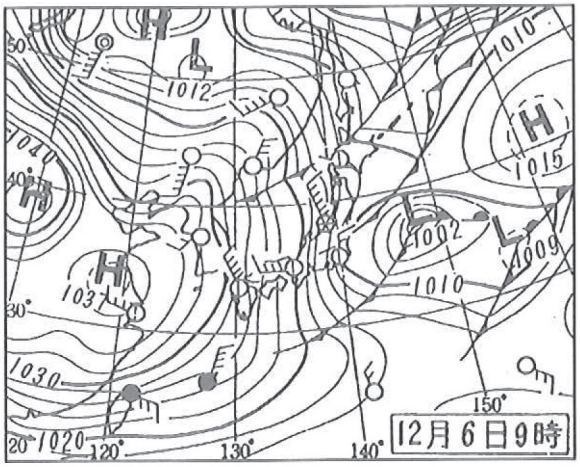


1965 年（昭和 40 年）11 月 9 日　高潮

低気圧が発達しながら日本海を通過し，この低気圧に向って南寄りの強風が吹き込み，大潮と重なったため，小松島の 6 時の潮位は 302cm（偏差 33cm）となった。この高潮で鳴門市内で 470 戸が床下浸水した。又阿南市内では道路が冠水した。

1965 年（昭和 40 年）12 月 6 日　寒波

5 日から 6 日にかけて強い季節風が吹き，徳島では 6 日に平年より 18 日早い初雪があった。

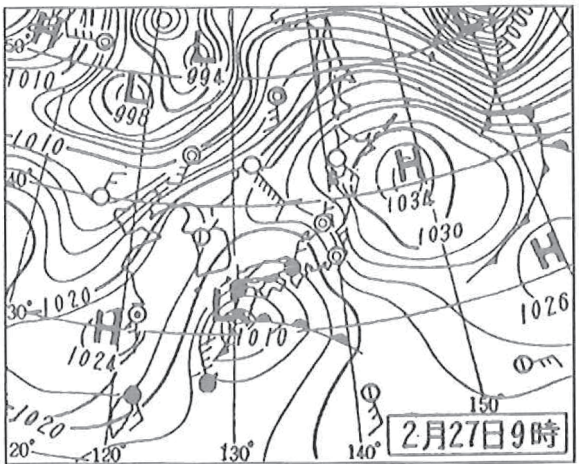


1966年

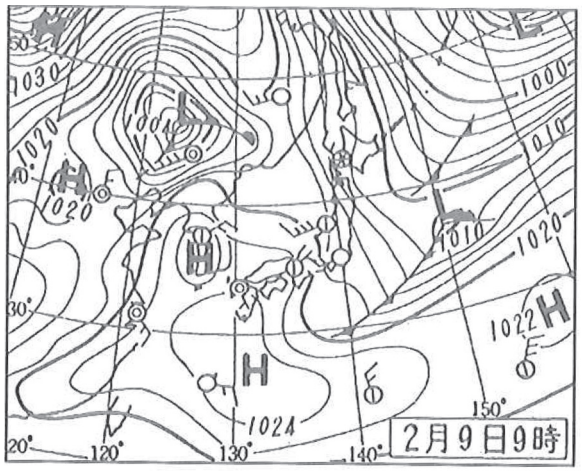
［昭和 41 年］

1966 年（昭和 41 年）2 月 27 日　大雨（四国沖低気圧）

四国沖を通過した低気圧により，季節外れの大雨となった。徳島の日降水量は 70.5㎜で，開設以来第 3 位の記録であった。



1966 年（昭和 41 年）2 月　高温

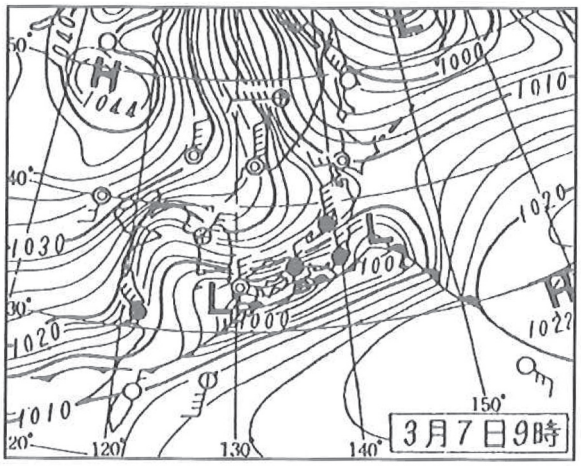


冬型の気圧配置は一時的で長続きせず，暖気が流入して月平均気温は 7.1℃で平年より 1.9℃高く，高温の順位は開設以来第 5 位であった。

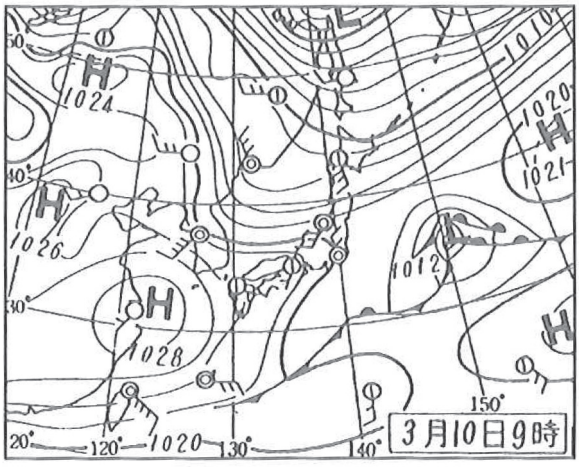
1966 年（昭和 41 年）3 月 2 日～7 日　高温，長雨

前線が停滞して南北に振動し，低気圧が 4 日と 7 日に通り，高温多湿の気流が流入して異常な高温，長雨となった。

4 日の平均気温は 15.8℃で，平年より 8.9℃も高かった。



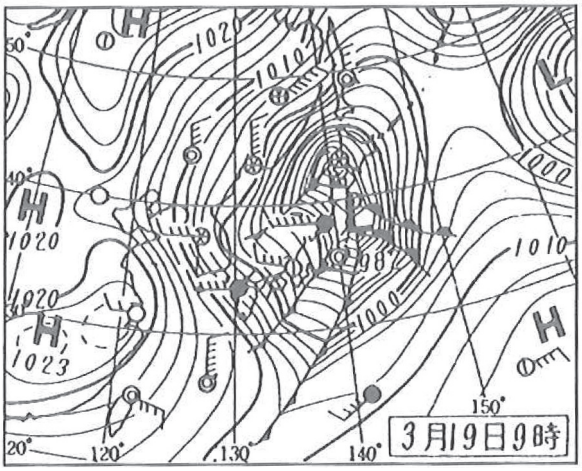
1966 年（昭和 41 年）3 月 10 日　異常乾燥



華中の高気圧におおわれて好天となり，徳島の最小湿度は 28% で 3 月の新記録となった。

1966 年（昭和 41 年）3 月 19 日～20 日　強風

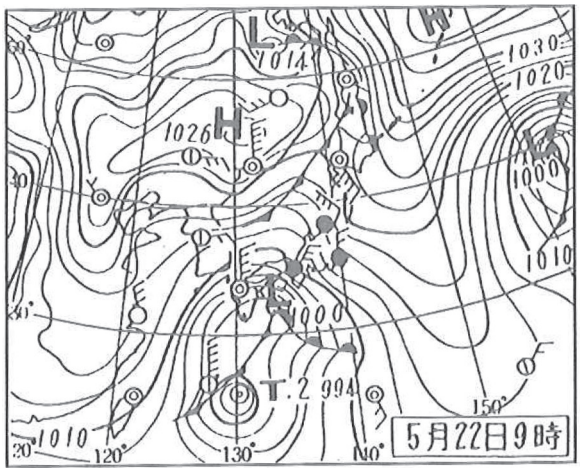
小型台風並みに発達した低気圧が北海道にあり，大陸から高気圧が張り出して 19 日の徳島の最大風速は西の風 16.3m/s に及んだ。



1966 年（昭和 41 年）3 月　高温

下旬後半は低めに経過したが，その他の日は全般に高く，月平均気温は 10.1℃。平年より 2.0℃高く，高温の順位は開設以来第 5 位であった。

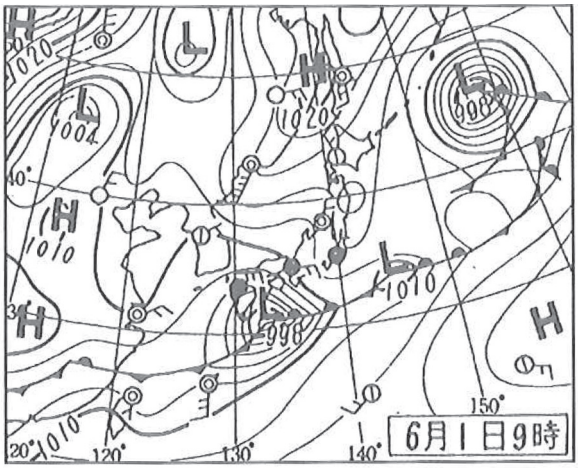
1966年（昭和41年）5月21日～22日　大雨（低気圧, 台風）



低気圧が四国沖をゆっくり東進し，台風２号が沖縄付近から北東進して，高温多湿の空気を送り込んだ。このため県南では特に大雨となり，宍喰で総降水量 493㎜，徳島で 82㎜を記録した。

道路損壊 2，山崩れ 10，家屋の損壊 1，田畑冠水 55ha

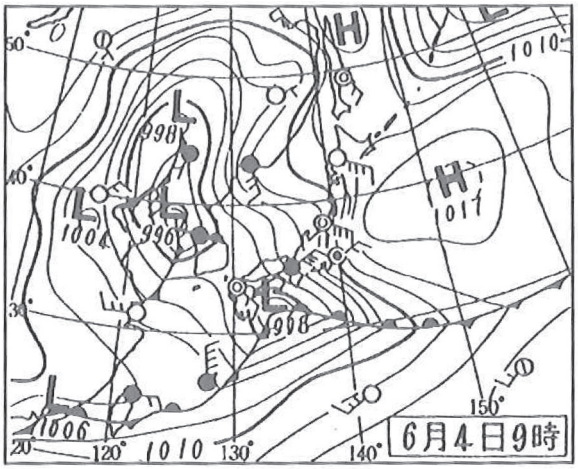
1966 年（昭和 41 年）6 月 1 日　大雨（台風 3 号くずれの低気圧）



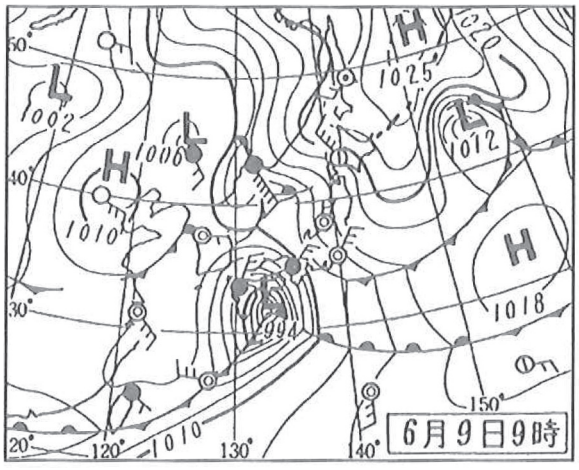
南支那海で発生した台風３号は，北東進して６月１日６時には九州南沖に接近した。しかし，998mb の熱低に衰え，四国沖を北東進したため大きな影響はなかった。徳島での最大風速は東北東の風 5.3m/s，総降水量は 66㎜。南部では 80㎜程度の降水量であった。崩れ 3

本州の南海上に前線があり，その前線上の低気圧が発達しながら東進した。徳島で日降水量 73.9㎜，宍喰で 132㎜（総降水量 149㎜）の大雨があり，山崩れ・土砂崩れの被害が発生した。

1966 年（昭和 41 年）6 月 4 日　大雨（低気圧）



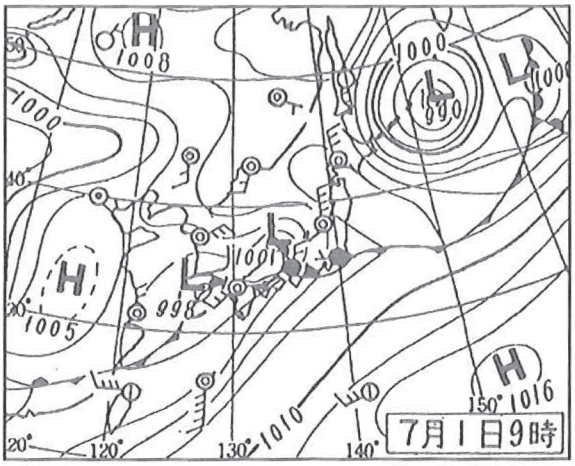
1966 年（昭和 41 年）6 月 9 日　強風雨（梅雨前線）



台湾付近で発生した低気圧は梅雨前線とともに北上して，九州南岸で 996mb に発達し本州南岸を東進した。

徳島での最大風速は北北西の風 13.0m/s，日降水量 85.1㎜。県南で総降水量 100㎜前後の雨量があり，山崩れなどの被害があった。

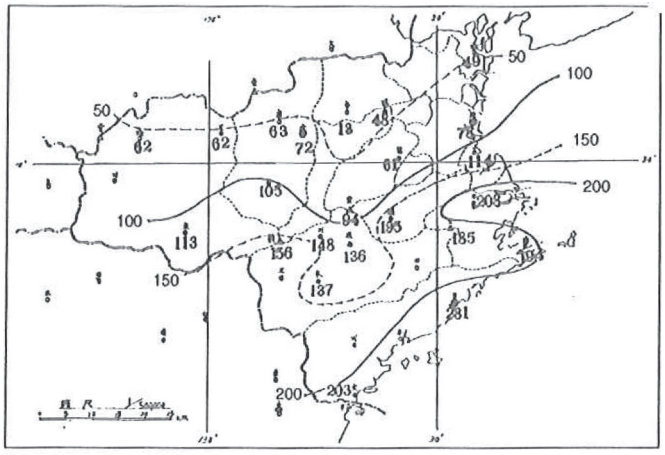
1966 年（昭和 41 年）7 月 1 日～ 2 日　大雨（梅雨前線）



上海付近に発生した低気圧は，発達しながら東進して四国地方を通過した。梅雨前線の活動が活発となり，大雨を降らせた。

総降水量　日和佐 231㎜，徳島 78㎜，床下浸水 190，非住家被害 2，田畑冠水 120ha，

道路損壊 16，山崩れ 15，鉄道 1



雨量分布図

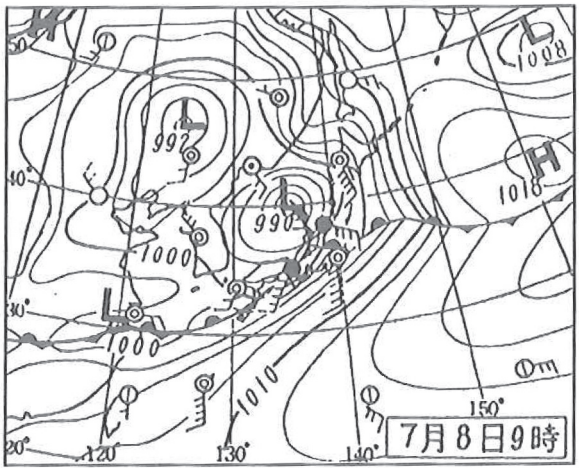
1966年（昭和41年）7月3日～6日　異常乾燥

発達した低気圧が去り，梅雨前線が南海上に南下した。このあと，4 日は移動性高気圧が日本海に入り，好天となって空気が乾燥した。

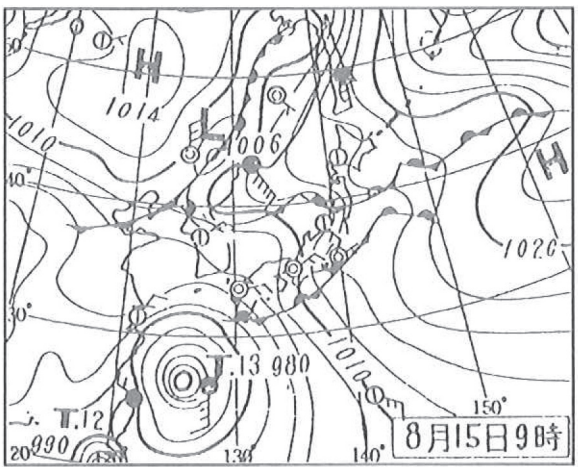
4 日の徳島の最小湿度は 32% で極値を更新した。

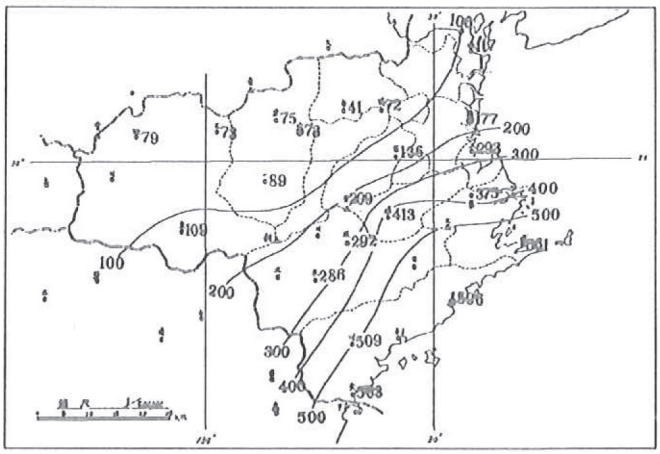
1966 年（昭和 41 年）7 月 7 日～ 9 日　大雨（梅雨前線）

南下していた梅雨前線は北上をはじめ，7 日には前線上の低気圧が日本海に入り 992mb に深まった。前線活動も活発となって，剣山で総降水量 396㎜，徳島 103㎜の大雨となり，山崩れなどの被害が発生した。



1966 年（昭和 41 年）8 月 13 日～ 15 日　大雨（台風 13 号と前線）





雨量分布図



全壊した日和佐町奥河内　福田さん宅（徳島新聞社提供）

台風 13 号が 13 日～ 16 日にかけて沖縄の西方海上に停滞し，太平洋沿岸に停滞していた前線を刺激して県南部沿岸に 500 ～ 600㎜の大雨（日和佐 596㎜，宍喰 563㎜，徳島 177㎜）を降らせた。日和佐では日降水量 413㎜を観測し，日和佐川が氾濫した。

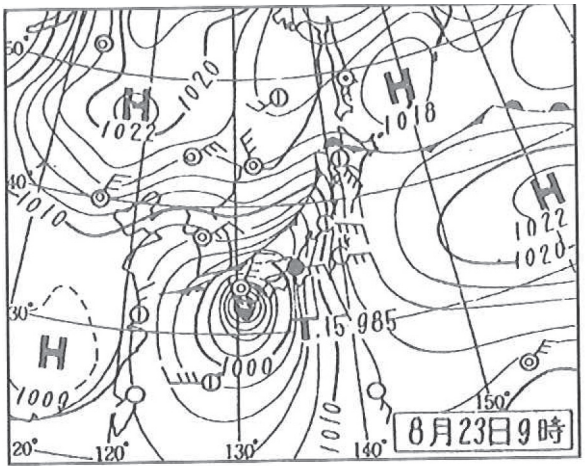
床上浸水 20，床下浸水 449，非住家 2，田冠水 259ha，畑冠水 15ha，道路損壊 3，山崩れ 9，罹災世帯 21，罹災者 85

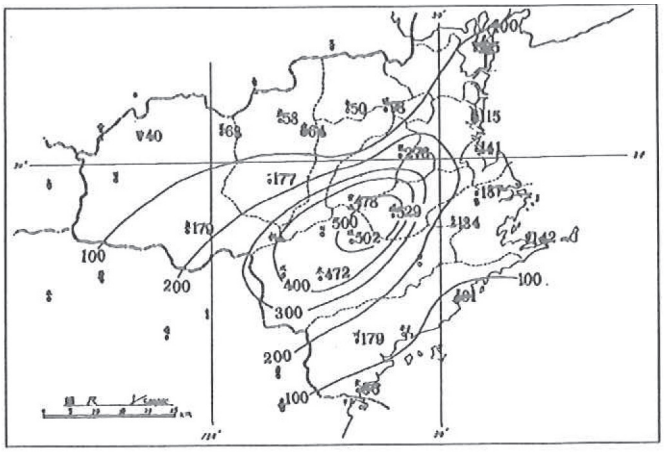
1966年（昭和41年）8月13日～21日　異常潮位（高潮）

13 日午後から 21 日まで異常潮位が続き，特に 18 日朝の満潮時には鳴門市で床下浸水 72 戸，阿南市で床上浸水 15 戸，床下浸水 100 戸（徳島新聞調）の被害があった。原因は日本海を発達した低気圧が通過したことや，東支那海の台風 13 号による南よりの強風と大潮が重なったためと考えられる。

18 日　6 時 40 分　小松島潮位　322cm

1966 年（昭和 41 年）8 月 22 日～ 24 日　大雨（台風 15 号）

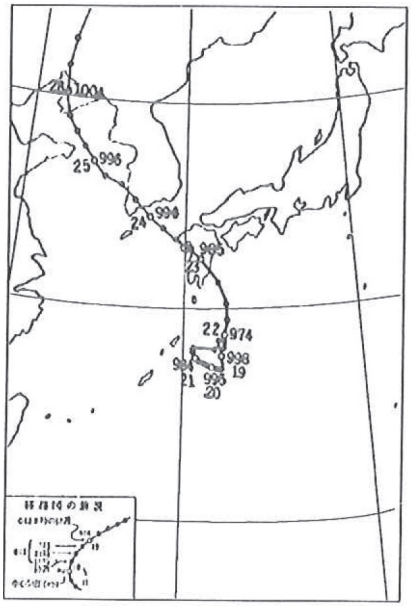




雨量分布図

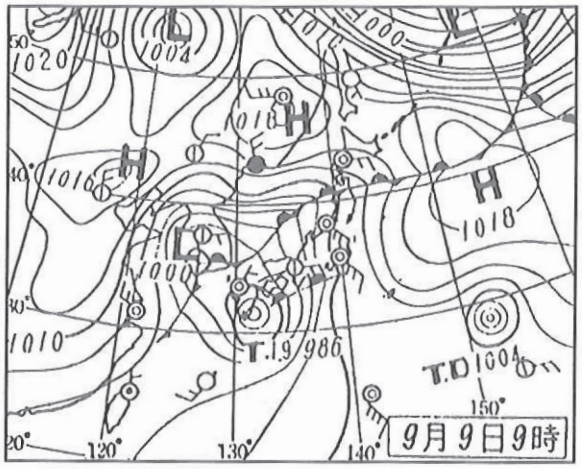
奄美大島の南東海上で発生した台風 15 号はゆっくり北上して，23 日 7 時頃宮崎市付近に上陸し九州を斜断して朝鮮海峡へ入った。徳島県では福原旭 529㎜，坂州 502㎜，徳島 115㎜と多量の雨が降り，徳島の最大風速は南南東の風 17.7m/s，最大瞬間風速は南東の風 28.7m/s であった。

家屋半壊 1，非住家 1，床下浸水 41，田冠水 3ha，山崩れ



経路図

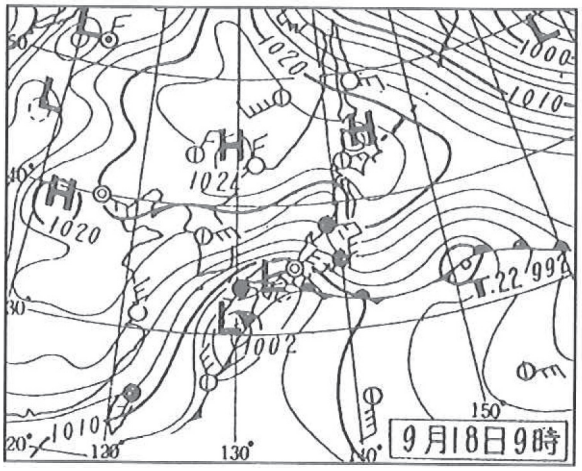
1966 年（昭和 41 年）9 月 9 日　強風雨（台風 19 号）

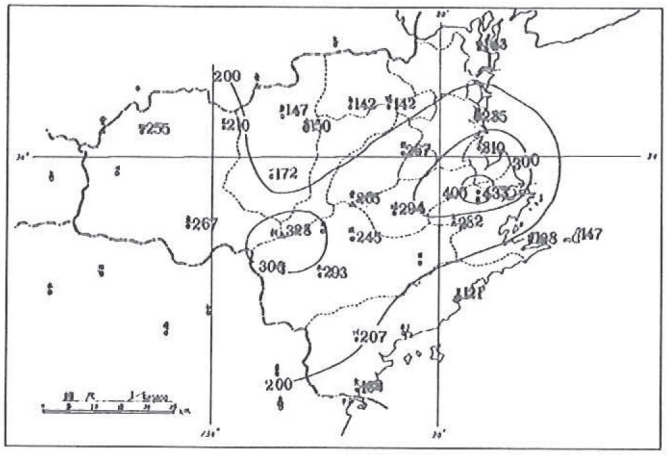


沖の鳥島の東海上で台風となった19号は，北上して豊後水道を（980mb）で通過し，広島県東部に上陸。その後，鳥取県東部を経て日本海に入った。徳島の最大風速は南東の風18.0m/s，総降水量40㎜，県内最多降水量は雲早山254㎜であった。

道路損壊1，山崩れ2

1966年（昭和41年）9月16日～19日　大雨（台風21号くずれの低気圧）





雨量分布図

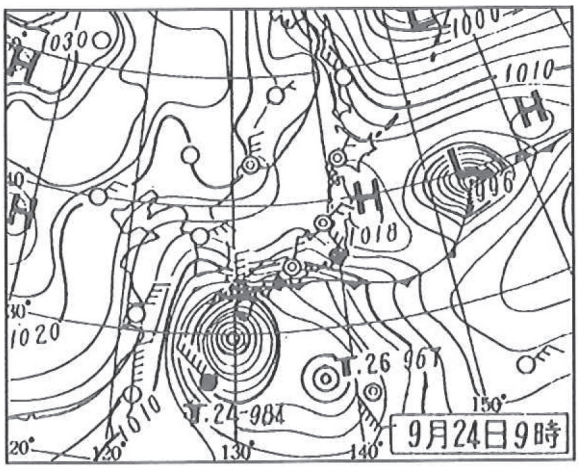
ルソン島の西方から北東進した台風21号は，奄美大島の北方海上で温低となり，四国沖に停滞していた前線を刺激して県下全域に大雨を降らせた。総降水量は徳島235㎜，富岡433㎜，剣山328㎜，徳島の最大風速は西北西の風8.7m/s。

家屋半壊1，非住家1，床上浸水13，床下浸水897，一部損壊1，田冠水286ha，道路損壊7，堤防決壊1，山崩れ10，鉄道1



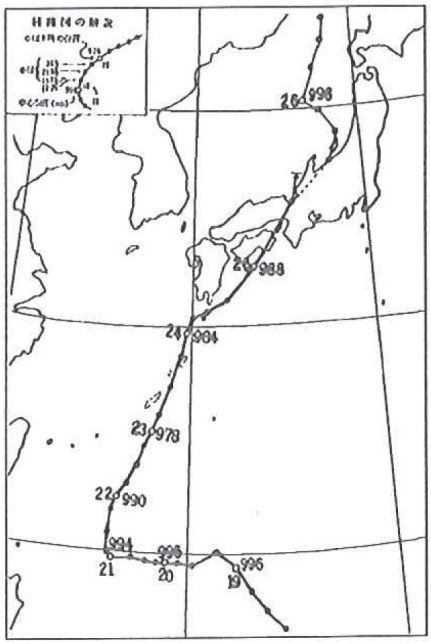
冠水した国道　富岡町（徳島新聞社提供）

1966年（昭和41年）9月23日～25日　強風雨（台風24号）



沖縄の東海上を北上した台風24号は，25日11時頃高知県安芸市付近に上陸（990mb）し，県西部を通過して淡路島の西方を北東に進んだ。

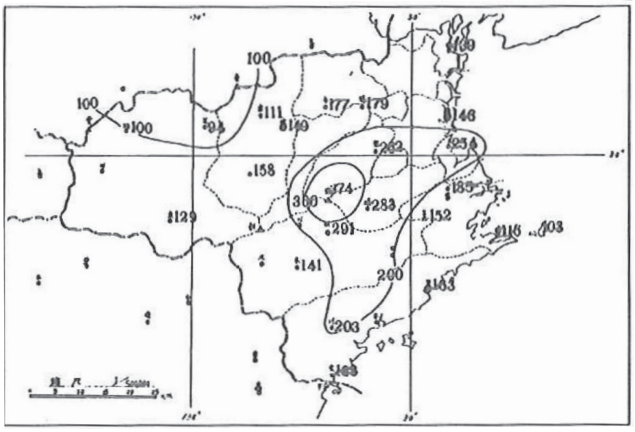
四国沖に停滞していた前線の活動が活発となり大雨となった。



経路図

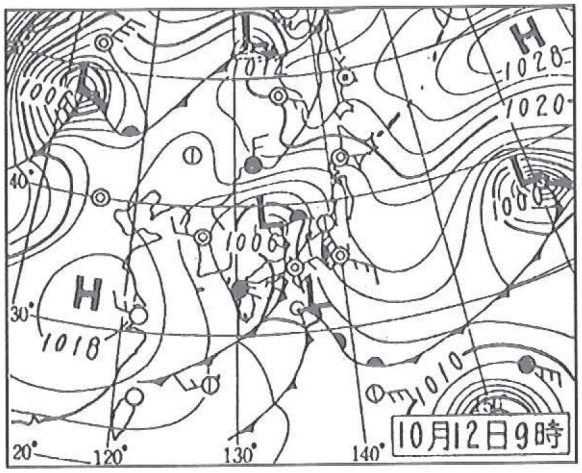
雲早山の総降水量は 374㎜，徳島では 146㎜，徳島の最大風速は南南東の風 15.7m/s であった。

死者 2，床下浸水 32，非住家 1，田冠水 28ha，道路損壊 7，山崩れ 7，堤防決壊 7



雨量分布図

1966 年（昭和 41 年）10 月 12 日　大雨（二つ玉低気圧）

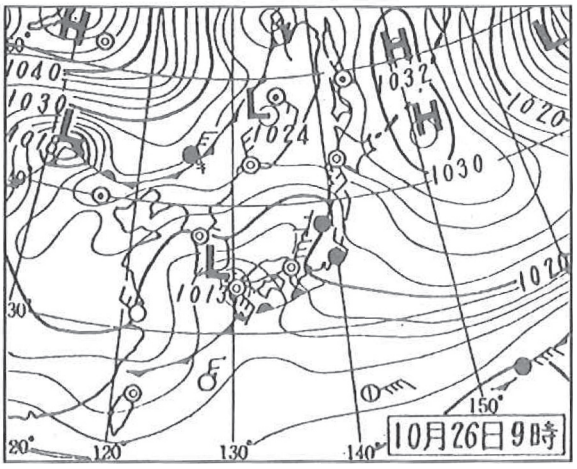


二つ玉低気圧の通過で県南部では 200 ～ 250㎜の大雨となり，徳島市内では落雷のため停電した。

徳島日降水量 88.8㎜，川上総降水量 253㎜

床下浸水 30（徳島新聞調）

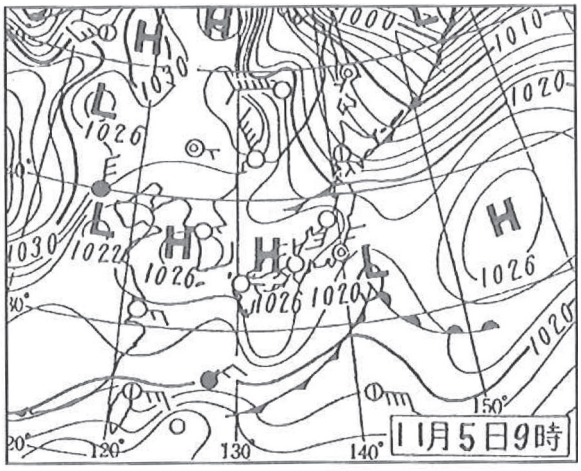
1966 年（昭和 41 年）10 月 25 日～ 26 日　大雨（低気圧，前線）



低気圧がゆっくり山陰地方を通過し，前線が四国沖に停滞したため天気はぐずついた。

暖湿気流の流入で雷が発生，宍喰では 433㎜の大雨となった。徳島の総降水量は 92㎜であった。床下浸水 3，道路決壊 3，山崩れ 1，鉄道 1

1966 年（昭和 41 年）11 月 5 日　異常乾燥



移動性高気圧の中心が瀬戸内を東進したため，空気の乾燥は著しく，徳島の最小湿度は 29% で極値を更新した。

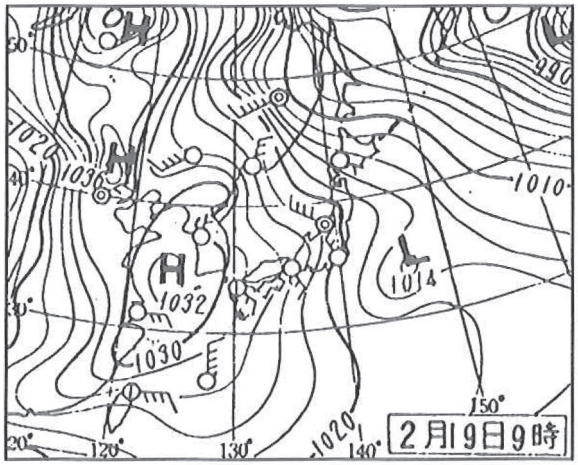
1966 年（昭和 41 年）12 月 28 日　放射能

中国は 28 日に西部地区で 5 回目の大気圏内核爆発実験を行った。このため日本では数日間，塵埃や雨水により放射能が降下した。

1967年

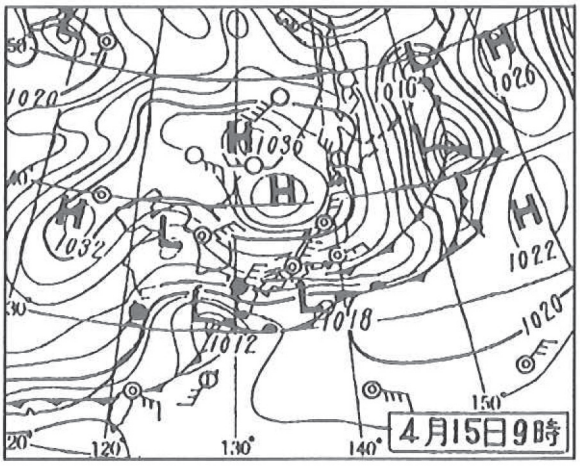
［昭和 42 年］

1967 年（昭和 42 年）2 月　小雨



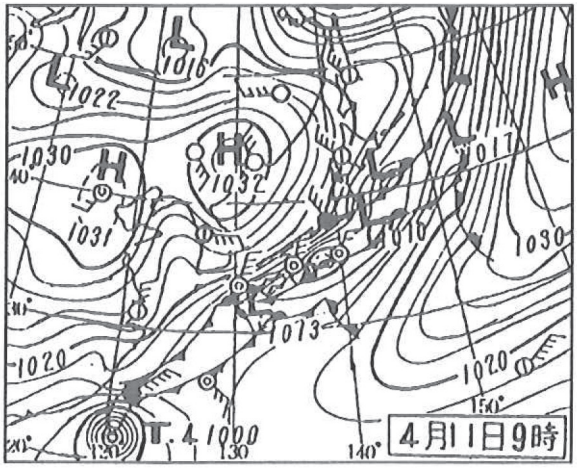
気圧の谷は 5 日周期で西日本を通過したが何れも弱く，徳島の月降水量は 9.6㎜で平年の 16% にあたり，小雨の順位は開設以来第 2 位であった。

1967年（昭和42年）4月8日～20日　長雨（菜種梅雨）



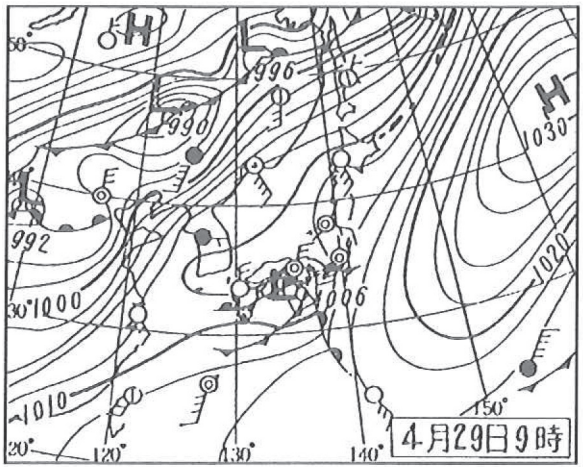
8 日から 9 日にかけて低気圧が日本海と本州南岸を東進し，その後前線が西日本付近に停滞して連日のように雨を降らせ異常な長雨となった。総降水量徳島 150㎜，川上 347㎜

1967 年（昭和 42 年）4 月 11 日　バネッサ号流出油事故

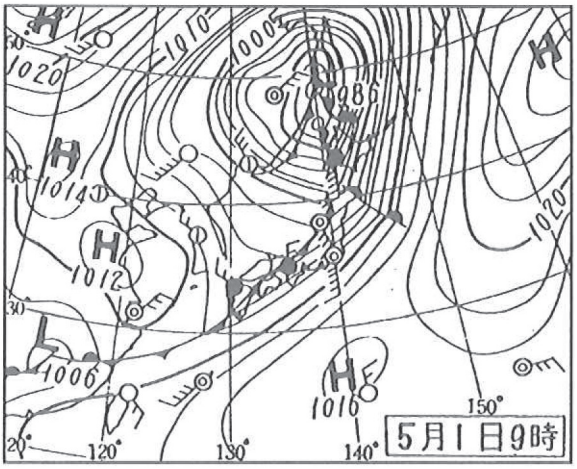


未明阿南市椿泊町の刈又崎灯台の北西海岸付近でスウェーデンの貨物船バネッサ号（22，701t　乗組員 34 人）が座礁し，船底の一部が破損，燃料用重油 150t が海上へ流出した。県下の船舶の航行の増加に伴う海上の安全対策が見直される契機となった。

1967年（昭和42年）4月28日～29日　大雨（低気圧）



28 日から 29 日にかけ南海沿いに前線が停滞し，低気圧が四国沖を通過したため大雨となった。川上では日降水量 209㎜，総降水量 381㎜。



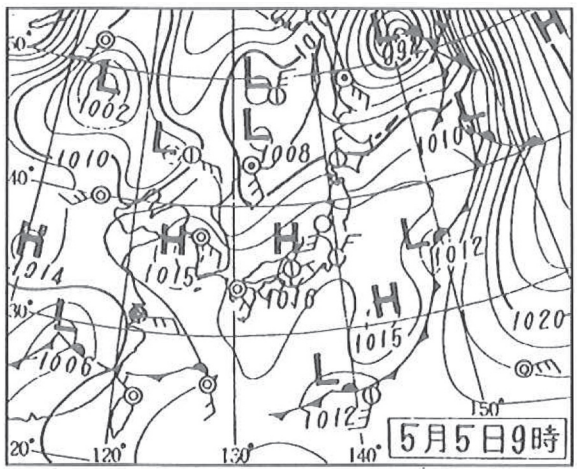
1967 年（昭和 42 年）4 月　多雨

上旬・中旬とも雨の日が多く，菜種梅雨の現象が顕著。月降水量は 255.5㎜で平年の 193% となり，多雨の記録は開設以来第 2 位となった。

1967 年（昭和 42 年）5 月 1 日　高温

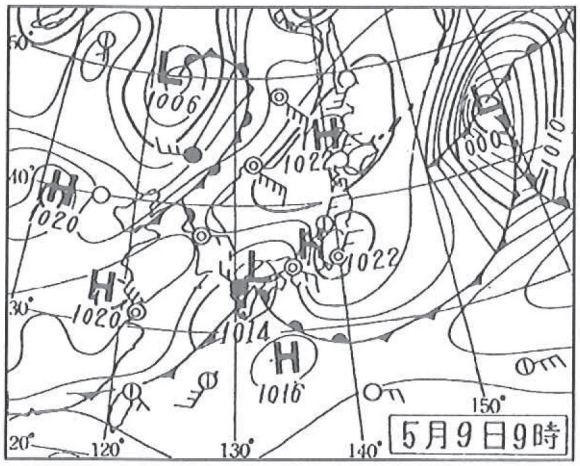
日本海の低気圧に向かって南寄りの暖かい風が吹き込み，徳島では 30.8℃ となり，7 月下旬の気温極値を更新した。

1967 年（昭和 42 年）5 月 4 日～ 5 日　異常乾燥



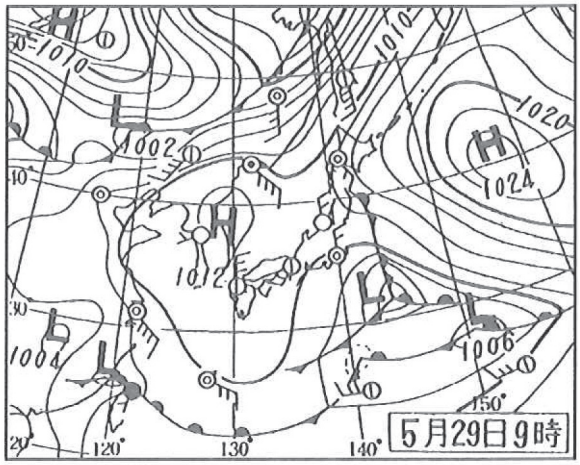
2 日から 5 日にかけ西日本は移動性高気圧におおわれて晴天が続き，空気が乾燥した。4 日徳島の最小湿度は 12% で，5 月としての最少記録であった。

1967 年（昭和 42 年）5 月 9 日～ 10 日　大雨（低気圧）



九州北部から四国，紀伊半島南岸を通った低気圧により，県南部では大雨となり，日和佐では日降水量 278㎜，時間降水量 75㎜を観測した。

1967 年（昭和 42 年）5 月 28 日～ 29 日　降ひょう



深い気圧の谷が，強い寒気を伴って通過した。このため，大気不安定となり，28・29 日の両日各地で降ひょうを伴う強い雷が発生した。28 日 14 時剣山付近で直径 5㎜，高越山で直径 2㎝の降ひょう。29 日 2 時頃から未明にかけて，吉野川流域で発生した強い雷雨に伴って美馬郡一帯に降ひょう，脇町では直径 3 ㎝のひょうが 50㎝も積ったと云われ午後になっても溶けなかった。昼過ぎから県内各地で発雷，降ひょうがあり，ひょうの大きさは剣山，穴吹で直径 7㎝，坂州で小豆大，神山で 2㎝。葉煙草・桑・野菜・果樹にかなりの被害が発生した。

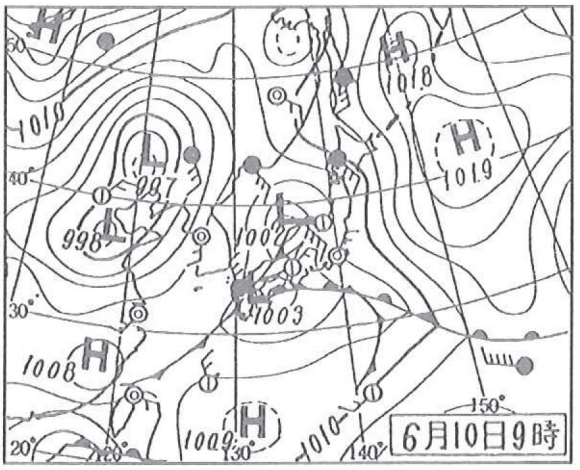
屋根瓦破損 30，有線電話障害 30 回線，電灯・電力線 5 ヵ所（徳島新聞調）

1967 年（昭和 42 年）5 月～ 6 月　高温

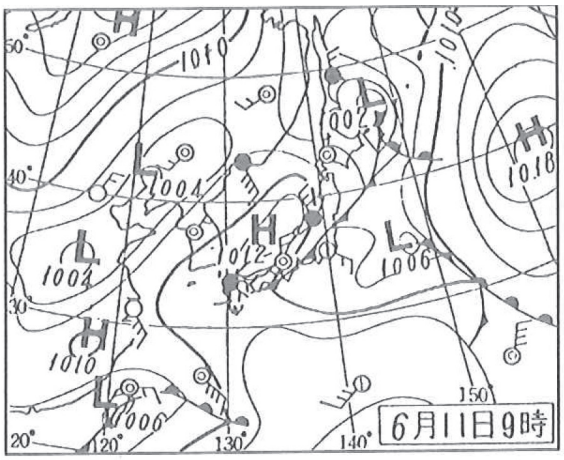
4 月の終り頃からの高温傾向は 6 月まで続いた。5 月の徳島の月平均気温は 19.5℃ で平年より 1.8℃ 高く，気象台開設以来の記録となった。また 6 月の平均気温は 22.8℃ で平年より 1.2℃ 高く，高温の順位は開設以来第 5 位となった。

1967 年（昭和 42 年）6 月 9 日～ 10 日　大雨（低気圧）

低気圧が四国の南海上を東進したため県南で大雨となり，川上では日降水量 255㎜，総降水量 304㎜，徳島の総降水量 20㎜であった。



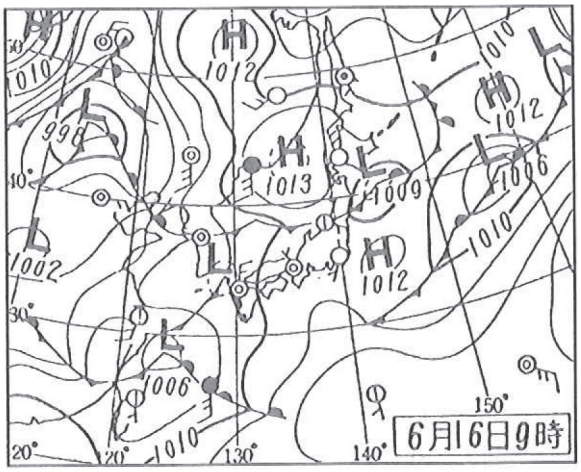
1967 年（昭和 42 年）6 月 11 日　徳島名店街のビル火災



6 時過ぎ徳島駅前名店街（29 業者 35 店）から出火，鉄筋コンクリート 2 階建て一部 4 階（延べ床面積 1,983㎡）のうち，1 ～ 2 階の店舗（延べ面積 1,793㎡）が全焼し，9 時 30 分頃鎮火した。県下初の大規模ビル火災は，都市構造の変貌に伴う今後のビル火災の防災対策面で大きな課題を残すことになった。

被害額　約 8 千万円（徳島市消防本部調）

1967 年（昭和 42 年）6 月 16 日　降ひょう



15 時頃，三野町で大豆大の降ひょうがあり，葉煙草に被害があった。

1967 年（昭和 42 年）6 月 19 日　地震

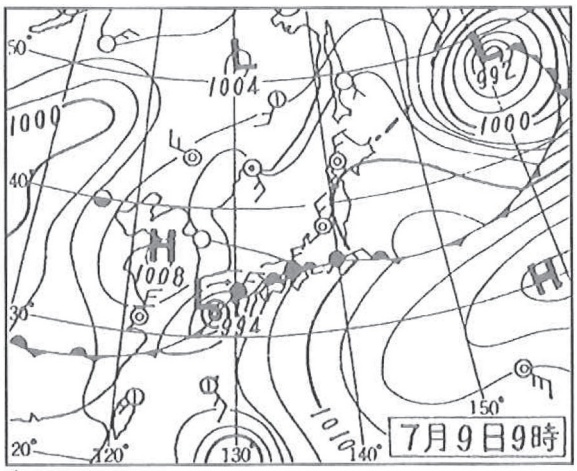
13 時 58 分頃，徳島で震度Ⅲの局地地震発生した。震源地は紀伊水道で深さは 30㎞であった。

1967 年（昭和 42 年）6 月　小雨（干ばつ）

梅雨入りは平年より 1 週間程遅れ，大きな雨もなく，徳島の降水量は 47.5㎜（平年の 23%）で少雨の順位は気象台開設以来第 1 位の記録となり，水稲を中心に干害が広がった。

1967 年（昭和 42 年）7 月 7 日～ 10 日　大雨（昭和 42 年 7 月豪雨）

九州北部から関東地方にまたがる広範囲に大雨が降り，大被害が発生した。台風 7 号崩れの低気圧が九州北部から瀬戸内を通り，西日本に停滞していた梅雨前線を刺激し剣山周辺で 400㎜を超える大雨となった。





濁流に流されバラバラに壊れた民家　山城町（徳島新聞社提供）

総降水量　剣山 436㎜，徳島 73㎜，時間降水量は椿泊で 100㎜，木頭 93㎜など記録的な大雨があり，日降水量の最大は木頭の 337㎜であった。

死者 3，家屋全壊 4，半壊 8，流失 2，床上浸水 5，床下浸水 41，非住家 2，田冠水 323ha，畑冠水 10ha，道路 11，山崩れ 27，鉄道 3，船流出 2，小舟流失 13，罹災住宅 14，罹災者 38

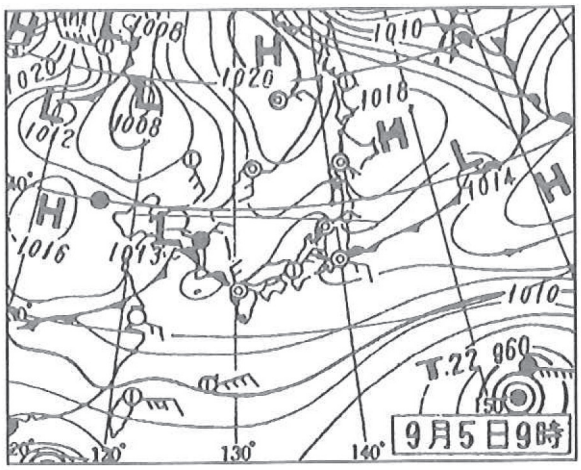
1967 年（昭和 42 年）7 月中旬～ 10 月下旬　少雨（干ばつ）

6 月は干ばつ傾向に経過したが，7 月上旬の大雨で干ばつに終止符を打った。梅雨明け後は西日本は再び干ばつに見舞われ，10 月 27 日の台風 34 号による大雨まで干ばつが続いた。特に九州と中国･四国の瀬戸内沿岸は大きな干害を受けた。徳島県内でも鳴門市内の簡易水道が断水するなど，

農作物や果樹に被害がでた。

徳島の 7 月 11 日から 10 月 25 日までの総降水量は 170㎜で，8 月の月降水量は 31.9㎜（平年の 19%），9 月の月降水量は 55.4㎜（平年の 22%）で何れも非常に少なく，9 月は少雨の順位が開設以来第 2 位であった。

1967 年（昭和 42 年）8 月高温



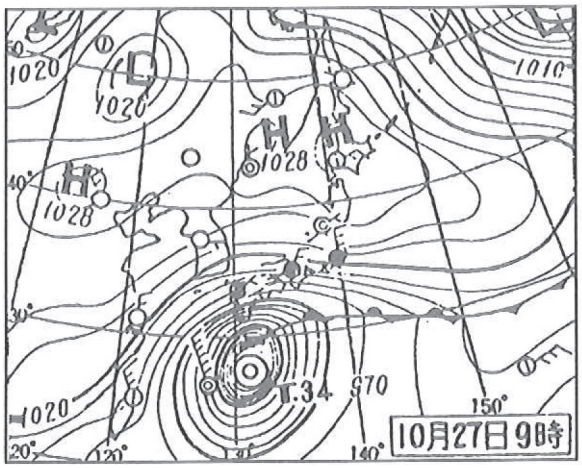
8 月の月平均気温は西日本全般に高く，徳島では 28.2℃で平年より 1.7℃高かった。高温の順位は開設以来第 5 位であった。

1967 年（昭和 42 年）9 月 5 日大雨（前線）

前線通過のため，5 日 3 時から約 1 時間，鳴門市の中心部に約 35㎜の局地的な大雨があった。

床下浸水 60（徳島新聞調）

1967年（昭和42年）10月27日～28日　大雨（台風34号）



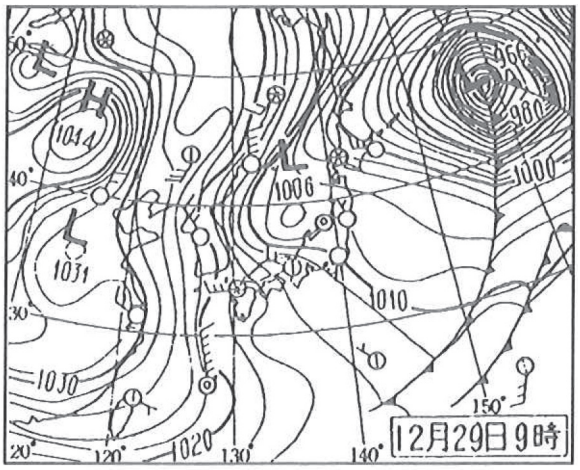
沖縄の南海上から北東進し 28 日 3 時 30 分頃，愛知県伊良湖岬に上陸した。この季節はずれの台風 34 号の影響で，停滞していた秋雨前線の活動が活発となり，25 日夜半から 28 日朝まで雨が降り続いた。県東部で 200 ～ 250㎜の総降水量があり，西日本では渇水のなやみに終止符を打った。

徳島の最大風速は北西の風 16.8m/s，日降水量 163.3㎜，総降水量 179.8㎜

家屋全壊 2，半壊 5，一部損壊 1，非住家全半壊 25，床下浸水 141，道路損壊 3，山崩れ 6，橋流失 1，鉄道 2，通信 2 回線，罹災世帯 7，罹災者 27

又，小松島港内に仮係留中の外材約 4，900 本が強風と高波で港外に流出，養殖ノリに大被害を与えた。

1967 年（昭和 42 年）12 月 28 日～ 31 日　寒波



27 日夜から冬型の気圧配置となり，強い寒波が来襲した。31 日の徳島の最低気温は－ 4.3℃で 12 月の日最低気温の順位は開設以来第 1 位となった。この間，各地に雪を降らせ，30 日穴吹では 15㎝の積雪のため，山間部のバス等の交通機関はマヒ状態となった。

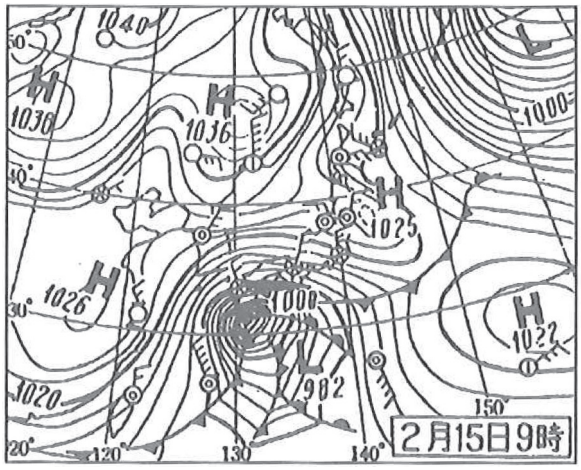
1967 年（昭和 42 年）12 月　低温，少雨

大陸高気圧が例年より発達して，しばしば強い冬型の気圧配置となり，連日低温で経過した。徳島の月平均気温は 5.5℃で，平年より 2.2℃低く，低温の順位は開設以来第 3 位となった。また，降水量は 5.9㎜と非常に少なく，平年の 23%であった。

1968年

［昭和 43 年］

1968 年（昭和 43 年）2 月 15 日　大雪（台湾低気圧）

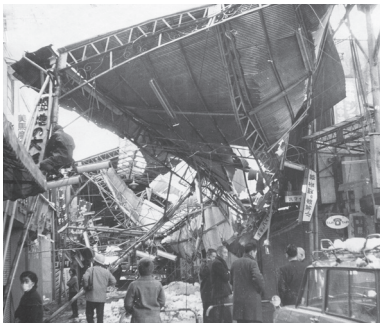




大雪で折れた電柱　法花町（徳島新聞社提供）



押しつぶされたアーケード　徳島市元町２丁目（徳島新聞社提供）



雪の重みでメチャメチャにこわれた商店街アーケード（籠屋町）
（徳島新聞社提供）

台湾付近に発生した低気圧が発達しながら四国沖を通過し（980mb），九州から関東にまたがる南岸沿いの各地に記録的な大雪を降らせた。徳島の最深積雪は 19cmあったが，水分を多量に含み総降水量は 75㎜となった。気温は低く，15 日から 22 日までの 8 日間降り積った雪は溶けなかった（積雪の継続日数 8 日は開設以来第 1 位の記録）。この雪は昭和 26 年 2 月 14 日の大雪から 17 年ぶりの，南国としては珍らしい大雪となった。

16 日 9 時の積雪 池田 55cm，鬼籠野 51cm，芝生 38cm。電灯線・通信線は着雪のため切断，通信は完全に杜絶し，陸・海・空の交通は全面的にストップした。

また，樹木・果樹の枝折れや倒木，促成ビニールハウスの倒壊などで，山林・農作物の被害は甚大であった。

家屋一部破損 9，非住家 7，田・畑の被害 9,542ha，通信 2,177 回線



全滅したキュウリのビニールハウス　石井町藍畑
（徳島新聞社提供）



除雪作業に出動したグレーダー　徳島市元町で
（徳島新聞社提供）

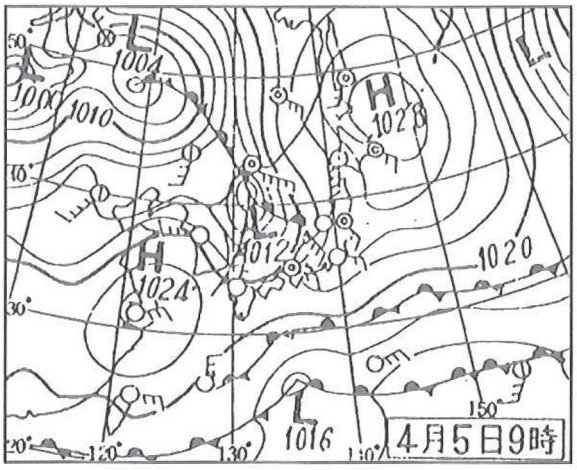
1968 年（昭和 43 年）2 月　低温

北日本の一部を除き全国的に低温で，徳島の月平均気温は 3.0℃となり，平年より 2.2℃低く開設以来第２位の低温の月となった。

1968 年（昭和 43 年）4 月 1 日　日向灘地震

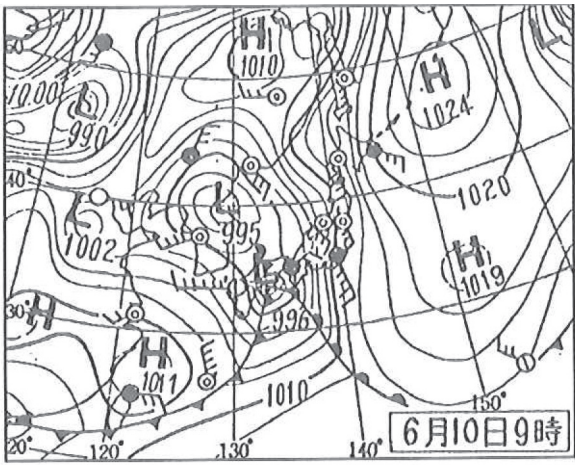
1 日 9 時 42 分頃，西日本一帯でかなり強い地震（M7.5）があり，震源は日向灘の海底 30kmで九州東岸，四国，紀伊半島の沿岸で津波があった。震度Ⅴは宿毛，Ⅳ高知・松山，Ⅲ徳島・穴吹。津波は発震後 20 ～ 30 分で四国沿岸に達し，紀伊水道沿岸には 1 時間半後に到達した。大阪管区気象台では 10 時 00 分に津波警報を発表し，14 時 00 分に解除した。小松島港では，津波の第 1 波を 10 時 55 分に観測し，最大全振巾は 12 時 46 分に 22cm，周期は 30 分であった。真珠養殖イカダ，養殖イワシに大被害が発生し，国鉄は全線が一時ストップした。

1968 年（昭和 43 年）4 月 5 日　降ひょう



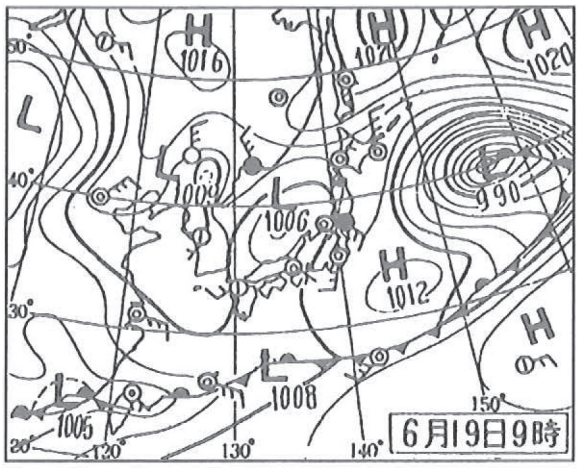
寒気を伴った気圧の谷の通過で 5 日 21 時 10 分頃，鳴門市北灘町一帯に 2 ～ 3 分間直径 2cmの降ひょうがあり，葉煙草の一部に被害がでた。（徳島新聞調）

1968 年（昭和 43 年）6 月 10 日　大雨（低気圧）



東支那海から東進してきた低気圧が四国地方を通過したため大雨となった。日降水量は徳島 58㎜，宍喰 156㎜。徳島の最大風速は南東の風 15.0m/s。

海部郡では床下浸水 50，山･土砂崩れ数ケ所（朝日新聞調）

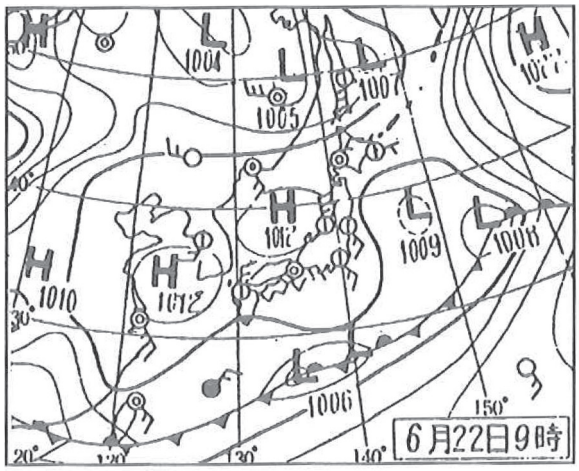


1968 年（昭和 43 年）6 月 19 日　降ひょう

日本海の低気圧から南西に延びる寒冷前線の通過に伴い 12 時 30 分頃，那賀郡一帯で激しい雷雨があり，直径 1cmのひょうが 30 分位降って葉煙草に被害を及ぼした。

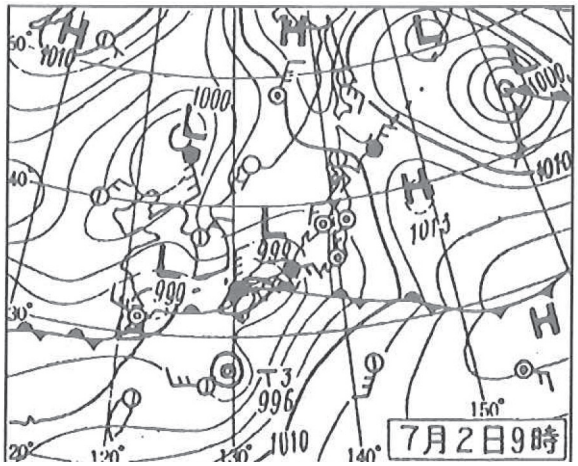
また，徳島・小松島市内に落雷があった。（徳島新聞調）

1968 年（昭和 43 年）6 月 22 日　降ひょう



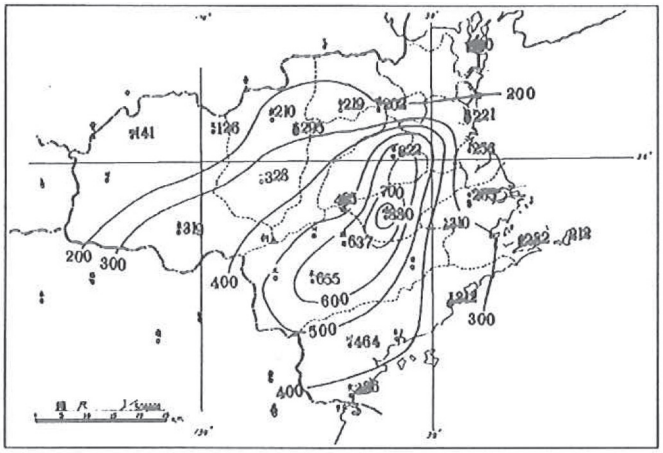
22 日午後，美馬郡貞光町，美馬町，脇町で約 20 分間小豆大のひょうが降り，葉煙草に被害があった。（徳島新聞調）

1968 年（昭和 43 年）7 月 2 日　大雨（梅雨前線）



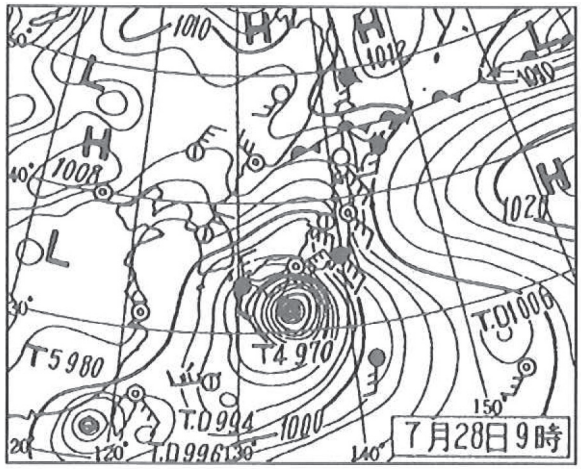
台風 3 号の北西進に伴って梅雨前線の活動が活発となり，強い雨が降って徳島市内で床下浸水などの被害があった。

総降水量は，　徳島 56.5㎜，剣山 203㎜であった。
床下浸水 10，道路破損 1，山崩れ 3



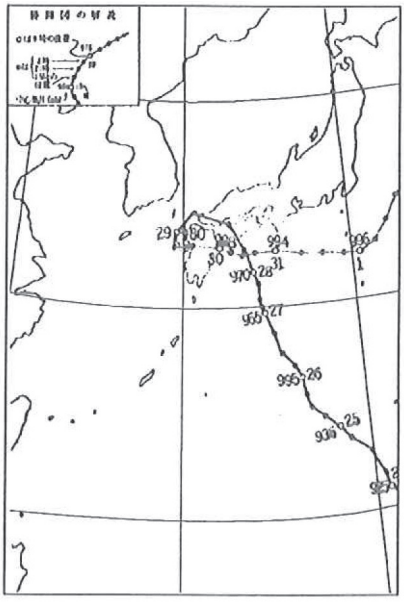
雨量分布図

1968年（昭和43年）7月28日　暴風雨（台風4号）



グアム島の東方海上から北西進した台風 4 号は 28 日 19 時 30 分頃，高知県須崎市付近に上陸。松山市付近を通り，浜田市西方から日本海に出た。その後九州を迂回して熱帯低気圧となって東進，土佐沖を通って 31 日に東海道沖に去った。この台風は以上経路をとったため，長時間にわたって北東風が吹いた。福原旭では日降水量は 520㎜，総降水量 880㎜を観測した。徳島の最大風速は南東の風 18.2m/s，総降水量 220.5㎜。

負傷者 1，家屋全壊 2，一部破損 2，非住家 5，床上浸水 44，床下浸水 1,591，田冠水 993ha，畑被害 38ha，道路損壊 21，山崩れ 48，鉄道 1，橋梁流出 2，通信 2 回線，木材流失 18㎥，船流失 1，罹災世帯 46，罹災者 155

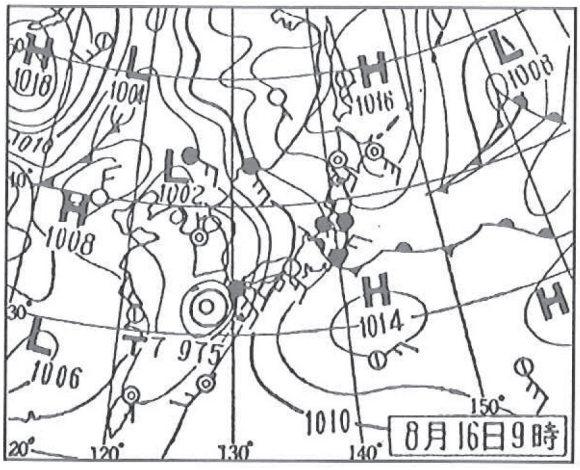


経路図

1968 年（昭和 43 年）8 月 6 日　地震

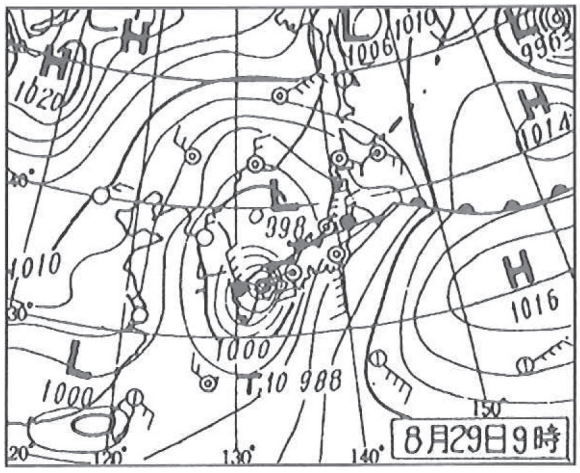
1 時 17 分　マグニチュード 6.6 の地震が発生，震源地は豊後水道で津波はなかった。震度Ⅴ　宇和島，Ⅳ　宿毛・松山・岡山，Ⅲ　徳島・穴吹

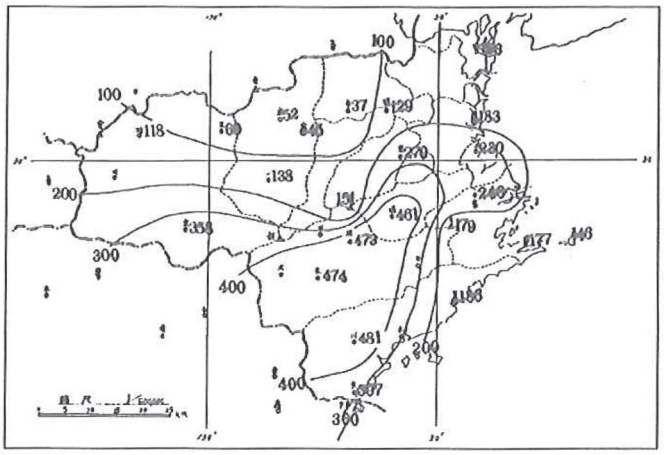
1968 年（昭和 43 年）8 月 16 日～ 17 日　大雨（台風 7 号）



夏台風特有の迷走ぶりを発揮した台風 7 号は，ウェーク島の南西海上から北西に進み，四国沖を南西進して東支那海から向きを変え朝鮮海峡を北東進した。徳島の最大風速は南南東の風 12.8m/s，総降水量 15㎜，京上総降水量 280㎜　山崩れ 3

1968 年（昭和 43 年）8 月 28 日～ 29 日　大雨（台風 10 号と前線）

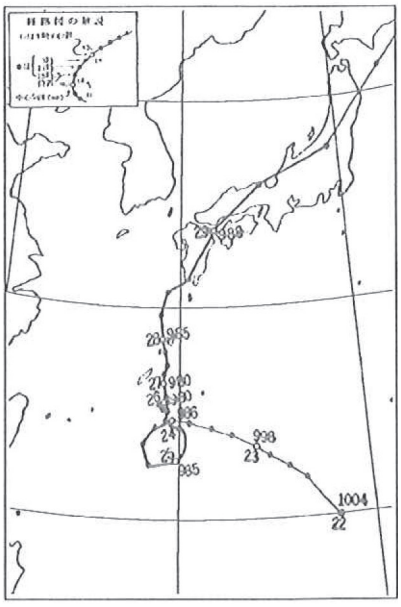




雨量分布図

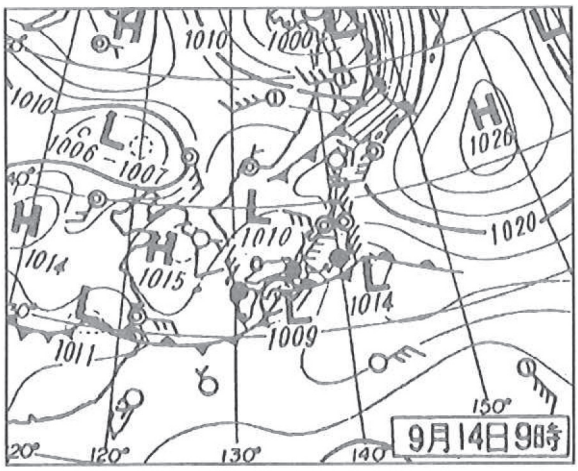
台風 10 号は沖縄の南東海上で 2 ～ 3 回旋回し，28 日 6 時頃奄美大島付近を通過。29 日未明九州薩摩半島に上陸し，南九州を横断して岡山県に上陸，本州上を北東進した。この台風は本州南沿いに停滞していた前線を刺激し，関東以西の各地に局地的な大雨を降らせた。総降水量は剣山 488㎜，川上 481㎜，徳島 183㎜，最大風速は南の風 20.0m/s。

負傷者 2，家屋全壊 1，半壊 1，一部破損 2，非住家 4，床上浸水 5，床下浸水 357，田流失 3ha，田冠水 701ha，畑冠水 106ha，道路損壊 1，橋流失 2，山崩れ 27，船舶沈没 1，罹災世帯 5，罹災者 21



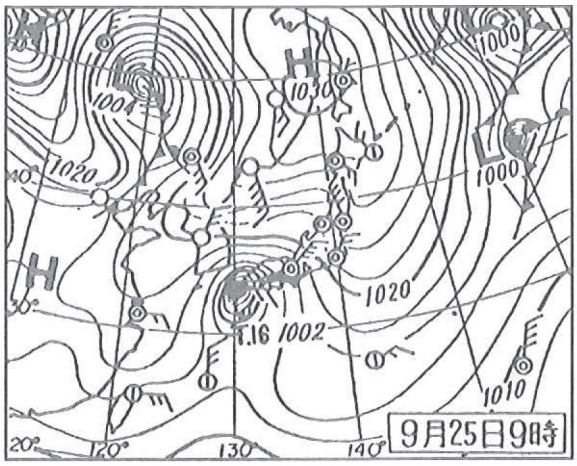
経路図

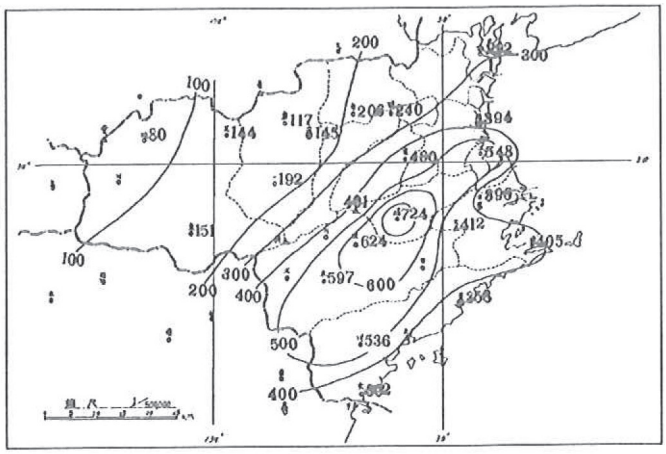
1968 年（昭和 43 年）9 月 13 日～ 14 日　大雨（低気圧）



黄海南部を東進した低気圧は，九州北部から四国を経て紀伊半島南岸に進んだ。県南部の日和佐，椿泊では日降水量 177㎜を観測した。徳島の総降水量 72㎜。

1968 年（昭和 43 年）9 月 25 日～ 27 日　台風 16 号（第 3 宮古島台風）

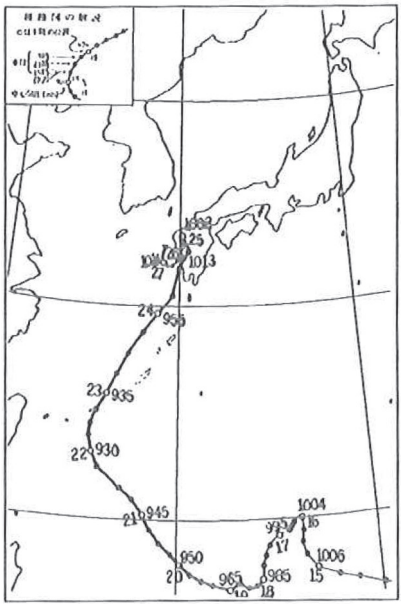




雨量分布図



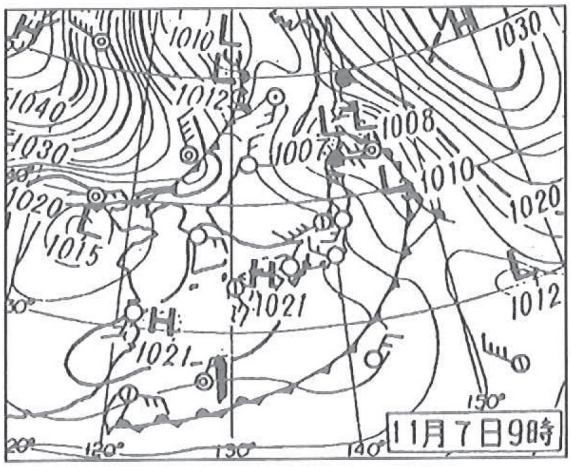
徳島駅構内のレール水浸しとなり列車は徐行運転（徳島新聞社提供）



経路図

台風 16 号は宮古島付近で中心気圧 930mb まで下がり，付近一帯で猛威を振い大被害をもたらせた。その後衰弱しながら北東進し九州薩摩半島に上陸して九州西岸を北西進した。徳島の最大風速は南東の風 12.5m/s，日降水量 178㎜，総降水量 394㎜，福原旭総降水量 724㎜。死者 1，負傷者 1，家屋全壊 1，床上浸水 448，床下浸水 3,611，一部破損 6，非住家 1，田冠水 461，道路損壊 7，橋流失 2，山崩れ 38，鉄道 2，罹災世帯 450，罹災者 1,806

1968 年（昭和 43 年）11 月 7 日　17 番札所井戸寺の火災



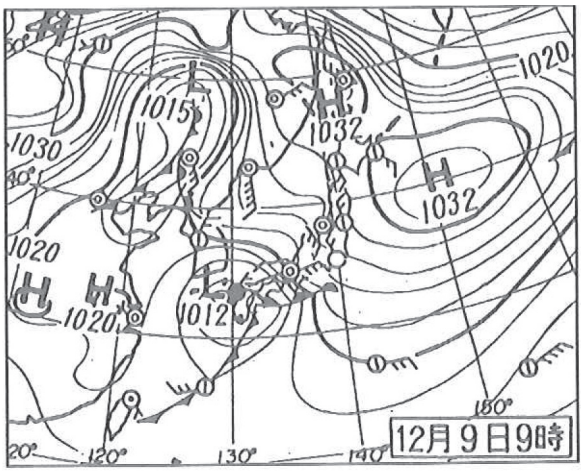
6 時頃，徳島市国府町の四国八十八か所霊場 17 番札所真言宗別格本山井戸寺から出火。本堂（木造平屋建瓦葺 160㎡）を全焼し，堂内にあった県指定文化財の七仏薬師如来を焼失した。また隣接の大日堂（木造平屋建瓦葺 66㎡）も半焼した。井戸寺は弘仁 6 年（西暦 815 年）弘法大師が開山したものと伝えられ，焼失した本堂は約 310 年前の満治 4 年に建てられたものである。

1968 年（昭和 43 年）11 月　少雨

10 月に続いて（10 月は平年の 30％）11 月も全般に降水量が少なく，徳島の月降水量は 10.5㎜で平年の 11％に当たり，開設以来第 1 位の少雨の記録となった。

1968 年（昭和 43 年）12 月 9 日　大雨（低気圧）

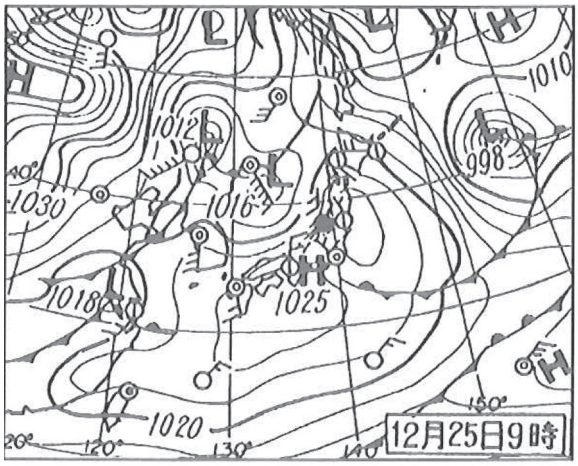
東支那海を東進して，九州南部から四国沖を通過した低気圧のため，雷を伴う季節はずれの大雨となった。日降水量　徳島 69㎜，日和佐 122㎜，椿泊 114㎜



1968 年（昭和 43 年）12 月 11 日　地震

20 時 45 分に地震が発生，震源地は徳島県西部であった。震度Ⅲ　徳島，多度津，高知，高松，Ⅱ　大阪，奈良

1968 年（昭和 43 年）12 月 25 日　鳴門海峡の流出油事故



19時33分頃，鳴門海峡で今治市のタンカー「三愛丸」（556t　乗組員 13 名）が四日市からハイオクタンガソリン 1,000kℓを積み，福岡県の西戸崎の石油基地へ向かう途中，中瀬岩礁に乗り上げ座礁した。このため，舟底に穴があき約 500kℓが海上に流出した。一時は海上で引火，爆発する恐れもあり，翌日の 5 時 30 分まで航行禁止の非常体制がとられた。

1968 年（昭和 43 年）12 月　高温

12 月下旬に一時的に冬型の気圧配置となったが月の前半は高く，月平均気温は 10.1℃。平年より 2.4℃高く，開設以来第 1 位の高温となった。

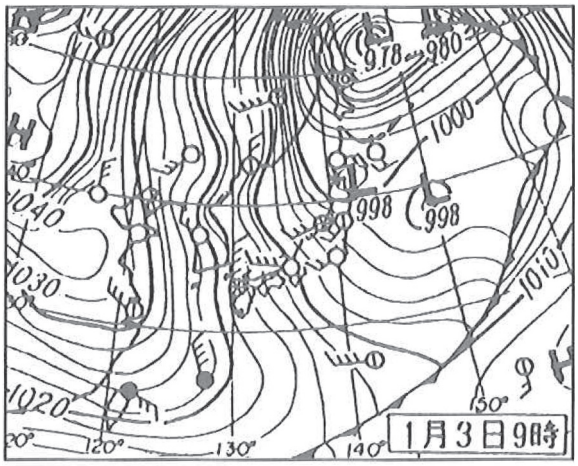
1969年

[昭和 44 年]

1969 年（昭和 44 年）1 月 2 日～ 3 日　大雪（西部山間部）



大雪となった八坂神社（徳島新聞社提供）



冬型の気圧配置が強まり，寒波の襲来で県西部で大雪となった。西祖谷，一宇，木屋平村などでは，交通機関が途絶し，雪中に孤立状態となった。

3 日 9 時の積雪　一宇 70cm，京上 33cm，池田 11cm，穴吹 12cm

1969 年（昭和 44 年）1 月 31 日　大雨（低気圧）

低気圧が九州南岸から四国を通過し，県南は大雨となった。

日降水量　椿泊 217㎜，日和佐 160㎜，宍喰 145㎜，徳島 53㎜，山崩れ 7

1969 年（昭和 44 年）2 月 11 日～ 14 日　濃霧

11 日夜～ 12 日朝，12 日夜～ 13 日朝，13 日～ 14 日朝，県沿岸一帯は濃霧に包まれ，海・空の交通機関のダイヤが大きく乱れた。これは低気圧が四国南岸に接近して通過し，その後移動性高気圧におおわれたため，12 日朝は放射冷却して霧が発生。13 日朝は日本海南部に前線が横たわり，南寄りの暖湿気流が流入して海上で冷却され発生した移流霧と，陸地の放射霧とが重なったため濃い霧となった。

1969 年（昭和 44 年）3 月 12 ～ 13 日　大雪（台湾低気圧）

台湾付近に発生した低気圧が急速に発達しながら，12 日午前に四国沖を通ったため大雪となった。この雪のため，陸・海・空のダイヤは運休などで乱れるとともに，ビニールハウスの全・半壊により農作物にも被害がでた。

12 日 9 時積雪　池田 42cm，芝生 29cm，穴吹 15cm，徳島 4cm，岩倉 41cm

1969 年（昭和 44 年）3 月 20 日　瑞巌寺の火災

12 時 55 分頃，徳島市東山手町 3 丁目の阿波の名刹　臨済宗妙心寺派瑞巌寺本堂西側の居宅から出火，火の回りが速く蜂須賀公ゆかりの書院など 3 棟　約 300㎡を全焼し，本堂の一部も消失した。瑞巌寺は仙台の松島，岐阜の小島にある寺とともに日本三瑞巌寺の一つで，焼けた書院は明治 8 年徳島城総取り壊しの際，城内西の丸にあたったものを移し建てたものである。

1969 年（昭和 44 年）3 月 21 日　地震

16 時 40 分頃，震源地を紀伊水道とする地震があり，徳島では震度Ⅲを記録した。

1969 年（昭和 44 年）4 月 4 日～ 5 日　強風

低気圧が発達しながら日本海を通過し冬型気圧配置となったため，4 日・5 日の両日は大荒れとなり，徳島の最大風速は西の風 17.0m/s（4 日），最大瞬間風速は西北西の風 25.9m/s（5 日）となった。

1969 年（昭和 44 年）4 月 13 日～ 15 日　濃霧

13 日夜から 14 日朝にかけ移流霧が発生し，15 日未明から昼前にかけ前日同様に濃霧となった。鳴門海峡では船舶の衝突 1，座礁 4 の海難事故が発生した。

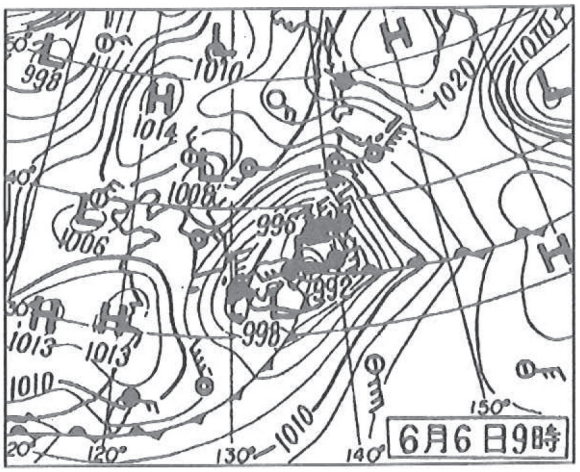
1969 年（昭和 44 年）4 月　小雨

上旬と下旬の降水量は非常に少なく，月降水量は 50㎜で平均 38% となり，開設以来第 3 位の少雨の月となった。

1969 年（昭和 44 年）5 月　高温

上旬から中旬にかけて非常に高温になり月平均気温 19.3℃で平年より 1.6℃高く開設以来第 2 位の高温の月となった。

1969 年（昭和 44 年）6 月 6 日　降ひょう

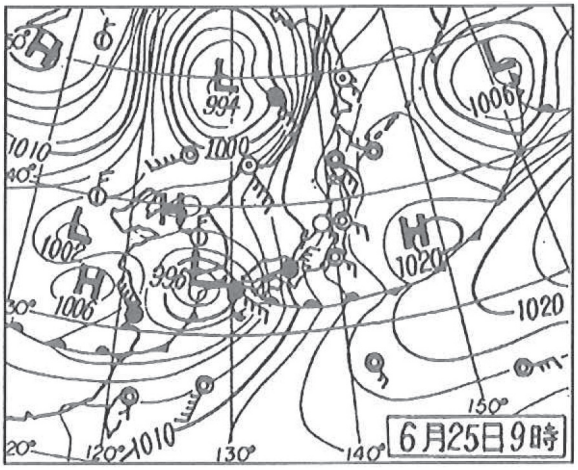


低気圧が四国沖を通過した後，上空には寒気が流入して大気が不安定になった。6 日 14 時頃，勝浦町一帯に約 2 分間，直径 1 ～ 2㎝のひょうが降り，蜜柑に小被害があった。（徳島新聞）

1969 年（昭和 44 年）6 月 8 日～ 10 日　異常乾燥

7 日から 10 日にかけて西日本は移動性高気圧におおわれて晴天が続き，空気は乾燥した。特に 6 月の徳島の最小湿度は 24％となり，6 月として開設以来第 1 位の記録となった。

1969年（昭和44年）6月25日～26日　大雨（梅雨前線）



低気圧が発達しながら山陰沖を東進し，梅雨前線の活動が活発となって，県南を中心に大雨が降った。

日降水量　宍喰 289㎜，剣山 279㎜，川上 251㎜，穴吹 55㎜，徳島 46㎜

死者 1，田冠水 80ha，道路損壊 1，山崩れ 5

1969年（昭和44年）6月29日～7月2日　大雨（梅雨前線）

25 ～ 26 日の大雨に続き再び梅雨前線の活動が活発となって大雨が降った。

日降水量　29 日　剣山 150㎜，1 日　京上 170㎜，剣山 139㎜

半壊 1，非住家被害 2，道路 2，山崩れ 10，鉄道被害 1

1969 年（昭和 44 年）7 月 4 日～ 5 日　大雨（梅雨前線）

低気圧が山陰地方を通過し，梅雨前線の活動が活発となって大雨が降った。

日降水量　剣山 173㎜，木頭 146㎜，徳島 60㎜

1969 年（昭和 44 年）7 月 7 日～ 8 日　大雨（梅雨前線）

梅雨前線と前線上の中国地方を通過した低気圧で，梅雨末期の大雨となった。

日降水量　剣山 136㎜，椿泊 121㎜，徳島 40㎜

1969 年（昭和 44 年）8 月 4 日　強風雨（台風 7 号）

北緯 27 度付近で発生し北上した台風 7 号は，4 日 19 時 30 分頃，潮岬付近に上陸し北東進した。本県への影響は少なかった。

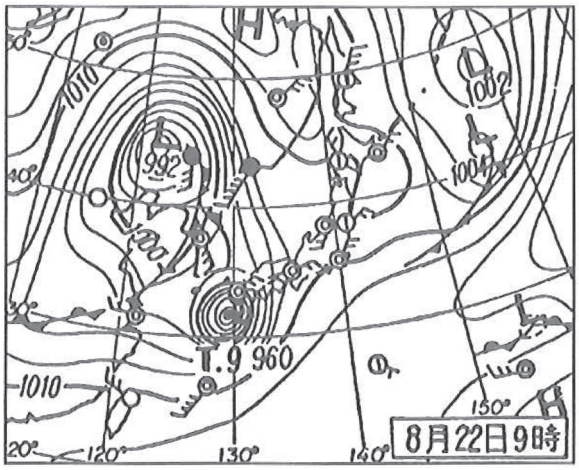
徳島の最大風速は南の風 12.7m/s，総降水量（3 日 9 時から 5 日 9 時まで）は福原旭 118㎜，剣山 115㎜，徳島 28㎜

家屋倒壊 1，山崩れ 1，道路損壊

1969 年（昭和 44 年）8 月 20 日　降ひょう

日本海にあった寒冷前線の南下で，15 時 30 分頃貞光町一帯に雷雨が発生。約 15 分間にわたり直径 1.5㎝のひょうが降り，葉タバコに被害があった。（徳島新聞）

1969 年（昭和 44 年）8 月 22 日～ 23 日　台風 9 号



グアム島の西方海上で発生した台風 9 号は，沖縄の西方を通り，22 日 10 時前に九州南部に上陸した。四国南部をかすめて本州を縦断し，殆んど全国に影響を及ぼしたが，徳島では被害は軽微であった。

徳島での最大風速は南東の風 17.0m/s，総降水量は徳島 89.5㎜，木頭 300㎜，福原旭 286㎜。

非住家倒壊 1，床下浸水 25，山崩れ 4

1969 年（昭和 44 年）9 月 7 日　雷雨

寒冷前線の通過で県下は激しい雷雨に見舞われ，徳島市，阿南市，那賀川町，羽ノ浦町などで落雷のため停電があった。また，徳島駅では落雷による電気設備の故障により，ダイヤが混乱した。

日降水量は小松島 151㎜，富岡 103㎜，徳島市 45㎜。

1969 年（昭和 44 年）9 月　少雨

秋雨前線の活動は弱く台風の影響もなかったので，徳島の月降水量は 75㎜で平年の 29% に当り，少雨の順位は開設以来第 5 位の記録となった。

1969 年（昭和 44 年）11 月 15 日　大雨（二つ玉低気圧）

二つ玉低気圧の通過で，県南ではこの季節には珍しい大雨となった。

日降水量は椿泊 194㎜，伊島 146㎜，徳島 35㎜。

1969 年（昭和 44 年）11 月 30 日　大雨（低気圧）

低気圧が山陰沖を通過し，県南の椿泊では 29 日 135㎜，30 日 27㎜，合計 162㎜の大雨があった。

1969 年（昭和 44 年）12 月 7 日　大雨（低気圧）

二つ玉低気圧が東進し，県下は大雨となり山崩れ 2 ヶ所があった。

総降水量　川上 174㎜，小松島 141㎜，徳島 66㎜

1969 年（昭和 44 年）12 月 8 日～ 45 年 1 月 29 日　無降水

高気圧におおわれることが多く穏やかな晴天が続き，53 日間無降水が続いた。